

Le lemme d'Abhyankar perfectoide

<https://ryo1203.github.io>

概要

Le lemme d'Abhyankar perfectoide ([An1]) の何章かを日本語でメモする。和訳そのものではなくいくつか書き足したり省略したりしている。まだ理解できていない命題などには?をつけてある。3 章までが元々の目的で、書き終えたため以降は?を解消していき適宜 4 章以降も記述していく。章の番号などは原文に揃える。

目次

| | | |
|-----|--|----|
| 1 | Preliminaires de presque-algebre | 2 |
| 1.1 | Cadre | 2 |
| 1.2 | V^a -module | 2 |
| 1.3 | Lemmes de Mittag-Leffler et de Nakayama | 3 |
| 1.4 | V^a -algebra | 3 |
| 1.5 | Recadrage | 4 |
| 1.6 | Platitude | 5 |
| 1.7 | A -Modules projectifs finis | 5 |
| 1.8 | A -algebres étales finies | 6 |
| 1.9 | Extensions galoisiennes | 7 |
| 2 | La categorie bicomplete des algebres de Banach uniformes | 12 |
| 2.1 | Algebres de Banach | 12 |
| 2.2 | Normes spectrales | 15 |
| 2.3 | Dictionnaire | 18 |
| 2.4 | Extensions entieres d'algebres normees uniformes | 33 |
| 2.5 | Monomorphismes (et recadrage) | 36 |
| 2.6 | Epimorphismes (et localisation) | 45 |
| 2.7 | Produits (et transformee de Gelfand) | 51 |
| 2.8 | Limites | 53 |
| 2.9 | Colimites | 54 |
| 3 | La categorie bicomplete des algebres perfectoides | 57 |
| 3.1 | Corps perfectoides | 57 |
| 3.2 | Algebres perfectoides | 58 |
| 3.3 | Basculement | 61 |

| | | |
|-----|---|----|
| 3.4 | Extensions étalefinies d'algèbres perfectoides | 67 |
| 3.5 | Monomorphismes (et recadrage) | 74 |
| 3.6 | Epimorphismes (et localisation) | 81 |
| 3.7 | Produits (et transformée de Gelfand) | 83 |
| 3.8 | Limites | 84 |
| 3.9 | Colimites | 87 |
| 4 | Analyse perfectoïde autour du "théorème d'extension de Riemann" | 88 |
| 4.1 | Entrée en matière | 88 |

1 Préliminaires de presque-algèbre

1.1 Cadre

cadre もしくは basic setup とは、環 V とその冪等イデアル $\mathfrak{m} = \mathfrak{m}^2$ の組 (V, \mathfrak{m}) のことである。

[GR] と同様に $\tilde{\mathfrak{m}} := \mathfrak{m} \otimes_V \mathfrak{m}$ が V 上平坦であることを仮定する。この仮定は base change で不変である ([GR] Remarque 2.1.4)。*1 \mathfrak{m} が V 上平坦であるよりも弱い条件である。もし V 上平坦であれば $\mathfrak{m} \cong \tilde{\mathfrak{m}}$ となる。

$\pi \in V$ を非零因子とし、 (π^{1/p^i}) を整合的な p 乗根の列とすると、単項イデアルの和集合

$$\pi^{1/p^\infty} V := \bigcup_{i \geq 1} \pi^{1/p^i} V \quad (1.1)$$

を上記の \mathfrak{m} として取ることが出来る。本稿ではこの場合を考えれば十分である。

1.2 V^a -module

V^a 加群の圏 ($V^a\text{-Mod}$) (正確には $(V, \mathfrak{m})^a$ 加群の圏) とは V 加群の圏 ($V\text{-Mod}$) の \mathfrak{m} -torsion なものからなる Serre 部分圏による圏の局所化のことである。ここで、 V 加群が \mathfrak{m} -torsion であるとは、 \mathfrak{m} によって消えることであり、これを almost zero であるという。

$\text{Hom}_{V^a}(M, N) = \text{Hom}_V(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_V M, N)$ となる ([GR] 2.2.2)。

V 加群の射が almost injective/almost surjective であるとは、その核/余核が almost zero であることである。これらは V^a 加群の圏における mono 射と epi 射に対応している。

V^a 加群の圏はアーベル圏である。とくに V 加群の射が almost injective かつ almost surjective であることは almost isomorphism であること ($V^a\text{-Mod}$ で同型であること) に等しい。対象に関しては恒等的な局所化関手 $M \mapsto M^a$ は次の随伴を持つ。

- (1) 右随伴: $N \mapsto N_* := \text{Hom}_{V^a}(V^a, N)$ (これを almost element という)。*2
- (2) 左随伴: $N_! := \tilde{\mathfrak{m}} \otimes_V N_*$ 。

*1 環準同型 $V \rightarrow W$ があるとき、 $\mathfrak{m} \subset V$ を base change した $\mathfrak{m}_W := \mathfrak{m} \otimes_V W$ とイデアルの拡大 $\mathfrak{m}W$ について、 $\mathfrak{m}_W \cong \mathfrak{m}W$ である。これによって $(W, \mathfrak{m}W)$ は cadre になる。

*2 "右" 随伴だから Hom の "右" と可換な \varprojlim と可換。

とくにこれらは colimit と limit について可換であり、

$$\mathrm{Hom}_{V^a\text{-Mod}}(M^a, N^a) \cong \mathrm{Hom}_V(\tilde{m} \otimes_V M, N) \quad (1.2)$$

が成り立っている ([GR] 2.2.2)。さらに $(N_*)^a \cong N$ と $(M^a)_* \cong \mathrm{Hom}_V(\tilde{m}, M)$ が成り立つ (この右辺も混同のない限りにおいて M_* と書くこともある)。関手 $(-)_*$ は右完全ではないが、射 $N \rightarrow N'$ が epi 射であることと $N_* \rightarrow N'_*$ が almost surjective であることは同値である。

1.3 Lemmes de Mittag-Leffler et de Nakayama

現在の文脈における Mittag-Leffler の補題は次のとおりである。 (N^n) を V^a 加群の射影系とし、その間の射が epi 射であれば $\varprojlim N^n \rightarrow N^0$ は epi 射になる。これは $V\text{-Mod}$ で同様に成り立つことと、二つの右完全関手 $(-)_!$ と $(-)^a$ を順番に作用させることによって示される $((-)_!)$ と $(-)^a$ の合成は $V^a\text{-Mod}$ 上で恒等的である)*³。

以上よりアーベル圏 $V^a\text{-Mod}$ は bicomplete である。(すなわち colimit と limit を持つ) また、 V を generator として持ち、epi 射の積はまた epi 射になり、したがって \lim^i はアーベル群の圏におけるものと同じ形になる。とくに可算な添字集合であるとき $i > 1$ は消える。局所化関手は \lim^1 と可換であるので通常の余核として計算できる。

現在の文脈における完備な加群に対する中山の補題は次のとおりである ([GR] Lem.5.3.3)*⁴。 I を V のイデアルとし、 $f: M \rightarrow N$ を I 進完備な V^a 加群*⁵の間の射とする。このとき $M/I \rightarrow N/I$ が epi 射ならば f も epi 射になる。

実際、水平方向の (各次数ごとに積をとる) 射が epi 射である可換図式 (テンソル積や gr は $V\text{-Mod}$ で取っている)

$$\begin{array}{ccc} (\mathrm{gr}_I V) \otimes_{V/I} M/IM & \longrightarrow & \mathrm{gr}_I M \\ \downarrow 1 \otimes \bar{f} & & \downarrow \mathrm{gr}_I f \\ (\mathrm{gr}_I V) \otimes_{V/I} N/IN & \longrightarrow & \mathrm{gr}_I N \end{array}$$

について、仮定から左の射が epi 射なので $\mathrm{gr}_I f$ も epi 射になっている。これより、 $f_n: M/I^n M \rightarrow N/I^n N$ も epi 射になり、蛇の補題から $\mathrm{Ker}(f_{n+1}) \rightarrow \mathrm{Ker}(f_n)$ も epi 射になる。limit を取ることによって Mittag-Leffler より $\lim^1 \mathrm{Ker}(f_n) = 0$ になるので f は epi 射になる。

1.4 V^a -algebra

V^a 代数 (本稿では常に可換なもの) とは $V^a\text{-Mod}$ における (可換) モノイド対象である。 V^a 代数からなる $V^a\text{-Mod}$ のモノイダル部分圏を $V^a\text{-Alg}$ と表す。関手 $(-)^a$ は $V\text{-Alg}$ に $V^a\text{-Alg}$ を対応付け、(部分圏への制限によって) $(-)_*$ を右随伴として持つ。また、左随伴として $((-)_!)$ ではなく $((-))_!$ を持つ ([GR] 2.2.25)。ここで [GR] Rem.2.2.28 の後には書いている通り $((-))_!^a \cong \mathrm{id}_{V^a\text{-Alg}}$ になる。

圏 $V^a\text{-Alg}$ はテンソル積を持ち、 $(A \otimes_V B)^a \cong A^a \otimes_{V^a} B^a$ となる。

³ \tilde{m} が V 上平坦であるので $N_! = \tilde{m} \otimes_V N_ \cong \tilde{m} N_* \subset N_*$ となる。すると $N_! \cong \tilde{m} N_*$ と N_* が almost isomorphism であることから $(N_!)^a \cong (N_*)^a \cong N$ より従う。

*⁴ [AM] Lemma 10.23 の類似。

*⁵ V^a 加群が I 進完備であるとは、自然な射 $M \rightarrow \varprojlim M/I^n$ が $V^a\text{-Mod}$ で同型になることである ([GR] Def 5.3.1(iv))。

もし A が V^a 代数だったとすると、圏 $A\text{-Mod}$ や $A\text{-Alg}$ を定義できる ([GR] 2.2.12)。*⁶ また、 M と N を A 加群とするとき、 $\text{Hom}_{A\text{-Mod}}(M, N)$ は自然に A_* 加群の構造を持つので

$$\text{alHom}_A(M, N) := (\text{Hom}_{A\text{-Mod}}(M, N))^a \quad (1.3)$$

を定義できる。これを almost morphism という ([GR] 2.2.11)。関手 $(-)^a$ は $A_*\text{-Alg}$ に $A\text{-Alg}$ に対応付け、 $(-)_*$ を右随伴として持つ。 A 代数 B に対して $B_* = \text{Hom}_V(\tilde{\mathfrak{m}}, B)$ は加群の構造だけでなく、確かに A_* 代数の構造を持つ。とくに (非自明な) 積構造を持つ。実際、[GR] 2.2.9 のように定まる。つまり $a, b \in B_*$ について、 $(V, \tilde{\mathfrak{m}})$ が cadre であることから得られる同型 $\nu: \tilde{\mathfrak{m}} \otimes_V \tilde{\mathfrak{m}} \rightarrow \tilde{\mathfrak{m}}$ によって、 $x \in \tilde{\mathfrak{m}}$ に対して $(a \cdot b)(x) := \mu_B \circ (a \otimes b) \circ \nu(x)$ によって定義される。

\mathcal{K} 代数 (結合的可換かつ単位的) の圏が (small) limit と colimit を持ち、加群化関手 ($\mathcal{K}\text{-Mod}$ への忘却関手) は limit と filtered colimit を保つことがわかっている。 $(-)^a$ を介して、almost algebra に対しても同じことが言える。有限直積への分解 $V = \coprod V_i$ を与えることは冪等な完全正規直交系 $e_i \in V_i$ を与えることに等しい。

圏 $A\text{-Mod}$ はテンソル積 \otimes_V を持ち、これが $A\text{-Alg}$ に余積を与える。

$V^a\text{-Alg}$ の射 $\varphi: A \rightarrow B$ が mono 射であることと $\varphi_*: A_* \rightarrow B_*$ が almost injective であることは同値である。この場合を B が A の**拡大**という。

1.4.1 Exemple

almost algebra は次のような場合に自然に出てくる。 \mathcal{K} を非離散的な付値をもつ完備体とする。 $V := \mathcal{K}^\circ$ を付値環とし、 $\mathfrak{m} := \mathcal{K}^{\circ\circ}$ を付値イデアルとする。 ϖ を \mathfrak{m} のゼロではない元とし、 A を ϖ -torsion が無い、もしくは infinite ϖ -divisible *⁷が無いような V 代数とする。 \mathcal{K} 代数 $A[1/\varpi]$ に対して ϖ から得られる自然なノルムを与える。このとき単位円板は $(A^a)_*$ に等しい (命題 2.3.1(2b)) (一般には単位円板は A と異なるが almost isomorphism になることがわかっている)。

1.5 Recadrage

cadre の変換 $(V, \mathfrak{m}) \rightarrow (V', \mathfrak{m}')$ を考える (V から V' への環準同型であり、 \mathfrak{m} を \mathfrak{m}' の中へ移すものである)。スカラーの制限による完全関手 $V'\text{-Mod} \rightarrow V\text{-Mod}$ によって、完全関手

$$(V', \mathfrak{m}')^a\text{-Mod} \longrightarrow (V, \mathfrak{m})^a\text{-Mod} \quad (1.4)$$

を得る。もし $\mathfrak{m}' = V' = V$ だとすると、この関手は局所化関手 $(-)^a: V\text{-Mod} \rightarrow (V, \mathfrak{m})^a\text{-Mod}$ に等しい。*⁸ 同様にして環構造を変えないスカラーの制限による関手 $(V', \mathfrak{m}')^a\text{-Alg} \rightarrow (V, \mathfrak{m})^a\text{-Alg}$ が定義できる。この関手で A' に A が対応されるとき、次の関手

$$A'\text{-Mod} \longrightarrow A\text{-Mod}, \quad (1.5)$$

$$A'\text{-Alg} \longrightarrow A\text{-Alg} \quad (1.6)$$

*⁶ 対象は通常の A 加群や A 代数で考えられ、射のみが異なる。一般の”モノイダル圏上の加群”という概念に等しい。

*⁷ $x \in A$ が infinite ϖ -divisible であるとは、任意の正整数 n について $x \in \varpi^n A$ であるようなものである。

*⁸ (V, V) を cadre とするときの almost zero module は zero module に等しいので $(V, V)^a\text{-Mod}$ は $V\text{-Mod}$ そのものである。

を *recadrage* という。とくに対象の下部構造は変化していないが、cadre が変化している。もし $\mathfrak{m}' = V' = V$ だとすると、この関手は局所化関手 $(-)^a: A\text{-Mod}/\text{Alg} \rightarrow (V, \mathfrak{m})^a\text{-Mod}/\text{Alg}$ に等しい。もし \mathfrak{m} が \mathfrak{m}' を生成するとすると、*recadrage* は同型になる。これは $A' \mapsto A$ と対応しているため、もともとその下部環構造は変化しておらず、その上の加群も変化せず、 \mathfrak{m} が \mathfrak{m}' を生成していることから almost zero module であることも変化しないからである。ここで、almost element をとる関手 $(-)_* (= ((-)^a)_*): V'\text{-Mod} \rightarrow V\text{-Mod}$ と *recadrage* を一度挟む関手 $V'\text{-Mod} \rightarrow (V')^a\text{-Mod} \rightarrow V^a\text{-Mod} \rightarrow V\text{-Mod}$ の二つの関手の間の自然変換

$$\text{Hom}_{V'}(\tilde{\mathfrak{m}}', N) \longrightarrow \text{Hom}_V(\tilde{\mathfrak{m}}, N) \quad (1.7)$$

を (自然に) 与えることが出来る。

感覚的には、 $\mathfrak{m} \subset \mathfrak{m}'$ であることから”almost”性 (almost zero など) は *recadrage* によってより緩い条件になる。^{*9}しかし \mathfrak{m} が \mathfrak{m}' を生成する場合は変化しない。

1.6 Platitude

A 加群 M が flat であるとは、 $A\text{-Mod}$ 上の自己関手 $- \otimes_A M$ が完全になることである。

射 $\varphi: A \rightarrow B$ が (faithfully)flat であるとは、 $B \otimes_A -: A\text{-Mod} \rightarrow B\text{-Mod}$ が (faithful)exact になることである。射 φ が flat(faithfully flat) であることと、 B が A 加群として flat(φ が mono 射かつ B/A が A 加群として flat) は同値 ([GR] 3.1.2(vi))。^{*10}もし φ_* が flat(faithfully flat) であればこの条件は満たされる。さらに、 $\varphi: A \rightarrow B$ が faithfully flat であることと $\varphi_{!!}: A_{!!} \rightarrow B_{!!}$ が faithfully flat であることは同値 ([GR] 3.1.3 ii)。^{*11}(faithfully)flat なものたちの filtered colimit は、また (faithfully)flat になる。base change や合成などについての通常のものと同様な性質も成り立っている ([GR] 3.1.2)。

1.7 A -Modules projectifs finis

今までのものと異なり、通常に加群とは微妙に異なる状況であるような性質について見ていく。

1.7.1

A を V^a 代数とする。 A 加群 P が finite projective であるとは、任意の $\eta \in \mathfrak{m}$ に対して、ある正整数 n と A 加群の射 $P \rightarrow A^n \rightarrow P$ であって、この合成が ηid_P になっていることである (この性質は $A\text{-Mod}$ での P の同型類によらない)。

finite projective であることは以下の二つの条件を満たすことと等しい ([GR] 2.3.10(i), 2.4.15)。

- (a) P が almost projective である。すなわち、任意の A 加群 N と任意の $i > 0$ で $\mathfrak{m} \text{Ext}_A^i(P, N) = 0$ となる。
- (b) P は almost finite type である。すなわち、任意の $\eta \in \mathfrak{m}$ について、射 $A^{n(\eta)} \rightarrow P$ が存在して、その余核が η によって消える。

^{*9} \mathfrak{m} や \mathfrak{m}' を掛けて消えるものを無視するが、 \mathfrak{m} より大きい \mathfrak{m}' を掛けても消えなければならない方が条件が厳しい。

^{*10} faithfully flat の方については、 $0 \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow B/A \rightarrow 0$ に関する Tor sequence を考えれば良い。

^{*11} 一般に $(-)_{!!}$ で flat 性は保たれない。

1.7.2 Remarque

- (1) finite projective な加群 P は flat である ([GR] 2.4.18)。加えて、 P が A 加群として faithful (すなわち、 $A \rightarrow (\text{End}(P))^a$ が mono 射) になるならば faithfully flat である。
- (2) P を finite projective であるとき、その外積 $\bigwedge^r P$ も finite projective になる。また、trace morphism と呼ばれる射 $\text{tr}_{P/A}: (\text{End}(P))^a \rightarrow A$ を得る ([GR] 4.1.1)。
- (3) A' を faithfully flat な A 代数とする。このとき P が finite projective な A 加群であることと、 $P \otimes_A A'$ が finite projective な A' 加群であることは同値 ([GR] 3.2.26 (ii)(iii))。

補題 1.7.1. I を A のイデアルとし、 A は $(V^a$ 代数として) I 進完備であるとする。このとき任意の finite projective な A 加群 P は $(A$ 加群として) I 進完備である。

証明. ([GR] 5.3.5 参照) 自然な射 $P \rightarrow \hat{P} := \varprojlim P/I^n$ が $(A\text{-Mod での})$ 同型になることを示せば良い。任意の $\eta \in \mathfrak{m}$ について、ある正整数 n が存在して可換図式

$$\begin{array}{ccccc} P & \longrightarrow & A^n & \longrightarrow & P \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ \hat{P} & \longrightarrow & \hat{A}^n & \longrightarrow & \hat{P} \end{array}$$

を得る。水平方向の合成はともに ηid であり、真ん中の垂直方向の射は A の I 進完備性から同型になる。図式を追うことで $P \rightarrow \hat{P}$ の核と余核は η で打ち消されることがわかる。よって $P \rightarrow \hat{P}$ は $A\text{-Mod}$ で同型になる。 \square

finite projective な A 加群 P が of (constant) rank r であるとは、 $\bigwedge^{r+1} P = 0$ かつ、 $\bigwedge^r P$ が可逆 A 加群^{*12}になることである ([GR] Def 4.3.9 (iv))。[GR] 4.4.24 によれば、このような加群は fpqc topology に関して階数 r の局所自由加群になっている (この結果は以降では使わない)。

1.8 A -algebres étales finies

A 代数 B が finite étale/finite étale of rank r とは次の二条件を満たすことである。

- (a) B は finite projective/finite projective of rank r な A 加群である。
- (b) B は unramified である。すなわち、 A 代数としての分解 $B \otimes_A B \cong B \times C$ であって、この同型と第一成分の射影の合成 $B \otimes_A B \rightarrow B \times C \rightarrow B$ は積を取る準同型 $\mu_B: B \otimes_A B \rightarrow B$ と一致するものがある。

(a) のもとで、(b) の条件と μ_B が flat であることは同値 ([GR] 3.1.2 (vii), 3.1.9)。

1.8.1 Remarque

- (1) finite étale 拡大 $A \hookrightarrow B$ は faithfully flat である。

^{*12} A 加群 M が可逆であるとは、 $M \otimes_A M^* \cong A$ となることである。ただし、 $M^* := \text{alHom}_A(M, A)$ である。

- (2) B を A 上 finite étale とするとき A 加群の射である trace 写像として $\mathrm{Tr}_{B/A}: B \rightarrow A$ が、 $b \in B$ の積による B 上の自己準同型のトレース () を取ることによって得られる ([GR] 4.1.7)。これは base change と可換であり ([GR] 4.1.8(ii))、 B の元の積との合成によって B とその A 双対が同型になる ([GR] 4.1.14)。 B_* はその A_* 双対と同型になる。 B がとくに finite étale 拡大のときは $\mathrm{Tr}_{B/A}$ は epi 射になる (上記 (1) と [GR] 4.1.11)。
- (3) A' と B を A 代数とし、 $A \hookrightarrow A'$ が faithfully flat であるとする。このとき B が A 上 finite étale (of rank r) であることと $B \otimes_A A'$ が A' 上 finite étale (of rank r) であることは同値 ([GR] 2.4.18, 3.2.26(ii))。

1.8.2

Grothendieck の "remarkable equivalence" は現在の文脈においても、 $\mathfrak{m} = \pi^{1/p^\infty} V$ か、 A が π 進完備であれば成り立つ。すなわち、 π による剰余によって finite étale A 代数と finite étale A/π 代数は圏同値になる ([GR] Theo 5.3.27)。

1.9 Extensions galoisiennes

1.9.1

$A \hookrightarrow B \hookrightarrow C$ を V^a 代数の拡大とする。 $X \subset \mathrm{Hom}_A(B, C)$ として A 上の環準同型からなる集合とする。このとき標準的な C 代数の射

$$B \otimes_A C \longrightarrow \prod_{\chi \in X} C \quad (1.8)$$

$$b \otimes c \longmapsto (\chi(b)c)_{\chi \in X} \quad (1.9)$$

が取れる。

また、 G を B の A 自己同型からなる有限群とすると、 $B \rightarrow B \otimes_A B, b \mapsto 1 \otimes b$ によって $B \otimes_A B$ に B 加群の構造を入れると、標準的な B 代数の射

$$B \otimes_A B \longrightarrow \prod_{\gamma \in G} B \quad (1.10)$$

$$b \otimes b' \longmapsto (\gamma(b)b')_{\gamma \in G} \quad (1.11)$$

が得られる。 n を G の位数とし、 G^n の元 $(\gamma_1, \dots, \gamma_n)$ に、その添字の入れ替えによって \mathfrak{S}_n を作用させる。このとき輪積 (produit en couronne) によって群 $\mathfrak{S}_n \wr G$ が定義できる。^{*13}ここで $\prod_{\gamma \in G} B$ に $(\sigma, (\gamma_1, \dots, \gamma_n))(b_1, \dots, b_n) = (\gamma_{\sigma^{-1}(1)}(b_{\sigma^{-1}(1)}), \dots, \gamma_{\sigma^{-1}(n)}(b_{\sigma^{-1}(n)}))$ によって $\mathfrak{S}_n \wr G$ を A 自己同型に作用させる ($G \subset \mathrm{Aut}_A(B)$ であることから A 自己同型であることがわかる)。

B^G によって B の中の G -不変なものからなる A 代数を表す (B^G は A 加群としては $B \xrightarrow{(\dots, \gamma^{-1}, \dots)} \prod_{\gamma \in G} B$ の核と一致する)。

^{*13} $\mathfrak{S}_n \wr G$ は上記の \mathfrak{S}_n の G^n への作用による半直積とする。すなわち、集合としては $\mathfrak{S}_n \times G^n$ であり、積は $(\sigma, (\gamma_1, \dots, \gamma_n))(\sigma', (\gamma'_1, \dots, \gamma'_n)) = (\sigma\sigma', (\gamma_{\sigma^{-1}(1)}\gamma'_1, \dots, \gamma_{\sigma^{-1}(n)}\gamma'_n))$ として定義される。

1.9.2

V^a 代数の拡大 $A \hookrightarrow B$ が群 G に関して Galois^{*14} であるとは、 A 加群としての同型 $B^G \cong A$ があり、(1.10) の標準的な射 $B \otimes_A B \rightarrow \prod_{\gamma \in G} B$ が B 加群として同型になることである。この群 G をこの拡大の Galois 群と呼ぶ。 $(-)_*$ が colimit と可換なので、Galois であることは $(B_*)^G = A_*$ かつ $(B \otimes_A B)_* \rightarrow \prod_{\gamma \in G} B_*$ が (通常の意味で) 同型になっていることである。^{*15} 自然に $G \times G$ は $B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B$ 上の A 自己準同型を得るが、次の対応

$$G \times G \longrightarrow \mathfrak{S}_n \wr G \quad (1.12)$$

$$(\gamma, 1) \longmapsto (r_{\gamma^{-1}}, (1, \dots, 1)) \quad (1.13)$$

$$(1, \gamma) \longmapsto (l_\gamma, (\gamma, \dots, \gamma)) \quad (1.14)$$

によって $G \times G$ は $\mathfrak{S}_n \wr G$ の部分群になる。ただし、 $g \in G$ について l_g と r_g はそれぞれ $G = \{\gamma_1, \dots, \gamma_n\}$ と添字付けるとき、

$$\gamma_{r_g(i)} = \gamma_i \circ g \quad (1.15)$$

$$\gamma_{l_g(i)} = g \circ \gamma_i \quad (1.16)$$

によって $l_g, r_g \in \mathfrak{S}_n$ とみなす。とくに $\mathfrak{S}_n \wr G$ の部分群になることで $G \times G$ は $B \otimes_A B$ の A 自己同型からなる群である。

- 命題 1.9.1.** (1) $A \hookrightarrow B$ が G に関する Galois 拡大であるとする、これは階数が G の位数であるような finite étale 射になる (とくに (1) から faithfully flat になる)。また、trace 写像 $\text{Tr}_{B/A}$ が G 共役元の和 $b \mapsto \sum_{\gamma \in G} \gamma(b)$ によって与えられる。
- (2) A' を A 代数とする。 $A \hookrightarrow B$ が G に関する Galois 拡大であるならば $A' \hookrightarrow B \otimes_A A'$ も G に関する Galois 拡大になる。 A' が A 上 faithfully flat のときはこの逆も成り立つ。
- (3) C が G に関する Galois 拡大 $A \hookrightarrow B$ の中間にある拡大で、 $C \hookrightarrow B$ が $H \triangleleft G$ に関する Galois 拡大であるとする。このとき $B^H \cong C$ から自然に、 G/H は C から B への A 上の環準同型からなる集合になり、(1.8) の標準的な射 $B \otimes_A C \rightarrow \prod_{\gamma \in G/H} B$ を考えることが出来るが、これは同型になる。さらに $A \hookrightarrow C$ は階数 $|G/H|$ の finite étale 射となる。

証明. (1) 重要な点は B が A 上 finite étale であって、とくに section 1.8 の定義から、 B が finite projective な A 加群になっていることである (古典的な環の Galois 理論の議論をもとに考えていく)。 B は A 上 G に関して Galois ゆえ $(B_*)^G = A_*$ となっている。 B_* の A_* 上の共役元の和を与える写像

$$t_{B/A}: B_* \longrightarrow (B_*)^G = A_* \quad (1.17)$$

$$b \longmapsto \sum_{\gamma \in G} \gamma(b) \quad (1.18)$$

^{*14} almost Galois ということもある。

^{*15} $(-)_*$ が一般にテンソル積と可換ではないので、 B が A 上 Galois だとしても B_* が A_* 上 Galois であるか否かはわからない。さらに $(-)_\#$ が一般に有限積と可換ではないので、 $B_\#$ が $A_\#$ 上 Galois であるか否かもわからない。

をとる。ここで B を $B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B$ の第一成分の射影^{*16}によって $B \otimes_A B$ 加群とみなすことにする (これは $\mu_B: B \otimes_A B \rightarrow B$ によって $B \otimes_A B$ の構造を入れていることに等しい)。 $B = (B_*)^a$ であることに注意すると、 $V^a\text{-Alg}$ のテンソル積の定義から

$$B \otimes_A B = (B_*)^a \otimes_{(A_*)^a} (B_*)^a = (B_* \otimes_{A_*} B_*)^a \quad (1.19)$$

ゆえに、 $(B \otimes_A B)_* = (B_* \otimes_{A_*} B_*)_*$ となることから得られる自然な射 $B_* \otimes_{A_*} B_* \rightarrow (B \otimes_A B)_*$ は almost isomorphism になる。

任意の $\eta \in \mathfrak{m}$ を一つ固定する。仮定から $(B \otimes_A B)_* \cong \prod_{\gamma \in G} B_*$ より、 $(1, 0, \dots, 0) \in \prod_{\gamma \in G} B_*$ に対応する冪等元 $e'_\eta \in (B \otimes_A B)_*$ が取れる。 almost isomorphism であることから、余核が η で打ち消されるので、とくに $e_\eta := \eta e'_\eta \in B_* \otimes_{A_*} B_*$ となる。すると

$$e_\eta^2 = (\eta e'_\eta)^2 = \eta^2 e'^2_\eta = \eta^2 e'_\eta = \eta e_\eta \quad (1.20)$$

より $e_\eta^2 = \eta e_\eta \in B_* \otimes_{A_*} B_*$ となる。さらに積を取る写像 $\mu_{B_*}: B_* \otimes_{A_*} B_* \rightarrow B_*$ の核 $\text{Ker}(\mu_{B_*}) \subset B_* \otimes_{A_*} B_*$ はそれぞれ $(B \otimes_A B)_*$ と $\prod_{\gamma \in G} B_*$ のイデアル I, J に almost isomorphism である。まず、 J は射の構成 (1.10) から $\{0\} \times \prod_{\gamma \in G \setminus \{\text{id}_{B_*}\}} B_*$ に含まれる。ゆえに $(1, 0, \dots, 0)$ によって打ち消される。元の対応を考えれば $(B \otimes_A B)_*$ において $e'_\eta I = 0$ となる。 $\text{Ker}(\mu_{B_*})$ と I が almost isomorphism から $\eta I \cong \text{Ker}(\mu_{B_*})$ である。ゆえに

$$e_\eta \text{Ker}(\mu_{B_*}) = \eta e'_\eta \text{Ker}(\mu_{B_*}) \cong \eta^2 e'_\eta I = 0 \quad (1.21)$$

より、 $e_\eta \in B_* \otimes_{A_*} B_*$ は $\text{Ker}(\mu_{B_*})$ を打ち消す。また、 e'_η と $(1, 0, \dots, 0)$ の対応と (1.10) の構成から

$$\mu_{B_*}(e_\eta) = \mu_{B_*}(\eta e'_\eta) = \eta 1_{B_*} \quad (1.22)$$

より $\mu_{B_*}(e_\eta) = \eta 1_{B_*} \in B_*$ となる。

$e_\eta \in B_* \otimes_{A_*} B_*$ より、ある正整数 $n(\eta)$ によって

$$e_\eta := \sum_{i=1}^{n(\eta)} b_i \otimes b'_i \quad (1.23)$$

と表せる。 $e_\eta = \eta e'_\eta$ であり e'_η が $(1, 0, \dots, 0)$ に対応していることから、 (1.10) によって e_η を移せば、 $G \ni \gamma \neq \text{id}_{B_*}$ ならば $\sum_{i=1}^{n(\eta)} \gamma(b_i) b'_i = 0$ かつ、 $\sum_{i=1}^{n(\eta)} b_i b'_i = \eta 1_{B_*}$ となる。したがって、 $b \in B_*$ について、

$$\eta b = \sum_{i=1}^{n(\eta)} b b_i b'_i = \left(\sum_{i=1}^{n(\eta)} b b_i b'_i \right) + \sum_{\gamma \in G \setminus \{\text{id}_{B_*}\}} \left(\sum_{i=1}^{n(\eta)} \gamma(b b_i) b'_i \right) = \sum_{\gamma \in G} \sum_{i=1}^{n(\eta)} \gamma(b b_i) b'_i = \sum_{i=1}^{n(\eta)} t_{B/A}(b b_i) b'_i \quad (1.24)$$

である。このとき次の A_* 加群の射の合成

$$B_* \xrightarrow{b \mapsto (t_{B/A}(b b_i))_{i=1}^{n(\eta)}} A_*^{n(\eta)} \xrightarrow{(a_i)_{i=1}^{n(\eta)} \mapsto \sum_{i=1}^{n(\eta)} a_i b'_i} B_*$$

は ηid_{B_*} になる。したがって $((-)^a$ で $A\text{-Mod}$ に移して考えれば) B は A 上 finite projective であることがわかる。 B が G に関して A 上 Galois であることからとれる同型 $B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B$ より、 B は A 上 unramified であるので B は A 上 finite étale になる。

^{*16} $b \otimes b' \mapsto (\gamma(b) b')_{\gamma \in G}$ で第一成分で取る $\gamma \in G$ は $\gamma = 1 = \text{id}_B \in G$ としている。

$A \rightarrow B$ が faithfully flat であることからその base change である $B \rightarrow B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B$ も faithfully flat になるので faithfully descent から B は階数 $|G|$ になる。^{*}また、 $\text{Tr}_{B/A} = (t_{B/A})^a$ となる。

(2) B が G に関して A 上の Galois 拡大より、上で示した (1) から $A \hookrightarrow B$ は (faithfully) flat になる。よって $A' \rightarrow B' := A' \otimes_A B$ は環の拡大になる。 $B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B$ より、 B' 加群として

$$B' \otimes_{A'} B' = (B \otimes_A A') \otimes_{A'} (B \otimes_A A') \cong (B \otimes_A B) \otimes_A A' \cong \left(\prod_{\gamma \in G} B \right) \otimes_A A' \cong \prod_{\gamma \in G} B' \quad (1.25)$$

となる。また、 G を $B' = B \otimes_A A'$ の第一成分に作用させることで section 1.9.2 のように $G \times G \subset \mathfrak{S}_n \wr G$ の部分群として作用させられる。 $(B' \otimes_{A'} B')^{G \times 1}$ を計算する。(1.12) によって $G \times 1$ の任意の元 $(\gamma, 1)$ に対応する $(r_{\gamma^{-1}}, (1, \dots, 1)) \in \mathfrak{S}_n \wr G$ をとる。 $\prod_{\gamma \in G} B$ の元 (b_1, \dots, b_n) が任意の $\gamma \in G$ で

$$(r_{\gamma^{-1}}, (1, \dots, 1))(b_1, \dots, b_n) = (b_1, \dots, b_n) = (b_{(r_{\gamma^{-1}})^{-1}(1)}, \dots, b_{(r_{\gamma^{-1}})^{-1}(n)}) = (b_1, \dots, b_n) \quad (1.26)$$

となるとする。 $G = \{\gamma_1, \dots, \gamma_n\}$ と添字付けられていて、(1.15) の定義から $\gamma_{(r_{\gamma^{-1}})^{-1}(i)} = \gamma_i \circ \gamma$ ゆえ、とくに $\gamma := \gamma_i^{-1} \circ \gamma_j$ と取れば $\gamma_{(r_{\gamma^{-1}})^{-1}(i)} = \gamma_j$ となる。このことから任意の二つの添字を入れ替えるような作用を $G \times 1$ は含むので、 $b_1 = \dots = b_n$ となる。対角成分を考えることで、 B' 加群の同型

$$A' \otimes_{A'} B' \cong B' \cong \left(\prod_{\gamma \in G} B' \right)^{G \times 1} \cong (B' \otimes_{A'} B')^{G \times 1} \quad (1.27)$$

となる。また、 $A \rightarrow B$ が flat より、その base change $A' \rightarrow B'$ も flat になる。ここで、 G -不変な部分は

$$(B' \otimes_{A'} B')^{G \times 1} = \text{Ker} \left(B' \otimes_{A'} B' \xrightarrow{(\dots, (\gamma, 1)^{-1}, \dots)} \prod_{\gamma \in G} (B' \otimes_{A'} B') \right) \quad (1.28)$$

$$B'^G = \text{Ker} \left(B' \xrightarrow{(\dots, \gamma^{-1}, \dots)} \prod_{\gamma \in G} B' \right) \quad (1.29)$$

と、核として得ることが出来る。完全列 $0 \rightarrow B'^G \rightarrow B' \rightarrow \prod_{\gamma \in G} B'$ に flat な射 $A' \rightarrow B'$ によって $- \otimes_{A'} B'$ を作用させれば、完全列

$$0 \longrightarrow B'^G \otimes_{A'} B' \longrightarrow B' \otimes_{A'} B' \longrightarrow \prod_{\gamma \in G} (B' \otimes_{A'} B') \quad (1.30)$$

が得られる。核を比較すれば

$$(B' \otimes_{A'} B')^{G \times 1} \cong B'^G \otimes_{A'} B' \quad (1.31)$$

であることがわかる。(1.27) と (1.31) から自然な射によって同型

$$A' \otimes_{A'} B' \cong B'^G \otimes_{A'} B' \quad (1.32)$$

を得る。 $A' \rightarrow B'$ の faithfully flat 性^{*17}から $A' \cong B'^G$ となる。これと (1.25) から $A' \hookrightarrow B'$ は G に関する Galois 拡大になる。

^{*17} A' -Alg において”almost”に通常の場合と同じことが成り立つ。

$A \rightarrow A'$ が faithfully flat ならここまでの同型について faithfully flat descent より $A \rightarrow B$ に関する同型に降下するので逆も成り立つ。

(3) (1.8) で $X = G/H$ として与えられる標準的な B 代数の射 $C \otimes_A B \rightarrow \prod_{\bar{\gamma} \in G/H} B$ に $B \otimes_C -$ を作用させた $B \otimes_C (C \otimes_A B) \rightarrow B \otimes_C (\prod_{\bar{\gamma} \in G/H} B)$ は次のように同型な射の合成によって得られる。

$$B \otimes_C (C \otimes_A B) \cong B \otimes_A B \cong \prod_{\gamma \in G} B \cong \prod_{\bar{\gamma} \in G/H} \left(\prod_{h \in H} B \right) \cong \prod_{\bar{\gamma} \in G/H} (B \otimes_C B) \cong B \otimes_C \left(\prod_{\bar{\gamma} \in G/H} B \right). \quad (1.33)$$

ここで、二つ目の同型は $A \hookrightarrow B$ が G に関する Galois 拡大であることから、四つ目の同型は $C \hookrightarrow B$ が H に関する Galois 拡大であることから従う。 $A \hookrightarrow B$ が (1) より、とくに faithfully flat であることから descent を考えれば $C \otimes_A B \rightarrow \prod_{\bar{\gamma} \in G/H} B$ は B 代数の同型になる。

また、 $A \rightarrow C$ の base change $B \rightarrow C \otimes_A B \cong \prod_{\bar{\gamma} \in G/H} B$ は自明に階数 $|G/H|$ の finite étale 射になっている。 $A \hookrightarrow B$ の faithfully flat 性と section 1.8.1 の (3) から $A \hookrightarrow C$ も階数 $|G/H|$ の finite étale 射になる。□

1.9.3

1 章の最後に almost algebra から離れて、次の便利な Galois 理論に関する二つの補題を与える。1 つ目の方はここでは標準的なものを与えているが、より一般に成り立つ。

補題 1.9.2. ? $R \hookrightarrow S$ を (通常の) 階数 r の finite étale 拡大になっているとする。このとき \mathfrak{S}_r に関する Galois 拡大 $R \hookrightarrow T$ であって、 S を経由し、 $S \hookrightarrow T$ が \mathfrak{S}_{r-1} に関する Galois 拡大になるものが存在する。

証明. $X = \text{Spec}(R)$ 、 $Y = \text{Spec}(S)$ とし、 Z を r 個の積 $Y \times_X Y \times_X \cdots \times_X Y$ の partial diagonal の補集合であるとする。 Y が X 上 finite étale であることから、partial diagonal は開かつ閉であり、結果として Z も開かつ閉になり、このことから X 上 finite étale になる (さらに第一成分の射影によって Y 上 finite étale にもなる)。閉であることからとくに Z も affine scheme になる。一方、 \mathfrak{S}_r を各成分の入れ替えによって作用させることで、ファイバー積において étale 被覆 $\mathfrak{S}_r \times Z \rightarrow Z \times_X Z (\mathfrak{S}_{r-1} \times Z \rightarrow Z \times_Y Z)$ は同型になることがわかる。□

補題 1.9.3. ? G を S の自己同型からなる有限群とし、 $R := S^G$ という G 不変な S の部分環をとる。ここで $R \subset S' \subset S$ という部分拡大であって G の作用で閉じている S' が G に関して R 上 Galois ならば $S' = S$ となる。

証明. S' が R 上 G に関して Galois より得られる同型 $S' \otimes_R S' \cong \prod_{\gamma \in G} S'$ から得られる、各 $\gamma \in G$ に対する冪等元 e_γ をとる。その $S \otimes_R S'$ への像も冪等元であるから、冪等元による分解

$$S \otimes_R S' \cong \prod_{\gamma \in G} e_\gamma(S \otimes_R S') \cong \prod_{\gamma \in G} S'' \quad (1.34)$$

を与える (e_γ は G の元を並び替える)。命題 1.9.1 と section 1.8.1 (1) によって S' は R 上 faithfully flat になる。すると $S'' \cong (S \otimes_R S')^{G \times 1} = S^G \otimes_R S' = S'$ がわかるので $S' \otimes_R S' \cong S \otimes_R S'$ ゆえ、 $S' \hookrightarrow S$ と S'

の R 上の faithfully flat 性から $S = S'$ となる。 □

2 La categorie bicomplete des algebres de Banach uniformes

本稿での中心的な役割を果たすのは完備非アルキメデスの付値体上の、冪乗法的なノルムに関して完備な可換代数である。この章では (現在の文脈における) 函数解析と可換代数の間の言語に関する一般的な性質などについて述べる。

2.1 Algebres de Banach

全体を通して [BGR] を参考にしている。

2.1.1

K を完備な非自明な非アルキメデスの (乗法) 付値を持つ体で剰余体が k であるとする。 K° を付値環とし、 $K^{\circ\circ}$ を付値イデアルとすると $k = K^\circ/K^{\circ\circ}$ となっている。

本稿では K 代数は結合的可換かつ単位的であるとする (ただし零代数は除かない)。 \mathcal{A} を K 代数とする。 K 代数の半ノルム (semi-norm) とは、 $|\cdot|: \mathcal{A} \rightarrow \mathbb{R}$ であって $|a+b| \leq \max(|a|, |b|)$ と、 $|ab| \leq |a||b|$ であって $a \in K$ のときこれが等号になり、 $\mathcal{A} \neq 0$ なら $|1_{\mathcal{A}}| = 1$ になるものである。これがノルム (norm) であるとは、さらに $\mathcal{A} \setminus \{0\}$ で 0 を値に取らないときのことをいう。 $\mathcal{A}_{\leq r}$ や、簡単に $\mathcal{A}_{\leq r}$ によって、 $a \in \mathcal{A}$ で $|a| \leq r$ となるものからなる \mathcal{A} の部分加法群を表すことにする。同様に $\mathcal{A}_{< r} := \{a \in \mathcal{A} \mid |a| < r\}$ という \mathcal{A} の部分加法群を定義する。とくに単位円板 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は \mathcal{A} の開部分 K° 代数である。

乗法的ノルム (multiplicative norm) とは、ノルムであって、任意の $a, b \in \mathcal{A}$ で $|a||b| = |ab|$ となることである。とくに乗法的ノルムを持つ K 代数 \mathcal{A} は整域である。

ノルム K 代数 (normed K algebra) の圏を対象をノルムを持った K 代数であって、射を連続な K 代数の射からなるものとして定める。つまりその射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は $\mathcal{A}_{\leq 1}$ 上有界になる。すなわち、作用素ノルムについて $\|\varphi\| := \sup_{a \in \mathcal{A} \setminus \{0\}} |\varphi(a)|/|a| < \infty$ になる ([DM] Lemma 2.11 より、通常連続性などとの同値性がわかる)。 φ が isometric であるとは、 \mathcal{A} が \mathcal{B} のノルム K 部分代数になることである。すなわち、任意の $a \in \mathcal{A}$ に対して $|\varphi(a)| = |a|$ となることである (とくにこのとき単射、連続、開写像になる)。

この圏は push-out を持つ。明示的には $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ と、その上の \mathcal{B} と \mathcal{C} のノルムのテンソル積

$$|x| := \inf \left\{ \max_{i=1}^n \{|b_i||c_i|\} \mid x = \sum_{i=1}^n b_i \otimes c_i \in \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C} \right\} \quad (2.1)$$

を半ノルムとして持つ ([BGR] 2.1.7)。*18 この半ノルムによる $\mathcal{B} \otimes_m \mathcal{C}$ の完備化を完備テンソル積 (complete tensor product) ([BGR] 3.1.1 Prop.2) といい、 $\widehat{\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C}}$ と書く。

Banach K 代数の圏 (K -Ban) とは完備ノルム K 代数からなる、ノルム K 代数の充満部分圏のことである。Banach K 代数 \mathcal{A} を一つ固定するとき、Banach K 代数 \mathcal{B} と $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ の組を Banach \mathcal{A} 代数という。自明な構成によって圏 \mathcal{A} -Ban を得る。すなわち、対象は Banach \mathcal{A} 代数であって、射は \mathcal{A} 上の代数の射 $\mathcal{B} \rightarrow \mathcal{B}'$ であって連続なものである。

*18 この半ノルムでの値を計算するために x を任意に表示して最終的にその表示に関する \inf を取るということをする。例えば section 2.1.3(2) など。

2.1.2

圏 $\mathcal{K}\text{-Ban}$ は始対象 \mathcal{K} を持ち、終対象 0 を持つ。また完備テンソル積を push-out として持ち、finite colimit も持つ。関手 $-\widehat{\otimes}_{\mathcal{K}} \mathcal{A}$ は忘却関手 $\mathcal{A}\text{-Ban} \rightarrow \mathcal{K}\text{-Ban}$ の左随伴である。

また、 $\mathcal{K}\text{-Ban}$ は fiber 積 $\mathcal{B} \times_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ を持ち、有限 limit も持つ。

I を \mathcal{B} の閉イデアル、 J を \mathcal{C} の閉イデアルとし、 K を $I \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C} + \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} J \subset \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ の $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ への像の閉包とする。すると標準的な射

$$(\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})/K \rightarrow (\mathcal{B}/I) \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{C}/J) \quad (2.2)$$

が定義できるが、これは isometric になる ([BGR] 2.1.8 Prop.6 とその証明)。

さらに、 \mathcal{C} が \mathcal{A} 上 (通常の意味で) finite projective であって、 \mathcal{C} のノルムから定まる位相が finite projective \mathcal{A} 加群の canonical topology であるとき、 $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ は完備になる ([KL] Lemma 2.2.12 (c))。

2.1.3 Remarque

- (1) \mathcal{C}' がノルム \mathcal{A} 代数 \mathcal{C} のノルム \mathcal{A} 部分代数であったとしても、 $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}'$ が $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ のノルム部分代数になるとは限らない。
- (2) \mathcal{C} の \mathcal{A} 上の直交基底 (orthogonal basis) c_1, \dots, c_n, \dots とは、任意の $\gamma \in \mathcal{C}$ について一意的な (有限和による) 表示 $\gamma = \sum_i a_i c_i$ が存在し、 $|\gamma| = \max \{|a_i| |c_i|\}$ になることである ([Kel])。*19 このとき $d \in \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}$ は (有限和によって) 一意的に $d = \sum_{j \geq 1} b_j \otimes c_j$ と書けて、さらに $|d| = \max_{j \geq 1} \{|b_j| |c_j|\}$ となる。実際、一意性は直交基底であることから得られる Banach \mathcal{K} 代数の同型 $\mathcal{C} \cong \mathcal{A}^{\oplus I}$ を用いて

$$\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C} \cong \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}^{\oplus I} \cong \mathcal{B}^{\oplus I} \quad (2.3)$$

が得られて \mathcal{B} 上の直交基底 $1 \otimes c_i$ が取れることから分かる。ノルムの等号に関して、 d の表示 $d = \sum_{i=1}^{m'} b'_i \otimes c'_i$ を任意に取る。まず \mathcal{C} の直交基底 c_i によって $c'_i = \sum_{j \geq 1} a_{ij} c_j$ となる $a_{ij} \in \mathcal{A}$ が (一意的に) 取れる。ただし有限個を除いて $a_{ij} = 0$ である。すると直交基底の定義から、ノルムに関して $|c'_i| = \max_{j \geq 1} \{|a_{ij}| |c_j|\}$ となり、 $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ の表示の一意性から $b_j = \sum_{i=1}^{m'} a_{ij} b'_i$ となる。すると、(2.1) の定義から、

$$|d| \leq \max_{j \geq 1} \{|b_j| |c_j|\} \leq \max_{j \geq 1, i=1}^{i=m'} \{|a_{ij}| |c_j| |b'_i|\} \leq \max_{i=1}^{m'} \{|c'_i| |b'_i|\} \quad (2.4)$$

となる。ここで最右辺において d の表示に関して \inf を取れば、(2.1) の定義から $|d| \leq \max_{j \geq 1} \{|b_j| |c_j|\} \leq |d|$ ゆえ、求める等号が成り立つ。

2.1.4

\mathcal{A} をノルム \mathcal{K} 代数とすると、 \mathcal{A}° によって幂有界元 (power bounded element) 全体の集合を表す。これは \mathcal{A} の開部分 \mathcal{K}° 代数となり、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ を含み、同値なノルムのとり方によらずに一意的に定まる。この $(-)^{\circ}$ は射の連続性から関手的であり、完備化と可換である。さらに $\mathcal{A} \times \mathcal{B}$ に sup ノルム $|(a, b)| := \max \{|a|, |b|\}$ を与えることで、 $\mathcal{A} \times \mathcal{B}^\circ = \mathcal{A}^\circ \times \mathcal{B}^\circ$ を得る。

*19 [Kel] では $|\gamma| = \max \{|a_i c_i|\}$ という条件であり、異なることに注意する。ただしこの定義でも section 2.1.3(2) の議論は通用する。

$\mathcal{A}^{\circ\circ}$ によって位相的冪零元 (topologically nilpotent) 全体の集合を表す。これは \mathcal{A}° の開イデアルになり、 $\mathcal{A}^{\circ\circ} = \sqrt{\mathcal{A}^{\circ\circ}}$ となる。もし \mathcal{A} が完備であれば、 $\mathcal{A}^{\circ\circ}$ は \mathcal{A}° の Jacobson 根基に含まれる。実際、任意の $(a, b) \in \mathcal{A}^{\circ\circ} \times \mathcal{A}^{\circ}$ に対して $1 - ab \in \mathcal{A}^{\circ}$ は $ab \in \mathcal{A}^{\circ\circ}$ と \mathcal{A} の完備性から逆元として $\sum_{n \geq 0} a^n b^n \in \mathcal{A}$ を持つからである。とくに \mathcal{A} の完備性のもとで、 \mathcal{A}° の元が可逆であることと、 $\mathcal{A}^{\circ}/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ への像が可逆であることは同値である。とくにこのとき \mathcal{A} の任意の極大イデアルは閉である ([BGR] 1.2.4 Cor. 5)。

対応 $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^{\circ}/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ はノルム \mathcal{K} 代数の圏から被約 k 代数の圏への関手を定める。

2.1.5

任意の Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} を一つ固定する。多項式環 $\mathcal{A}[T]$ の係数の sup ノルムを

$$\left| \sum_{i=1}^n a_i T^i \right| := \sup_{i=1}^n \{|a_i|\} \quad (2.5)$$

と定め、これを Gauss ノルム (Gauss norm) という (\mathcal{A} のノルムが乗法的なら Gauss ノルムも乗法的になる)。このノルムによる完備化を $\mathcal{A}\langle T \rangle$ で表す。冪級数の非アルキメデスの付値に関する収束に関する同値性から、Gauss ノルムによって収束する形式的冪級数を考えれば

$$\mathcal{A}\langle T \rangle = \left\{ \sum_{i \geq 0} a_i T^i \in \mathcal{A}[[T]] \mid \lim_{i \rightarrow \infty} |a_i| = 0 \right\} \quad (2.6)$$

となり、その上のノルムは

$$\left| \sum_{i \geq 0} a_i T^i \right| = \sup_{i \geq 0} \{|a_i|\} \quad (2.7)$$

となっている。この中の冪有界元全体は $(\mathcal{A}\langle T \rangle)^{\circ} = \mathcal{A}^{\circ}\langle T \rangle$ となる ([BGR] 1.4.2 Prop.1)。組 $(\mathcal{A}\langle T \rangle, T)$ は Banach \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} とその冪有界元の組 $b \in \mathcal{B}^{\circ}$ の組 (\mathcal{B}, b) に対してある種の普遍性を与える ([BGR] 1.4.3 Cor.2)。すなわち、ただ一つの \mathcal{A} 代数の間の連続同型 $\mathcal{A}\langle T \rangle \rightarrow \mathcal{B}$ であって、 T を b に移すものが存在する。

2.1.6 Remarque

isometric に関する疑問を扱うときには、対象はそのまま、射をその作用素ノルムが 1 以下であるようなものに制限した \mathcal{K} -Ban の充満では無い部分圏について考えるとよい。この圏においても $\hat{\otimes}$ は余積になり、組 $(\mathcal{A}\langle T \rangle)$ は $(\mathcal{B}, b \in \mathcal{B}_{\leq 1})$ に対して上記と同様の普遍性を持つ。

もし $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ がその部分圏の射であるとする、 $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle \rightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle$ から得られる標準的な射 $\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle \rightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle$ は isometric な同型射になる。その逆射は $\mathcal{B}\langle T \rangle$ の持つ普遍性から得られる。ここで、(2.2) のようにして閉イデアル $I = (0) \subset \mathcal{B}$ と $\mathcal{A}\langle T \rangle$ の任意の閉イデアル J について K を $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} J \subset \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle$ の $\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle$ への像の閉包とする。このとき可換図式

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle & \xrightarrow{\quad} & \mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle \\ & \searrow & \downarrow \cong \\ & & \mathcal{B}\langle T \rangle \end{array}$$

から、 $K \subset \mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle$ に対応するのは $\overline{JB\langle T \rangle} \subset \mathcal{B}\langle T \rangle$ であることがわかる。ゆえに (2.2) から

$$\mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{JB\langle T \rangle} \cong (\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{A}\langle T \rangle) / K \xrightarrow{g} \mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \quad (2.8)$$

は isometric になる。さらにこれが同型になることを示す。まず

$$f': \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \longrightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle} \quad (2.9)$$

$$b \otimes \bar{\alpha} \longmapsto \overline{b\alpha} \quad (2.10)$$

という \mathcal{A} 代数の準同型を取ると、これは有界線形作用素 (すなわち連続) になる。これは、[BGR] 2.1.7 Prop.1 の証明を参考に以下のようにして示すことが出来る。まず掛け算をする写像 $\Phi: \mathcal{B} \times \mathcal{A}\langle T \rangle / J \rightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle}$ はノルムの乗法に関する性質から、 $|\Phi(b, \alpha)| \leq \|b\| \|\alpha\|$ より、双線形写像として有界 ([BGR] 2.1.7) になっている。すると、 $x \in \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)$ の任意の表示 $x = \sum_{i=1}^n b_i \otimes \alpha_i$ について、

$$|f'(x)| = \left| \sum_{i=1}^n f'(b_i \otimes \alpha_i) \right| \leq \max_{i=1}^n \{|\overline{b_i \alpha_i}|\} \leq \max_{i=1}^n \{|\Phi(b_i, \alpha_i)|\} \leq \max_{i=1}^n \{\|b_i\| \|\alpha_i\|\} \quad (2.11)$$

となり、最右辺でこの表示に関して \inf を取れば $|f'(x)| \leq \|x\|$ となることがわかる。ゆえに $f': \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \rightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle}$ は連続になるから、定義域側の完備化をとって f' の延長になっている連続写像 $f: \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \rightarrow \mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle}$ が定義される。

$g: \mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle} \rightarrow \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)$ が isometric であることから、単射、連続、開写像になっているため、同型になることを示すには g の全射性を示せば良い。 $g \circ f = \text{id}_{\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)}$ を示せば十分である。実際、 $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)$ の元 x を $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)$ の元による収束先 $x = \lim_{i \rightarrow \infty} x_i$ とし、 $x_i := \sum_{j=1}^{n_i} b_{ij} \otimes \alpha_{ij} \in \mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)$ と表しておく。すると、 f と g の連続性とその定義に注意すると、

$$g \circ f(x) = g \circ f\left(\lim_{i \rightarrow \infty} x_i\right) = \lim_{i \rightarrow \infty} g \circ f(x_i) = \lim_{i \rightarrow \infty} g \circ f' \left(\sum_{j=1}^{n_i} b_{ij} \otimes \alpha_{ij} \right) \quad (2.12)$$

$$= \lim_{i \rightarrow \infty} g \left(\sum_{j=1}^{n_i} \overline{b_{ij} \alpha_{ij}} \right) = \lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{j=1}^{n_i} g(\overline{b_{ij} \alpha_{ij}}) = \lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{j=1}^{n_i} b_{ij} \otimes \alpha_{ij} = x \quad (2.13)$$

となるため、 $g \circ f = \text{id}_{\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J)}$ が示されたので Banach \mathcal{K} 代数としての isometric な同型射

$$\mathcal{B}\langle T \rangle / \overline{J\mathcal{B}\langle T \rangle} \xrightarrow{\cong} \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \quad (2.14)$$

が得られた。

2.2 Normes spectrales

2.2.1

ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} 上のノルム $|\cdot|$ から誘導されるスペクトラル半ノルム (spectral semi-norm) ^{*20} とは、

$$|a|_{sp} := \lim_{m \rightarrow \infty} |a^m|^{1/m} \quad (2.15)$$

によって与えられるものである (この limit は確かに存在する)。とくに $|\cdot|_{sp}$ は冪乗法的であるが、これは一般にノルムになるとは限らない (a が 0 でなくても $|a|_{sp} = 0$ になりうる)。一般に $|\cdot|_{sp} \leq |\cdot|$ である。

^{*20} アルキメデス的な場合と同様にしてこの半ノルムは "spectral" であることがわかる。実際、これは乗法的有界半ノルムの上限であるので Berkovich スペクトラム $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ に含まれているからである。

$|\cdot|_{sp} = |\cdot|$ のとき、すなわち $|\cdot|$ が冪乗法的であるとき、 $|\cdot|$ をスペクトルノルム (spectral norm) であるといい、このとき \mathcal{A} をスペクトルノルム \mathcal{K} 代数 (spectral norm \mathcal{K} algebra) という。この場合には $\mathcal{A}^\circ = \mathcal{A}_{\leq 1}$ かつ $\mathcal{A}^{\circ\circ} = \mathcal{A}_{<1}$ となる。

?ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が乗法的であることと、 \mathcal{A} がスペクトラルかつ $\mathcal{A}^\circ/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ が整域であることは同値である ([BGR] 1.5.3 Prop.1)。*21

また、section 2.3.2 以降のように $|\mathcal{K}|$ が $|\mathcal{A}|$ と $|\mathcal{B}|$ で稠密であるようなスペクトルノルム代数の間の射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ の作用素ノルム $\|\varphi\| := \sup_{a \in \mathcal{A} \setminus \{0\}} |\varphi(a)|/|a|$ は常に $\|\varphi\| \leq 1$ となる。実際、まず任意の $\alpha \in \mathcal{A}$ に関して section 2.3.2 の最初のようにして、十分大きい正整数 n で $\varpi^n \alpha \in \mathcal{A}^\circ$ となる。すると

$$\frac{|\varphi(\alpha)|}{|\alpha|} = \frac{|\varphi(\varpi^n \alpha)|}{|\varpi^n \alpha|} \quad (2.16)$$

なので $\|\varpi\| \leq 1$ を示すためには任意の $\alpha \in \mathcal{A}^\circ$ で $|\varpi(\alpha)|/|\alpha| \leq 1$ を示せば良い。ここで、 $|\mathcal{K}|$ の $|\mathcal{A}|$ での稠密性から section 2.3.2 で定義する $\varpi_s \in \mathcal{K}$ の記号を用いると \mathcal{K} の点列 $(\varpi_{s_n})_{n=0}^\infty$ であって $|\varpi_{s_n}|$ が $|\alpha| \in |\mathcal{A}|$ に上から収束するようなものが取れる。すると上から収束していることから $|b| \leq |\varpi_{s_n}|$ なので $|\varpi_{s_n}^{-1}b| \leq 1$ となる。 φ の連続性から $\varphi(\mathcal{A}^\circ) \subset \mathcal{B}^\circ$ であって、 \mathcal{A} と \mathcal{B} がスペクトラルであるから冪有界元全体と単位円板が同じ集合になるため $|\varphi(\varpi_{s_n}^{-1}b)| \leq 1$ となる。したがって φ の準同型性から $|\varphi(b)|/|\varpi_{s_n}^{-1}b| \leq 1$ より $|\varphi(b)| \leq |\varpi_{s_n}|$ となる。 ϖ_{s_n} のとり方から $n \rightarrow \infty$ とすれば $|\varphi(b)| \leq |\varpi_{s_n}| \rightarrow |b|$ なので $|\varphi(b)|/|b| \leq 1$ となるから $\|\varphi\| \leq 1$ となることが示された。

2.2.2

ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} について \mathcal{A}° が有界*22であるとき、一様 (uniform) であるという。これは \mathcal{A} のノルムがそれから誘導されるスペクトル半ノルムと同値であることと等しい ([Ari] Ex 1.5.13)。実際、まず同値であったとすると冪有界性は保たれていて、一般に $\mathcal{A}^\circ \subset \mathcal{A}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1}$ が成り立つ*23ことから \mathcal{A} は一様になる。?逆に \mathcal{A}° が有界であったとすると、任意の $a \in \mathcal{A}$ に対して、 $|a| \leq |a|_{sp} \sup\{|b| \mid b \in \mathcal{A}^\circ\}$ が成り立つことからわかる。とくに同値であることからスペクトル半ノルムもノルムになる。*24このときこれをスペクトル (半) ノルムと書くこととする。

任意の一様ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} は被約である。もし $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密だったら $\mathcal{A}^{\circ\circ} = \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathcal{A}^\circ = (\mathcal{A}^\circ)^2$ となる。

2.2.3 Exemples

- (1) 任意の被約アフィノイド \mathcal{K} 代数 (すなわち、 $\mathcal{K}\langle T_1, \dots, T_n \rangle$ の剰余環であって被約なもの) はスペクトル半ノルムをノルムとして持ち、とくに一様である ([BGR] 6.2.1 Prop.4(iii))。このとき代数構造が位相を決定する (すなわち、(通常の) \mathcal{K} 代数として同型ならばノルム \mathcal{K} 代数としても同型になる)。さらにスペクトル (半) ノルムも決定する ([BGR] 6.1.3 Prop.2)。
- (2) \mathcal{A} が一様/スペクトラルであるとき、 $\mathcal{A}\langle T \rangle$ も同じ性質を持つ。すなわち、 $\mathcal{A}\langle T \rangle^\circ = \mathcal{A}^\circ\langle T \rangle$ は有界/単位円板になる。

*21 $|\mathcal{K}| \neq |\mathcal{A}|$ のとき、 \mathcal{A} は付値体ではないが $\mathcal{A}^\circ/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ が体になるものが存在する。

*22 $|\mathcal{A}^\circ|$ が \mathbb{R} の中で有界集合であること。

*23 $a \in \mathcal{A}^\circ$ を取ると、ある定数 $C \in \mathbb{R}$ が存在して任意の正整数 m で $|a^m|_{sp} = |a|_{sp}^m \leq C$ となる。ゆえに $|a|_{sp} \leq C^{1/m}$ が任意の正整数 m で成り立つので $m \rightarrow \infty$ として $|a|_{sp} \leq 1$ となる。

*24 ある定数 C で $|\cdot| \leq C|\cdot|_{sp}$ より、 $|x|_{sp} = 0$ になったら $|x| = 0$ より $x = 0$ になるので $|\cdot|_{sp}$ はノルムになる。

2.2.4

一様ノルム \mathcal{K} 代数の間の \mathcal{K} 準同型 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ について、連続であることと $\varphi(\mathcal{A}^\circ) \subset \mathcal{B}^\circ$ であることは同値 ([DM] Lemma 2.11)。さらにノルムがスペクトラルであるとき、連続性は $\|\varphi\| \leq 1$ と同値 (冪有界元全体と単位円板が同じ集合になるため)。このことから、一様ノルム \mathcal{K} 代数のスペクトラル (半) ノルムは位相構造と適合する唯一つのスペクトラルノルムである。

\mathcal{K} 代数 \mathcal{A} は完備であるスペクトラルノルムを高々一つしか持たないことがわかる。実際、二つの完備なスペクトラルノルム $|\cdot|_1$ と $|\cdot|_2$ について、とくに $|\cdot|_1$ を $|\cdot|_2$ の sup に置き換えることで恒等写像 $(\mathcal{A}, |\cdot|_1) \rightarrow (\mathcal{A}, |\cdot|_2)$ は連続になる。Banach の開写像定理から $|\cdot|_1$ と $|\cdot|_2$ は同値になる。よって同相であることから $|\cdot|_1 = |\cdot|_2$ となる。

一様ノルム代数の完備化は一様 Banach 代数になる。これは Banach の開写像定理から、Banach 代数が一様であることとスペクトラル半ノルムで完備であること (したがって半ノルムからノルムになる) が同値^{*25}であることからわかる。^{*26}

2.2.5

\mathcal{K} -Ban/ \mathcal{A} -Ban の中の一様 Banach 代数からなる充満部分圏をそれぞれ \mathcal{K} -uBan/ \mathcal{A} -uBan と表す。^{*27} 包含関手 \mathcal{K} -uBan \rightarrow \mathcal{K} -Ban は左随伴として一様化 (uniformization) 関手 $(-)^u: \mathcal{K}\text{-Ban} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ を持つ。これはスペクトラル半ノルムによる (分離的) 完備化によって与えられる (section 2.2.4 の最後にある同値性からわかる)。定義から、 $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\text{-Ban}$ の一様化 \mathcal{A}^u は (元々のノルムに関して完備だけでなく) スペクトラル半ノルムに関して完備より、とくにスペクトラル半ノルムをノルムとして持つ。ゆえにスペクトラル \mathcal{K} 代数になる。ここで単位射 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}^u$ が同型であることは \mathcal{A} がスペクトラル半ノルムに関して完備であることと同値なので、 \mathcal{A} が一様であることと同値。

圏 \mathcal{K} -uBan は始対象 \mathcal{K} と終対象 0 をもち、push-out として完備テンソル積の一様化 $\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C} (= (\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})^u)$ を持ち、finite colimit も持つ。一様化関手は包含関手の左随伴だから、colimit の一種である push-out を保つ。すなわち、 $\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C} = \mathcal{B}^u \hat{\otimes}_{\mathcal{A}^u} \mathcal{C}^u$ となる。 \mathcal{A} を一様 Banach であるとする、関手 $-\hat{\otimes}_{\mathcal{K}}^u \mathcal{A}: \mathcal{K}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{A}\text{-uBan}$ は忘却関手 $\mathcal{A}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ の左随伴になる。^{*28}

$\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ を \mathcal{K} -uBan における射とし、 J を $\mathcal{A}\langle T \rangle$ の閉イデアルとする。このとき標準的な射

$$(\mathcal{B}\langle T \rangle / J\mathcal{B}\langle T \rangle)^u \rightarrow \mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u (\mathcal{A}\langle T \rangle / J) \quad (2.17)$$

は isometric かつ同型射になる ((2.14) から従う)。

2.2.6

一様 Banach 代数の fiber (有限) 積は sup ノルムを与えることで一様になる。よって、一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏は finite limit を持つ。

^{*25} 恒等写像 $f: (\mathcal{A}, |\cdot|) \rightarrow (\mathcal{A}, |\cdot|_{sp})$ について、「 $(\mathcal{A}, |\cdot|)$ が一様」 \Leftrightarrow 「ノルムが同値」 \Leftrightarrow 「 f が同相」となる。よって、 f の連続全単射性からこれは f が開写像であることと等しく、Banach の開写像定理からこれは値域 $(\mathcal{A}, |\cdot|_{sp})$ の完備性と等しい。

^{*26} 一様ノルム代数の完備化はそのスペクトラル半ノルムによる完備化に等しいからである。

^{*27} $|a|_{sp} \leq |a|$ から、 $|\cdot|$ の位相より $|\cdot|_{sp}$ の位相のほうが細かい。とくに $|\cdot|_{sp}$ に関する Cauchy 列が $|\cdot|$ の Cauchy 列になるかどうかわからないから、 $|\cdot|_{sp}$ で完備かどうかわからない。

^{*28} $\mathcal{A}, \mathcal{B}, \mathcal{C}$ すべてが体であったとしても $\mathcal{B} \hat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ が被約であるとは限らない。

一様 Banach 代数の直積成分は一様である。実際、ノルム代数 \mathcal{A} に対して零でない冪等元 e のノルムは 1 以上^{*29}であり、さらに \mathcal{A} がスペクトラルだったらノルムは 1 になるからである。より正確には、任意の代数としての直積分解 $\mathcal{A} = \mathcal{B} \times \mathcal{C}$ は一様ノルム代数の圏における直積分解を与える。

2.2.7 Remarque

\mathcal{C} が \mathcal{A} 上の直交基底を持ち、 \mathcal{B} がスペクトラルであるとき、

$$\mathcal{B} \longrightarrow \widehat{\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C}}^u \quad (2.18)$$

$$b \longmapsto b \otimes 1 \quad (2.19)$$

は isometric になる。これは、section 2.1.3(2) に注意すると、 $|b \otimes 1|_{sp} = \lim_{m \rightarrow \infty} |b^m \otimes 1|^{1/m} = \lim_{m \rightarrow \infty} |b^m|^{1/m} = |b|$ であることからわかる。

2.2.8 Exemple

? \mathcal{K} の (有限次)Galois 拡大体 \mathcal{L} をとり、その Galois 群が G であるとする。 \mathcal{K} のノルムを一意的に \mathcal{L} 上に延長できる (とくに G は isometric に作用する)。このとき $\mathcal{L} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{L}$ にノルムのテンソル積によって (半) ノルムを与えると、有限次元一様 Banach \mathcal{K} 代数となる。(1.10) と同様にして得られる \mathcal{K} 準同型 $\mathcal{L} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{L} \rightarrow \prod_{\gamma \in G} \mathcal{L}$ は連続全単射になり、(Banach の開写像定理から) Banach 代数としての同型を与え、? とくに $\widehat{\mathcal{L} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{L}}^u \cong \prod_{\gamma \in G} \mathcal{L}$ と表せられる。ゆえに Banach 代数 $\mathcal{L} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{L}$ がスペクトラルであることと、 $\mathcal{L} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{L} \rightarrow \prod_{\gamma \in G} \mathcal{L}$ が isometric であることは同値。さらにこれは cadre を $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ としたとき、 $(\mathcal{L}^\circ)^a$ が $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 上 Galois であることと同値。離散付値である場合、このことは、付値体の拡大 \mathcal{L}/\mathcal{K} が unramified であることと同値。無限次拡大のときはより注意深く扱わなければならない。

以下では \mathcal{K} の剰余体 k は標数 $p > 0$ であるとする。

2.3 Dictionnaire

2.3.1

まず最初にいくつかの閉包操作について扱う。(単位的可換) 環の拡大 $R \hookrightarrow S$ を取る。

$s \in S$ が R 上 integral であるとは、その冪からなる集合 $\{s^n \mid n \in \mathbb{Z}^+\}$ が S の中で有限生成 R 部分加群を生成することである。almost integral^{*30} であるとは、その冪からなる集合 $\{s^n \mid n \in \mathbb{Z}^+\}$ が S の中で生成する R 部分加群が、ある有限生成 R 部分加群に含まれることである。integral/almost integral の元全体をそれぞれ、 R_S^+ , R_S^* と表す。これは S の部分環になり、それぞれ、 R の S の中の integral closure/complete integral closure という。 $R = R_S^+$ のとき R を S 上 integrally closed といい、 $R = R_S^*$ のとき R を S 上 completely integrally closed という。とくに R_S^+ は S 上 integrally closed であるが、(2) から R_S^* は一般に completely integrally closed ではない。また、明らかに $R_S^+ \subset R_S^*$ となる (R が Noether ならこれは一致する)。

p を素数とする。 $s \in S$ が R 上 p -root (p -radiciel) であるとは、ある正整数 n が存在して $s^{p^n} \in R$ となることである。 R が S で p -root closed であるとは、任意の R 上 p -root な S の元がすべて R に入ることである。すなわち、「 $s \in S$ かつ $s^p \in R \implies s \in R$ 」となることである。 R の S における p -root closure とは、 R_S^+ と書き、 R と S の間で p -root closed な部分環の中で最小のもののことである。 S の部分環の増大列 $(R_i)_{i \geq 0}$ を

^{*29} $|e| = |e^2| \leq |e|^2$ からわかる。

^{*30} 補題 2.5.3 で示すように、これは almost mathematics における integral 性と一致しない。

帰納的に $R_0 := R$ で、 R_{i+1} を R_i 上 p -root な S の元全体によって R_i 上 (代数として) 生成される S の部分環とする (任意標数の場合でも和で閉じさせるためにこの操作が必要)。このとき p -root closure はこの和集合によって構成できる。明らかに $R_S^\dagger \subset R_S^+$ となり、 R が S で p -root closed であることと $R = R_S^\dagger$ は同値である。

R の標数が p であるか、 $S = R[1/p]$ であるとき、 R 上 p -root な S の元全体の集合は S の部分環になり、それは R_S^\dagger に一致する。

可換図式

$$\begin{array}{ccc} R & \hookrightarrow & S \\ \downarrow & & \downarrow \\ R' & \hookrightarrow & S' \end{array}$$

に対して、以上の性質は準同型で保たれるため、自然な準同型 $R_S^\dagger \rightarrow R_{S'}^\dagger$ 、 $R_S^+ \rightarrow R_{S'}^+$ 、 $R_S^* \rightarrow R_{S'}^*$ が得られる (一つ目の準同型は上記で構成した R_i について $R_i \rightarrow R'_i$ によって得られる)。とくに次の可換図式

$$\begin{array}{ccccccccc} R & \hookrightarrow & R_S^\dagger & \hookrightarrow & R_S^+ & \hookrightarrow & R_S^* & \hookrightarrow & S \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ R' & \hookrightarrow & R_{S'}^\dagger & \hookrightarrow & R_{S'}^+ & \hookrightarrow & R_{S'}^* & \hookrightarrow & S' \end{array}$$

が成り立つ。

S 中の R の integral closure を取る操作は局所化と可換である ([AM] Prop. 5.12)。また、同様にして p -root closure を取る操作も局所化と可換である。しかし、completely integrally closure を取る操作は局所化と可換とは限らない。

2.3.2

函数解析と可換環論の間の概念を集めておく。

$\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ 一つ固定する。 $\Gamma \subset \mathbb{R}$ によって対応する値群とする。すなわち $|\varpi|^\Gamma = |\mathcal{K}^\times|$ を満たす。任意の $s \in \Gamma$ に対して、ある $\varpi_s \in \mathcal{K}^\times$ を $|\varpi_s| = |\varpi|^s$ となる元として取る (以下の議論はこの元のとり方によらない)。^{*31} また、 $|\varpi| < 1$ から、任意の $x \in \mathcal{K}^\times$ について、 $\lim_{n \rightarrow \infty} |\varpi^n x| = 0$ より十分大きい n で $|\varpi^n x| \leq 1$ なので $\varpi^n x \in \mathcal{K}^\circ$ となるから $x \in \mathcal{K}^\circ[1/\varpi]$ である。よって $\mathcal{K} = \mathcal{K}^\circ[1/\varpi]$ であるので、とくに以下の命題 2.3.1 (2) で定める $\mathcal{A} = \mathcal{A}[1/\varpi]$ は \mathcal{K} 代数になる。

命題 2.3.1. (1) \mathcal{A} をノルム \mathcal{K} 代数であって $|\mathcal{K}|$ が $|\mathcal{A}|$ で稠密であるとする。任意の $a \in \mathcal{A}$ について

$$|a| = |\varpi|^r, \quad r := \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s} a \in \mathcal{A}_{\leq 1}\} \quad (2.20)$$

となる。とくに $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は ϖ 進位相を持ち、 \mathcal{A} が Banach であることと $\mathcal{A}_{\leq 1}$ が ϖ 進完備であること

^{*31} $|\varpi_s| = |\varpi'_s|$ となる元を取ったとすると、 \mathcal{K} のノルムは乗法的なので $|\varpi_s(\varpi'_s)^{-1}| = 1$ となっている。すなわち、この代表元 ϖ_s のとり方は $\mathcal{K}^\circ \setminus \mathcal{K}^{\circ\circ}$ の積を除いて一意に定まる。

は同値になる。

- (2) 逆に、 A を flat な \mathcal{K}° 代数とする (とくに任意の $\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ について ϖ -torsion free であることと同値)。^{*32} 以下の議論は一つ固定した ϖ に対して ϖ -torsion free であるだけで十分である。

$$\mathcal{A} := A[1/\varpi] \quad (2.21)$$

と定める。任意の $a \in \mathcal{A}$ に対して

$$^A|a| := |\varpi|^r, \quad r := \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in A\} \in \mathbb{R} \cup \{+\infty\} \quad (2.22)$$

と定義する。

- (a) 定義した (2.22) は \mathcal{A} 上に半ノルムを与える。これがノルムであることと任意の $A \setminus \{0\}$ の元が infinite ϖ -divisible ^{*33} にならないことは同値。さらにこのとき $|\mathcal{K}|$ は $^A|\mathcal{A}|$ で稠密になる。
さらに \widehat{A} も flat な \mathcal{K}° 代数であり、 $\widehat{A} = \widehat{A}[1/\varpi]$ かつ、 $\widehat{A}_{\leq 1} = \widehat{A_{\leq 1}}$ が成り立つ。
- (b) 一般に $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{K}^{\circ\circ}A$ が成り立つ。 Γ が離散的であれば $\mathcal{A}_{\leq 1} = A$ となる。 Γ が離散的でないとき $\mathcal{A}_{\leq 1} = A_*$ となる。ここで、 $A_* := \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, A)$ と定義している。^{*34} とくに $A_* = \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}A$ という等号が成り立つ。また、 $^A| - | = ^{A_{\leq 1}}| - |$ も成り立つ。
- (c) 準同型 $\varphi: \mathcal{A} = A[1/\varpi] \rightarrow \mathcal{A}' = A'[1/\varpi]$ は、 $\varphi(A) \subset A'$ ならば連続である。ノルム代数の間の射になっているとき、もし $\varphi^{-1}(A') = A$ ならば isometric である。さらに正確に、連続写像 φ が isometric であることと、 $\varphi(\mathcal{A}_{\leq 1}) \subset \mathcal{A}'_{\leq 1}$ かつ φ の誘導する $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi \rightarrow \mathcal{A}'_{\leq 1}/\varpi$ が単射であることは同値。
- (d) A が A' の部分代数であって A'/A が ϖ -torsion free であるとき、 $^{A'}| - |$ の A への制限は $^A| - |$ になる。
 J が A のイデアルであって A/J が ϖ -torsion free になるとき、 $^{A/J}| - |$ は $^A| - |$ の商半ノルムになる。逆にノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} の任意のイデアル \mathcal{I} に対して $(\mathcal{A}/\mathcal{I})_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1}/\mathcal{I}_{\leq 1})_*$ が成り立つ。
- (e) B と C を ϖ -torsion free な A 代数とする。このとき $(B \otimes_A C)/(\varpi^\infty\text{-torsion})$ 上に (2.22) で定義される半ノルムは B と C の半ノルムのテンソル積に一致する (ここで $\varpi^\infty\text{-torsion}$ は任意の正整数 n に対して ϖ^n で消えるような元のことである)。逆に B と C をノルム \mathcal{A} 代数とするとき、 Γ が離散的ならば

$$(\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C})_{\leq 1} = (\mathcal{B}_{\leq 1} \otimes_{\mathcal{A}_{\leq 1}} \mathcal{C}_{\leq 1})/(\varpi^\infty\text{-torsion}) \quad (2.23)$$

となり、そうでないならば

$$(\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{C})_{\leq 1} = ((\mathcal{B}_{\leq 1} \otimes_{\mathcal{A}_{\leq 1}} \mathcal{C}_{\leq 1})/(\varpi^\infty\text{-torsion}))_* \quad (2.24)$$

となる。

上のテンソル積を完備テンソル積に変えても同様のことが成り立つ。

- (3) ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} を一つ固定する。 $\mathcal{A}^{\circ\circ}$ による剰余 (もしくは完備化) によって、 \mathcal{A}° の中の開 [completely]integrally closed な \mathcal{K}° 部分代数と被約 k 代数 $\mathcal{A}^\circ/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ の中の [completely]integrally closed な k 部分代数 (もしくは $\widehat{\mathcal{A}}^\circ$ の中の開 integrally closed な \mathcal{K}° 部分代数) の間に全単射がある。

以下ではノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} に対して、 $|\mathcal{K}|$ が $|\mathcal{A}|$ で稠密であるとする。

(4) A を上のように取り、 $\mathcal{A} := A[1/\varpi]$ とする。section 2.3.1 の記号を用いると $A_{\mathcal{A}}^+$ があり、また、

$$A_{\mathcal{A}}^{\dagger} := \{a \in \mathcal{A} \mid \exists n \in \mathbb{Z}^+, a^{p^n} \in A\} \quad (2.25)$$

と定義されていた。さらに $\mathcal{A} = A[1/\varpi]$ であることに注意すると、

$$A_{\mathcal{A}}^* = \{a \in \mathcal{A} \mid \exists m \in \mathbb{Z}^+, \forall n \in \mathbb{Z}^+, \varpi^m a^n \in A\} \quad (2.26)$$

となっている。^{*35} このとき

$$A_{\mathcal{A}}^{\dagger} \subset A_{\mathcal{A}}^+ \subset A_{\mathcal{A}}^* = (A_*)_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{A}^{\circ} \quad (2.27)$$

と $(A_{\mathcal{A}}^{\dagger})^* = (\mathcal{A}^{\circ})^*$ が成り立ち、さらにこれは $^A|\cdot|$ から誘導されるスペクトラル半ノルムによる単位円板と等しい。すなわち $\mathcal{A}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1} = (A_{\mathcal{A}}^{\dagger})^* = (\mathcal{A}^{\circ})^*$ となる。^{*36}

とくに $\mathcal{A}_{\leq 1}$ が Noether のとき、 \mathcal{A} における $\mathcal{A}_{\leq 1}$ の integral closure は \mathcal{A}° に等しい。

(5) ノルム K 代数 \mathcal{A} について以下は同値。

- (a) $|\cdot|$ はスペクトラルである。
- (b) $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}^{\circ}$ である。
- (c) $\mathcal{A}_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^*$ である (すなわち、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は \mathcal{A} で completely integrally closed である)。
- (d) $\mathcal{A}_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^{\dagger}$ である (すなわち、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は \mathcal{A} で integrally closed である)。
- (e) $\mathcal{A}_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^{\dagger}$ となる (すなわち、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は \mathcal{A} で p -root closed である)。
- (f) (さらに、もし $|p| \leq |\varpi|$ かつ $1/p \in \Gamma$ ならば ^{*37}) Frobenius 射 $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} \mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi$ は単射である。

(6) ノルム K 代数 \mathcal{A} が一様ならば、次の二つ

$$(\mathcal{A}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1})^{\circ} = (\mathcal{A}^{\circ})^* = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^* \quad (2.28)$$

$$\widehat{\mathcal{A}^{\circ}} = (\widehat{\mathcal{A}})^{\circ} \quad (2.29)$$

が成り立つ。

(7) \mathcal{A} が Banach K 代数であれば、 $(\mathcal{A}^u)^{\circ}$ はスペクトラル半ノルムによる $(\mathcal{A}^{\circ})^*$ の (分離的) 完備化になる。

^{*32} A が K° 上 flat であることは K° の任意の有限生成イデアル I について積を取る写像 $I \otimes_{K^{\circ}} A \rightarrow A$ が単射であることと同値である。 K° は付値環であるから、その有限生成イデアルはすべて単項イデアルになり、その生成系は $K^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ で取れることから同値になっている。

^{*33} $a \in A$ が infinite ϖ -divisible であるとは、 $a \in \cap_{n>0} \varpi^n A$ となること。

^{*34} 記号 A_* は Γ が \mathbb{R} で稠密なとき、 $K^{\circ\circ}$ が K° で冪等イデアルになり cadre を $(K^{\circ}, K^{\circ\circ})$ としたときに almost mathematics で定義したものと同様のものになる。稠密でないときは $A_* = A$ と定義しておく。実際例えば $\Gamma = \mathbb{Z}$ となったとすると $\varpi^{-1} \in \cap_{n>0} \varpi^{-n} A$ だが $\varpi^{-1} \notin A$ となる A が取れてしまう。

^{*35} $a \in A_{\mathcal{A}}^*$ のとき、ある有限生成 A 加群 B が存在して $A[a] \subset B \subset A = A[1/\varpi]$ になる。 $B = A(\alpha_1/\varpi^{n_1}) + \cdots + A(\alpha_k/\varpi^{n_k})$ と書いて、任意の正整数 n で $a^n \in A[a] \subset B$ となる。よって十分大きい $N(\geq n_i)$ を取れば $\varpi^N a^n \in A$ となる。逆にある N で任意の n で $\varpi^N a^n \in A$ となると、 $a^n \in A[1/\varpi^N]$ から $A[a] \subset A[1/\varpi^N]$ となるので $a \in A_{\mathcal{A}}^*$ になる。

^{*36} このようにノルムによって環の整閉包が計算できるが、これのイデアルの整閉包に関する類似物として Rees valuation を考えることが出来る。

^{*37} $1/p \in \Gamma$ は $\varpi_{1/p}$ が存在することに必要。 $|p| \leq |\varpi|$ は Frobenius 射 $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi_{1/p} \rightarrow \mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi$ が環準同型になるために必要。

証明. (1) もし $|a| \in |\mathcal{K}^\times|$ であれば、 $|\mathcal{K}^\times| = |\varpi|^\Gamma$ より、ある $r \in \Gamma$ が存在して

$$|a| = |\varpi|^r = (|\varpi|^{-r})^{-1} = |\varpi_{-r}|^{-1} \quad (2.30)$$

となる。この r が $r' := \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in \mathcal{A}_{\leq 1}\}$ に等しくなることを示す。まず、 $|\cdot|$ は \mathcal{K} 代数のノルムであるので \mathcal{K} の元に関する乗法性から、 $\varpi_{-s} \in \mathcal{K}^\times$ について、 $|\varpi_{-r}a| = 1$ より $\varpi_{-r}a \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので $r \leq r'$ となる。逆に $\varpi_{-s}a \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる任意の $s \in \Gamma$ を取る。すると、 r のとり方から $|a| = |\varpi|^r$ であることに注意すると、

$$1 \geq |\varpi_{-s}a| = |\varpi_{-s}||a| = |\varpi|^{-s}|a| = |\varpi|^{-s+r} \quad (2.31)$$

となる。 $\varpi \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ であって、 \mathcal{K} 上ではノルムは乗法的なので $|\varpi| < 1$ ゆえ、この (2.31) から $-s+r \leq 0$ より $r \geq s$ となるので、 $r' \geq r$ である。したがって $r = r'$ から、 $|a| \in |\mathcal{K}^\times|$ のとき (2.20) が成り立つ。そうでない場合、まず任意の $|a| \in |\mathcal{A}|$ について、 $|\varpi| < 1$ に注意すると、

$$|\varpi|^{\sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in \mathcal{A}_{\leq 1}\}} = \inf\{|\varpi|^s \in \mathbb{R} \mid s \in \Gamma, \varpi_{-s}a \in \mathcal{A}_{\leq 1}\} \quad (2.32)$$

$$= \inf\{|\varpi|^s \in \mathbb{R} \mid s \in \Gamma, |\varpi_{-s}a| \leq 1\} \quad (2.33)$$

$$= \inf\{|\varpi|^s \in \mathbb{R} \mid s \in \Gamma, |a| \leq |\varpi|^s \in |\mathcal{K}|\} \quad (2.34)$$

となっている^{*38}ので、 $|\mathcal{K}|$ の $|\mathcal{A}|$ における稠密性からわかる。

とくに $0 \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ の基本近傍系として、任意の正整数 n に対して半径 $|\varpi|^n$ の単位円板 $B_n(0) := \{a \in \mathcal{A}_{\leq 1} \mid |a| \leq |\varpi|^n\}$ が取れるので、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ は ϖ 進位相を持つ。 \mathcal{A} の完備性はその閉単位円板 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ の完備性と同値^{*39}なので、 \mathcal{A} が Banach であることと $\mathcal{A}_{\leq 1}$ が ϖ 進完備であることは同値。

(2) (a) ${}^A|\cdot|$ が \mathcal{A} 上の半ノルムであることは A が \mathcal{K}° 代数であることからわかる。さらに \mathcal{K} 代数の半ノルムであることは、(b) の証明の最初で示したとおり $A \subset \mathcal{A}_{\leq 1}$ であることより、任意の $x \in \mathcal{K}$ について ${}^A|x| = |x|$ となることからわかる ((1) の証明と同様)。とくに footnote *31 から、この ${}^A|\cdot|$ は ϖ_s のとり方によらず定まる。 A の ${}^A|\cdot|$ による位相は ϖ 進位相に等しい。よって、 ${}^A|\cdot|$ がノルムであることと A が ϖ 進分離的であることは同値。つまり $\bigcap_{n \geq 1} \varpi^n A = 0$ であるが、これは $A \setminus \{0\}$ が infinite ϖ -divisible を持たないことに等しい。また、 ${}^A|\cdot|$ の構成から $|\mathcal{K}| = |\varpi|^\Gamma$ は ${}^A|\mathcal{A}|$ で稠密になる。

A は \mathcal{K}° 上 flat なので、任意の $\varpi \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ と任意の正整数 n で $A/\varpi^{n-1} \xrightarrow{\varpi} A/\varpi^n$ が単射。 A は半ノルム ${}^A|\cdot|$ の定義から ϖ 進位相を持っているから、 $\hat{A} = \varprojlim A/\varpi^n$ となるので、単射性から任意の $\varpi \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ で ϖ -torsion free であるから \hat{A} は \mathcal{K}° 上 flat になる。

等号 $\hat{A} = \hat{A}[1/\varpi]$ は \mathcal{A} が A を定義環、 ϖA を定義イデアルとする Huber ring になっていることから従う。 $\hat{\mathcal{A}}_{\leq 1} = \widehat{\mathcal{A}_{\leq 1}}$ については \hat{A} 上に定まるノルムを考えれば単位閉円板についての議論から良い。

(b) $\mathcal{K}^{\circ\circ} = \bigcup_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ = \varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ$ であることに注意すると

$$A_* = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, A) = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ, A) = \varprojlim_{s \in \Gamma_{>0}} \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\varpi_s \mathcal{K}^\circ, A) = \varprojlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s} A = \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s} A \quad (2.35)$$

であるため、 $A_* = \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s} A$ が成り立つ。

^{*38} とくにこの表示から ϖ_s のとり方によらない。

^{*39} \mathcal{A} の任意の Cauchy 列 $(a_n)_{n=1}^\infty$ に対して、ある正整数 N が存在して $n, m \geq N$ で $|a_n - a_m| \leq 1$ となる。このとき $(a'_n := a_n - a_N)_{n=N}^\infty$ を取れば、これは $\mathcal{A}_{\leq 1}$ の中の Cauchy 列になるので、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ の完備性が使える。

$A \subset \mathcal{A}_{\leq 1}$ を示す。任意の $a \in A$ を取り、 ${}^A|a| = |\varpi|^r$ となったとする。とくに $\varpi_0 = 1$ として取れることから、 $\varpi_0 a \in A$ ゆえ、 $r \geq 0$ なので、 $|\varpi| < 1$ から ${}^A|a| = |\varpi|^r \leq |\varpi|^0 = 1$ より、 $a \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。よって $A \subset \mathcal{A}_{\leq 1}$ である。

一方、 $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ を取り、 ${}^A|\alpha| = |\varpi|^r$ となったとする。とくに $r \geq 0$ である。 $r = \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in A\} \geq 0$ から、任意の $s \in \Gamma_{>0}$ に対して、ある $s' \in \Gamma$ が存在して $-s \leq s'$ かつ $\varpi_{-s'}\alpha \in A$ となる。 $0 \leq s + s'$ から $|\varpi_s \varpi_{s'}| = |\varpi|^{s+s'} \leq 1$ より $\varpi_s \varpi_{s'} \in \mathcal{K}^\circ$ なので、 $(\varpi_s \varpi_{s'})\varpi_{-s'}\alpha = \varpi_s \alpha \in A$ ゆえ、任意の $s \in \Gamma_{>0}$ で $\alpha \in \varpi_{-s}A$ となる。したがって $\mathcal{A}_{\leq 1} \subset A_*$ である。逆に $\alpha \in A_* = \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}A \subset \mathcal{A}$ を任意に取る。すると Γ が加法群なので任意の $s \in \Gamma_{>0}$ で $\varpi_s \alpha \in A$ から、任意の $s \in \Gamma_{<0}$ で $\varpi_{-s}\alpha \in A$ となることになる。ゆえに Γ が離散的でないとする、 \mathbb{R}^+ での稠密性から $r = \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in A\} \geq 0$ なので、 ${}^A|\alpha| = |\varpi|^r \leq 1$ より、 $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となるので、 $\mathcal{A}_{\leq 1} = A_* = \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}A$ となる。

Γ が離散的であるとき、とくに r は \sup でなく \max で取れるので $r \in \Gamma$ となり、 $\varpi_{-r}\alpha = \varpi_r^{-1}\alpha \in A$ となる。 $|\varpi_r| = |\varpi|^r \leq 1$ から $\varpi_r \in \mathcal{K}^\circ$ であり、 A は \mathcal{K}° 代数なので $\varpi_r(\varpi_r^{-1}\alpha) = \alpha \in A$ となる。したがってとくに Γ が離散的であるときは $\mathcal{A}_{\leq 1} = A$ となる。

$\mathcal{K}^\circ A$ の元を $x_k \in \mathcal{K}^\circ$ と $a_k \in A$ によって $\sum_{k=1}^n x_k a_k$ と表す。このとき上で示したことから $A \subset \mathcal{A}_{\leq 1}$ と ${}^A|x_k| = |x_k| < 1$ であることから、

$${}^A \left| \sum_{k=1}^n x_k a_k \right| \leq \max\{{}^A|x_k a_k| \mid k = 1, \dots, n\} < \max\{{}^A|a_k| \mid k = 1, \dots, n\} \leq 1 \quad (2.36)$$

より、 $\mathcal{A}_{<1} \supset \mathcal{K}^\circ A$ となる。逆に $a/\varpi^n \in \mathcal{A}_{<1} = (A[1/\varpi]_{<1})$ を任意に取る。 ${}^A|a/\varpi^n| = |\varpi|^r < 1$ より、 $|\varpi| < 1$ から $0 < r = \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}(a/\varpi^n) \in A\}$ より、ある $0 < s \in \Gamma$ で $\varpi_{-s}(a/\varpi^n) \in A \subset \mathcal{A}$ となる。 $\varpi_{-s} = \varpi_s^{-1}$ と取って良く、 $s > 0$ から $|\varpi_s| = |\varpi|^s < 1$ ゆえ $\varpi_s \in \mathcal{K}^\circ$ なので、 $a/\varpi^n \in \varpi_s A \subset \mathcal{K}^\circ A$ より $\mathcal{A}_{<1} = \mathcal{K}^\circ A$ となる。

${}^A|\alpha| = {}^{A_{\leq 1}}|\alpha|$ を示す。 Γ が離散的なら (b) から明らかである。 Γ が離散的でないとする。 ${}^A|\alpha| = |\varpi|^r$ と ${}^{A_{\leq 1}}|\alpha| = |\varpi|^{r'}$ となったとする。まず $s \in \Gamma$ で $\varpi_{-s}\alpha \in A$ ならば $A \subset \mathcal{A}_{\leq 1}$ より $r \leq r'$ となる。逆に $s \in \Gamma$ で $\varpi_{-s}\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1} = A_*$ となったとすると、任意の $t \in \Gamma_{>0}$ で $\varpi_{-s}\alpha \in \varpi_{-t}A$ から $\varpi_t \varpi_{-s}\alpha \in A$ となる。とくに元のとり方によらないことから $\varpi_{-(s-t)}\alpha \in A$ より $s - t \leq r$ となる。 $t \rightarrow 0$ とすれば $s \leq r$ より $r' \leq r$ なので $r = r'$ より、 ${}^A|-| = {}^{A_{\leq 1}}|-|$ となる。

(c) \mathcal{K} 代数の射 $\varphi: A[1/\varpi] \rightarrow A'[1/\varpi]$ について $\varphi(A) \subset A'$ が成り立っているとする。 Γ が離散的なら (b) から $A = \mathcal{A}_{\leq 1}$ と $A' = \mathcal{A}'_{\leq 1}$ ゆえ、 ϖ が有界線形作用素であることがわかる。 Γ が離散的でなくても (b) から

$$\varphi(\mathcal{A}_{\leq 1}) = \varphi(A_*) = \varphi \left(\bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}A \right) \subset \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}\varphi(A) \subset \bigcap_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_{-s}A' = A'_* = \mathcal{A}'_{\leq 1} \quad (2.37)$$

より、 φ は有界なのでとくに連続になる。さらに $\varphi^{-1}(A') = A$ のとき、任意の $\alpha \in A$ について ${}^A|\alpha| = |\varpi|^r$ かつ、 ${}^{A'}|\varphi(\alpha)| = |\varpi|^{r'}$ となったとする。まず $\varpi_{-s}\alpha \in A$ ならば φ が \mathcal{K} 代数の射で $\varphi(A) \subset A'$ より $\varpi_{-s}\varphi(\alpha) \in \varphi(A) \subset A'$ なので、 $r \leq r'$ となる。逆に $\varpi_{-s'}\varphi(\alpha) \in A'$ だとすると、 $\varphi(\varpi_{-s'}\alpha) \in A'$ と $\varphi^{-1}(A') = A$ から $\varpi_{-s'}\alpha \in A$ より、 $r' \leq r$ なので、 $r = r'$ から φ は isometric になる。

最後の同値性を示す。 φ が isometric であることと、 φ が $\mathcal{A}_{\leq 1}$ と $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \varphi(A)$ を \mathcal{K}° 代数として同型に対応させること (すなわち $\varpi|_{\mathcal{A}_{\leq 1}}: \mathcal{A}_{\leq 1} \rightarrow \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \varpi(A)$ が同型かつ $\varpi^{-1}(\mathcal{A}'_{\leq 1}) = \mathcal{A}_{\leq 1}$ であること) は同値になる。実際、まず φ が isometric になっているならば、 $\mathcal{A}'_{\leq 1}$ に移るのは $\mathcal{A}_{\leq 1}$ に入ってる元のみである。 φ は単

射であるので $\varphi(\mathcal{A}_{\leq 1}) \cap \mathcal{A}'_{\leq 1}$ が対応する。よって \mathcal{K}^0 代数の同型になる。逆に $\mathcal{A}_{\leq 1}$ と $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \varphi(\mathcal{A})$ を \mathcal{K}^0 代数として同型に対応しているとする。任意の $\alpha \in \mathcal{A}$ について、ある正整数 m が存在して $\varpi^m \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。もし $A'|\varphi(\varpi^m \alpha)| = A|\varpi^m \alpha|$ となったとすれば、このノルムは \mathcal{K} 代数のノルムより、 $A'|\varphi(\alpha)| = A|\alpha|$ となる。ゆえに $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ として $A'|\varphi(\alpha)| = A|\alpha|$ を示せば良い。(b) から $A| - | = A_{\leq 1}| - |$ となっていることに注意する。まず $\varpi_{-s} \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ であるとき、 φ の仮定から $\varpi_{-s} \varphi(\alpha) \in \varphi(\mathcal{A}_{\leq 1}) \subset \mathcal{A}'_{\leq 1}$ ゆえ、 $A'|\varphi(\alpha)| \leq A|\alpha|$ となる。逆に、 $\varpi_{-s'} \varphi(\alpha) \in \mathcal{A}'_{\leq 1}$ のとき $\varphi(\varpi_{-s'} \alpha) \in \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \varphi(\mathcal{A})$ であるので、 φ の仮定から $\varpi_{-s'} \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。したがって $A'|\varphi(\alpha)| = A|\alpha|$ となるので φ が isometric になる。

まず φ が isometric なら、上記のことから $\varphi(\mathcal{A}_{\leq 1}) \subset \mathcal{A}'_{\leq 1}$ となる。また、もし $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ で $\varphi(\alpha) \in \varpi \mathcal{A}'_{\leq 1}$ だったとすると、 $\varpi_{-1} \varphi(\alpha) \in \mathcal{A}'_{\leq 1}$ より、 $A'|\varphi(\alpha)| \leq |\varpi| < 1$ となる。isometric であることから $A|\alpha| \leq |\varpi|$ より $\varpi^{-1} \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので $\alpha \in \varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ であるから $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi \rightarrow \mathcal{A}'_{\leq 1}/\varpi$ は単射になる。

逆を示す。 $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi \rightarrow \mathcal{A}'_{\leq 1}/\varpi$ の単射性からもし $\varphi(\alpha) = 0$ ならば、 $\varpi^{-1} \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となり、 $\varphi(\varpi^{-1} \alpha) = 0$ から、繰り返して α は infinite ϖ -divisible となる。isometric の概念はノルム \mathcal{K} 代数の間の射においてのみ定義しているから、今 $A| - |$ はノルムなので (a) から infinite ϖ -divisible を持たないから $\alpha = 0$ となる。よって、 φ も単射になる。とくに $\mathcal{A} \subset \mathcal{A}'$ として考えて良い。

上で示した同値性から、 $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \mathcal{A}$ を示せば良い。 φ の仮定から $\mathcal{A}_{\leq 1} \subset \mathcal{A}'_{\leq 1}$ から $\mathcal{A}_{\leq 1} \subset \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \mathcal{A}$ が成り立っている。ここで任意の $\alpha \in \mathcal{A}$ は $\lim_{n \rightarrow \infty} \varpi^n \alpha = 0$ より、十分大きい n で $\varpi^n \alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので、 $\alpha \in 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。よって、任意の正整数 n で $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ を示せばよい。^{*40}

まず明らかに $\mathcal{A}_{\leq 1} \subset \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1}$ となっている。 $n = 1$ のとき、 $\alpha/\varpi \in \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ を任意にとると $\alpha \in \varpi \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \mathcal{A}_{\leq 1}$ から $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi \rightarrow \mathcal{A}'_{\leq 1}/\varpi$ の単射性より $\alpha \in \varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ となるので $\alpha/\varpi \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ より $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。帰納法を用いる。任意の $\alpha/\varpi^{n+1} \in \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^{n+1} \mathcal{A}_{\leq 1}$ を取る。 ϖ を掛けると、帰納法の仮定から $\alpha/\varpi^n \in \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので、ある $\beta \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ が存在して $\alpha/\varpi^{n+1} = \beta/\varpi$ となる。ゆえに $\alpha/\varpi^{n+1} = \beta/\varpi \in \mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので任意の正整数 n で $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ が成り立つから、上で述べたとおり、 $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \mathcal{A} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ となるので、 φ は isometric になる。

(d) A'/A が ϖ -torsion free であることから $A' \cap A[1/\varpi] = A$ となる。よって (c) の $\varpi: A[1/\varpi] \rightarrow A'[1/\varpi]$ を包含写像として取れば $\varpi^{-1}(A') = A$ ゆえ、 $A[1/\varpi] \rightarrow A'[1/\varpi]$ は isometric になるので $A'| - |$ の A への制限が $A| - |$ になる。

$A/J| - |$ は $(A/J)[1/\varpi] = A/(J[1/\varpi])$ 上の半ノルムである。 $a \in \mathcal{A}$ に対して \bar{a} を $A/(J[1/\varpi])$ への像とする。まず (2) の定義から

$$A/J|a| = |\varpi|^{\sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s} \bar{a} \in A/J\}} \quad (2.38)$$

となっている。 \bar{a} に移る $a' \in A[1/\varpi]$ について

$$r(a') := \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s} a' \in A\} \quad (2.39)$$

とおくと、 $A| - |$ から得られる剰余ノルムはその定義と $|\varpi| < 1$ に注意して \sup と \inf を考えると

$$\inf_{a' \mapsto \bar{a}} A|a'| = \inf_{a' \mapsto \bar{a}} |\varpi|^{r(a')} = |\varpi|^{\sup_{a' \mapsto \bar{a}} \{r(a')\}} \quad (2.40)$$

$$= |\varpi|^{\sup\{s \in \Gamma \mid \exists a' \mapsto \bar{a}, \varpi_{-s} a' \in A\}} \quad (2.41)$$

^{*40} $n \rightarrow \infty$ で $1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq |\varpi|^{-n}} \rightarrow \mathcal{A}$ であることに注意すると、等号 $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap 1/\varpi^n \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ は $\mathcal{A}'_{\leq 1} \cap \mathcal{A}_{\leq |\varpi|^{-n}} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ であり、すなわち定義域側の \mathcal{A} でノルムが大きくても、値域側の \mathcal{A}' で小さければ定義域側でも小さいということを意味している。

となる。 $i \in J[1/\varpi]$ に対して $i = \varpi_{-s}(i/\varpi_{-s})$ と $i/\varpi_{-s} \in J[1/\varpi]$ に注意すると、(2.41) の指数部分は

$$\sup_{i \in J[1/\varpi]} \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a + i \in A\} \quad (2.42)$$

に等しい。 A/J が ϖ -torsion free であることから $A \cap J[1/\varpi] = J$ となる。とくに $A \hookrightarrow A[1/\varpi] \rightarrow (A[1/\varpi])/(J[1/\varpi]) = (A/J)[1/\varpi]$ は $A/J \subset (A/J)[1/\varpi]$ への全射になる。すると次の等式

$$\sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}\bar{a} \in A/J\} = \sup_{i \in J[1/\varpi]} \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a + i \in A\} \quad (2.43)$$

が成り立つ。実際、 $s \in \Gamma$ で $\varpi_{-s}\bar{a} \in A/J \subset A/J[1/\varpi]$ なら、ある $\alpha \in A$ が存在して α は $\varpi_{-s}\bar{a} \in A/J[1/\varpi]$ に移るので、 $\varpi_{-s}a - \alpha \in J[1/\varpi]$ ゆえ、ある $i \in J[1/\varpi]$ で $\varpi_{-s}a + i \in A$ となるので \leq は成り立つ。逆に $\varpi_{-s}a + i \in A \subset A[1/\varpi]$ のとき、 $A/J[1/\varpi]$ に移すと $\varpi_{-s}\bar{a} \in A/J$ より \geq も成り立つので (2.43) は成り立つ。以上より、(2.38) と (2.41) と (2.43) から $A/J|\bar{a}| = \inf_{a' \mapsto \bar{a}} A|a'|$ より、商半ノルムに一致することがわかる。

\mathcal{A} のイデアル \mathcal{I} について、もし $\alpha \in \mathcal{A}$ が $\varpi\alpha \in \mathcal{I}$ だったとすると、 \mathcal{I} は K 加群でもあるので $\alpha \in \mathcal{I}$ から $\mathcal{A}_{\leq 1}/\mathcal{I}_{\leq 1}$ は ϖ -torsion free である。さらに $\mathcal{A}/\mathcal{I} = (\mathcal{A}_{\leq 1}/\mathcal{I}_{\leq 1})[1/\varpi]$ であるので、(b) から $(\mathcal{A}/\mathcal{I})_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1}/\mathcal{I}_{\leq 1})^*$ となる。

(e) ?

(3) まず \mathcal{A}° の整閉な開 K° 部分代数 \mathcal{B} を取ると、開かつ整閉であることから $\mathcal{A}^{\circ\circ}$ を必ず含む。逆に $\mathcal{A}^{\circ\circ}$ を含むならばこれは開集合なので開 K° 部分代数になる。よって \mathcal{A}° の整閉な開 K° 部分代数と $\mathcal{A}^\circ/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ の k 部分代数が一对一に対応している。[completely] integrally closed 同士で対応していることを示す。次のことから互いに対応していることがわかる。

主張. S を環とし、そのイデアル I をとる。 R が I を含む R の部分環とする。 $s \in S$ と $\bar{s} \in S/I$ を s の像とする。このとき s が R 上 (completely) integral であることと \bar{s} が R/I で (completely) integral であることは同値。

この主張は、 I による剰余で S の中で I を含む有限生成 R 部分加群と S/I の中の有限生成 R/I 部分加群が一对一に対応していることと、section 2.3.1 の定義から従う。

完備化については $\varpi^n \mathcal{A}^{\circ\circ}$ による剰余の対応を考えると上記のような一対一対応から同様に示される。

(4) $A_{\mathcal{A}}^\dagger \subset A_{\mathcal{A}}^+ \subset A_{\mathcal{A}}^*$ は section 2.3.1 の通り、一般に成り立っている。

$A_{\mathcal{A}}^* = (A_*)_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{A}^\circ$ を示す。 $a \in A_{\mathcal{A}}^*$ は、ある有限生成 A 加群 B で $A[a] \subset B \subset \mathcal{A}$ となる。ここで B は、ある $b_1, \dots, b_n \in B$ によって $B = Ab_1 + \dots + Ab_n$ と書ける。 $A \subset A_* = \mathcal{A}_{\leq 1}$ から、

$$|B| \leq \max\{|A||b_i| \mid i = 1, \dots, n\} \leq \max\{|b_i| \mid i = 1, \dots, n\} \quad (2.44)$$

より、 B は有界であるので、 $\{a^n \mid n \in \mathbb{Z}^+\} \subset B$ も有界だから $a \in \mathcal{A}^\circ$ であるので $A_{\mathcal{A}}^* \subset \mathcal{A}^\circ$ となる。 $a \in (A_*)_{\mathcal{A}}^*$ についても $A_* = \mathcal{A}_{\leq 1}$ から同じことが言えるから $A_{\mathcal{A}}^* \subset (A_*)_{\mathcal{A}}^* \subset \mathcal{A}^\circ$ となる。

逆に $a \in \mathcal{A}^\circ$ を取ると、ある $N \in \mathbb{Z}^+$ が存在して、任意の正整数 n で $A|a^n| \leq |\varpi|^N$ となる。よって、 $\varpi_{-N} = \varpi^{-N}$ から、 $\varpi_{-N}a^n \in A$ ゆえ $a^n \in \varpi^N A$ となる。したがって $A[a] \subset \varpi^N A \subset \mathcal{A}$ から、 $a \in A_{\mathcal{A}}^*$ なので $A_{\mathcal{A}}^* = (A_*)_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{A}^\circ$ となることが示された。

まず先に $\mathcal{A}_{||_{sp} \leq 1} = (A_{\mathcal{A}}^\dagger)_*$ を示す。 $A_{\mathcal{A}}^\dagger[1/\varpi] = \mathcal{A}$ となっているので、 $A_{\mathcal{A}}^\dagger$ から得られる \mathcal{A} 上の半ノルム

$A_A^\dagger|-|$ を取れる。これを $|-|^\dagger$ と書くこととする。 $a \in \mathcal{A}$ と $s \in \Gamma$ について、(2.25) から、

$$\varpi_{-s}a \in A_A^\dagger \iff \exists n \in \mathbb{Z}^+, (\varpi_{-s}a)^{p^n} = \varpi_{-p^n s}a^{p^n} \in A \quad (2.45)$$

なので $|a|^\dagger = |\varpi|^{r^\dagger}$ は $r^\dagger := \sup\{s \in \Gamma \mid \varpi_{-s}a \in A_A^\dagger\} = \sup\{s \in \Gamma \mid \exists n \in \mathbb{Z}^+, \varpi_{-p^n s}a^{p^n} \in A\}$ より、

$$|a|^\dagger = |\varpi|^{r^\dagger} = \inf\{|\varpi|^s \mid s \in \Gamma, \exists n \in \mathbb{Z}^+, \varpi_{-p^n s}a^{p^n} \in A\} = \inf_{n \in \mathbb{Z}^+} \inf\{|\varpi|^s \mid s \in \Gamma, \varpi_{-p^n s}a^{p^n} \in A\} \quad (2.46)$$

$$= \inf_{n \in \mathbb{Z}^+} \inf\{|\varpi|^{s'/p^n} \mid s' \in \Gamma, \varpi_{-s'}a^{p^n} \in A\} = \inf_{n \in \mathbb{Z}^+} A|a^{p^n}|^{1/p^n} \quad (2.47)$$

となり、(Fukete の補題から) これは $\lim_{n \rightarrow \infty} A|a^{p^n}|$ と一致するので $|a|^\dagger = |a|_{sp}$ となる。

$|-|^\dagger = A_A^\dagger|-|$ であることから、(b) より、 $(A_A^\dagger)_*$ と \mathcal{A} 内の $|-|^\dagger$ に関する単位円板 $\mathcal{A}_{||^\dagger| \leq 1}$ は一致する。さらに $|-|^\dagger$ は $A|-|$ から誘導されるスペクトラル半ノルム $|-|_{sp}$ と一致しているので、 $(A_A^\dagger)_*$ はそのスペクトラル半ノルム $|-|_{sp}$ による単位円板と一致する。すなわち $\mathcal{A}_{||_{sp}| \leq 1} = \mathcal{A}_{||^\dagger| \leq 1} = (A_A^\dagger)_*$ が示された。

$(A_A^\dagger)_* = (\mathcal{A}^\circ)_*$ を示す。 $a \in \mathcal{A}^\circ$ は $A|-|$ による冪有界元であり、 $|a|_{sp} \leq A|a|$ から、 $|a|_{sp}$ においても冪有界になる。よってとくに $|a|_{sp} \leq 1$ なので $a \in \mathcal{A}_{||_{sp}| \leq 1} = (A_A^\dagger)_*$ となるので、 $\mathcal{A}^\circ \subset (A_A^\dagger)_*$ である。一方、最初に示したことから $A_A^\dagger \subset \mathcal{A}^\circ$ ゆえ $(A_A^\dagger)_* \subset (\mathcal{A}^\circ)_*$ であるから、 $(\mathcal{A}^\circ)_* = (A_A^\dagger)_*$ となることがわかる。

$A_* = \mathcal{A}_{\leq 1}$ より、 $\mathcal{A}_{\leq 1}$ が Noether なら、 $(\mathcal{A}_{\leq 1})_A^\dagger = (A_*)_A^\dagger = (A_*)_A^*$ なので今示した $(A_*)_A^* = \mathcal{A}^\circ$ と合わせて、 \mathcal{A} における $\mathcal{A}_{\leq 1}$ の integral closure は \mathcal{A}° に等しい。

(5) $A = \mathcal{A}_{\leq 1}$ として考えた $A|-|$ と元々の $|-|$ は (1) より一致しているので、今までの結果を用いることが出来る。まず (2.27) から $\mathcal{A}_{\leq 1} \subset (\mathcal{A}_{\leq 1})_A^\dagger \subset (\mathcal{A}_{\leq 1})_A^* \subset (\mathcal{A}_{\leq 1})_A^* = \mathcal{A}^\circ$ となる。よって、まず (a) \Rightarrow (b) \Leftrightarrow (c) \Rightarrow (d) \Rightarrow (e) がわかる。

(e) \Rightarrow (a) を示す。(4) から $(\mathcal{A}_{\leq 1})_A^\dagger$ から得られるノルム $|-|^\dagger$ と $|-| = \mathcal{A}_{\leq 1}|-|$ から得られるスペクトラル半ノルム $|-|_{sp}$ は一致する。(e) から $\mathcal{A}_{\leq 1}|-| = |-|^\dagger$ ゆえ

$$|-| = \mathcal{A}_{\leq 1}|-| = |-|^\dagger = |-|_{sp} \quad (2.48)$$

であるので \mathcal{A} はスペクトラルになるから (a) が従う。

(e) \Rightarrow (f) を示す。 $x \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ が $x^p \in \varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ となったとき、 $|(x/\varpi_{1/p})^p| = |x^p \varpi^{-1}| \leq 1$ より $(x/\varpi_{1/p})^p \in \mathcal{A}_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_A^\dagger$ ゆえ、 $x/\varpi_{1/p} \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ なので Frobenius 射 $\mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi_{1/p} \rightarrow \mathcal{A}_{\leq 1}/\varpi$ は単射になる。

(f) \Rightarrow (e) を示す。まず $\mathcal{A} = \mathcal{A}_{\leq 1}[1/\varpi_{1/p}]$ が成り立っていることに注意すると、 \mathcal{A} の元 α は $a \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ と $n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ によって $\alpha = a/\varpi_{1/p}^n$ と書ける。 $\alpha \in (\mathcal{A}_{\leq 1})_A^\dagger$ であるとする、ある正整数 m で $\alpha^m \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。 m について帰納的に考えれば $m = 1$ として $\alpha^p \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ であるときに $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となることを示せば良い。

$\alpha = a/\varpi_{1/p}^n \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ を分母の n に関する帰納法で示す。 $n = 1$ のとき $\alpha = a/\varpi_{1/p} \in \mathcal{A}$ が $\alpha^p = (a/\varpi_{1/p})^p = a^p/\varpi_{1/p}^p \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ ゆえ、 $\varpi_{1/p}^p = \varpi$ と合わせて $a \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ は $a^p \in \varpi \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。(f) の単射性から $a \in \varpi_{1/p} \mathcal{A}_{\leq 1}$ であるので $\alpha = a/\varpi_{1/p} \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となるので成り立つ。

$n - 1$ で成り立っているとする。 $\alpha^p \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ から

$$\left(\frac{a}{\varpi_{1/p}^{n-1}}\right)^p = \left(\frac{a}{\varpi_{1/p}^n}\right)^p \cdot \left(\frac{\varpi_{1/p}}{1}\right) = \alpha^p \cdot \left(\frac{\varpi_{1/p}}{1}\right) \in \mathcal{A}_{\leq 1} \quad (2.49)$$

であるので、帰納法の仮定から $(a/\varpi_{1/p}^{n-1}) \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。ゆえに

$$\alpha = \frac{a}{\varpi_{1/p}^n} = \frac{(a/\varpi_{1/p}^{n-1})}{\varpi_{1/p}} \in \mathcal{A}_{\leq 1}[1/\varpi_{1/p}] \quad (2.50)$$

かつ $\alpha^p \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ より、 $n = 1$ のときの議論から $\alpha \in \mathcal{A}_{\leq 1}$ となる。したがって $\mathcal{A}_{\leq 1} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^{\dagger}$ から (e) が成り立つ。

(6) 一様ノルム \mathcal{K} 代数の位相に関する主張であるため、最初から \mathcal{A} がスペクトラルであるとしてよい。(5) の (b) と (c) (もしくは一様性を用いること無く (2.27)) から $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}^{\circ} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^*$ である。(1) から \mathcal{A} のノルム $|\cdot|$ は $\mathcal{A}_{\leq 1}|\cdot|$ に一致しているので、(2) の (b) と \mathcal{A} の一様性から $\mathcal{A}^{\circ} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ であることに注意すれば $(\mathcal{A}^{\circ})_* = (\mathcal{A}_{\leq 1})_* = \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}^{\circ} = (\mathcal{A}_{\leq 1})_{\mathcal{A}}^*$ となることがわかった。

$\widehat{\mathcal{A}^{\circ}} = \widehat{\mathcal{A}^{\circ}}$ については (a) から $\widehat{\mathcal{A}_{\leq 1}} = \widehat{\mathcal{A}_{\leq 1}}$ であるので、あとはスペクトラルとしていることから $\mathcal{A}^{\circ} = \mathcal{A}_{\leq 1}$ が成り立つのでこれらを適用すれば良い。

(7) まず (4) から $(\mathcal{A}^{\circ})_*$ がスペクトラル半ノルム $|\cdot|_{sp}$ による単位円板になる。 \mathcal{A}^u は \mathcal{A} のスペクトラル半ノルムによる完備化であり、スペクトラルだから $(\mathcal{A}^u)_{\leq 1} = \mathcal{A}^{u^{\circ}}$ である。よって、単位円板が閉であることから、 $\mathcal{A}^{u^{\circ}}$ は $(\mathcal{A}^{\circ})_*$ のスペクトラル半ノルムによる完備化に等しい。□

2.3.3 Remarque

- (1) Frobenius 射 $\mathcal{A}^{\circ}/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} \mathcal{A}^{\circ}/\varpi$ は \mathcal{A} が一様でなかったとしても \mathcal{A}° はいつでも整閉であるから (5) の証明と全く同様にして常に単射になることがわかる。
- (2) 命題 2.3.1(2.27) において $A_{\mathcal{A}}^+ \subset A_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{A}^{\circ} \subset \mathcal{A}_{||_{sp} \leq 1}$ は真の包含になり得る。例を与える。 $A := \mathcal{K}^{\circ}[\varpi T, \dots, \varpi^{i+1} T^p, \dots] \subset \mathcal{K}^{\circ}[T]$ とする。このとき $|\cdot| := A|\cdot|$ と表すことにする。すると $|T^m| = |\varpi|^{-1 - \lfloor \log_p m \rfloor}$ かつ $\mathcal{A} := A[1/\varpi] = \mathcal{K}[T]$ かつ $\mathcal{A}^{\circ} = A_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{K}^{\circ} + \mathcal{K}^{\circ\circ} T \mathcal{K}^{\circ}[T]$ かつ $(\mathcal{A}^{\circ})_{\mathcal{A}}^* = (A_{\mathcal{A}}^*)_{\mathcal{A}}^* = \mathcal{K}^{\circ}[T]$ と $(\mathcal{A}^{\circ})_{\mathcal{A}}^+ = \mathcal{A}^{\circ}$ が成り立つ。これは completely integral closure である $A_{\mathcal{A}}^*$ の completely integral closure がもとに戻らない例になっている。さらにスペクトラル半ノルムによる単位円板と \mathcal{A}° が一致していない例になっている。

2.3.4

以下では $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密であるとする。

系 2.3.2. 関手 $\mathcal{B} \mapsto \mathcal{B}^{\circ}$ は一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏 (\mathcal{K} -uBan) と \mathcal{K}° 代数 B であって以下の条件を満たすものへの圏同値を与える。

- (1) B は \mathcal{K}° 上 flat である。
- (2) B は ϖ 進完備である。
- (3) B は $B[1/\varpi]$ において $[p\text{-root/integrally/completely integrally}]$ closed である。
- (4) $B = \text{Hom}_{\mathcal{K}^{\circ}}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, B)(= B_*)$ となる。

準逆関手は $B \mapsto (B[1/\varpi], {}^B|\cdot|)$ によって与えられる。ノルム \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} に対して一様 Banach \mathcal{A} 代数と \mathcal{A}° 代数で上の条件を満たすものとの間にも同じ圏同値が与えられる。

(4) のもとで (3) (の三つの条件) は ${}^B|\cdot|$ がスペクトラルであることと同値である (命題 2.3.1(2)(b) と命題 2.3.1(5) からわかる)。圏同値であるから $\mathcal{B} = \mathcal{B}^{\circ}[1/\varpi]$ 上に ${}^{\mathcal{B}^{\circ}}|\cdot|$ で定める位相ももとのノルム $|\cdot|$ で定める位相が一致しているだけで、ノルムとして一致しているわけではないから \mathcal{B} がスペクトラルとは言

えていない。あくまで一様性からノルム \mathcal{K} 代数として同型になるだけ。

証明. \mathcal{B}° が (1)~(4) を満たすことを示す。

(1) について。 $b \in \mathcal{B}^\circ$ が $\varpi b = 0 \in \mathcal{B}^\circ$ のとき $\varpi b = 0 \in \mathcal{B}$ であるから、 ϖ^{-1} を掛けて $b = 0$ より、 \mathcal{B}° は ϖ -torsion free なので良い。

(2) について。 \mathcal{B} が一様 Banach より section 2.2.4 からスペクトラル半ノルムについても完備である。すると $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1}$ だから \mathcal{B}° も完備になる。 \mathcal{B}° の持つ位相は命題 2.3.1(1) をスペクトラル半ノルムに対して適用すれば ϖ 進位相であることがわかるので \mathcal{B}° は ϖ 進完備。

(3) について。 命題 2.3.1(5) を $(\mathcal{B}, |\cdot|_{sp})$ に適用すれば $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1}$ よりよい。

(4) について。 $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密であるから、命題 2.3.1 で取れる Γ は \mathbb{R} で稠密なので、命題 2.3.1(2)(b) をスペクトラル半ノルムに適用すれば $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\|\cdot\|_{sp} \leq 1} = \mathcal{B}_*^\circ = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ よりよい。 \square

系 2.3.3. \mathcal{B} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とする。このとき自然に \mathcal{B} と \mathcal{B}° と \mathcal{B}°/ϖ と $\mathcal{B}^\circ/\mathcal{B}^{\circ\circ}$ それぞれの冪等元の間に全単射がある。

系 2.3.2 から \mathcal{B} はスペクトラルとしてよい。 \mathcal{B} と \mathcal{B}° の間に関しては $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\leq 1}$ より section 2.2.6 の後半からわかる。 \mathcal{B}° と \mathcal{B}°/ϖ の間に関しては \mathcal{B}° が ϖ 進完備であることから従う。 \mathcal{B}°/ϖ と $\mathcal{B}^\circ/\mathcal{B}^{\circ\circ}$ の間に関しては $\mathcal{B}^\circ/\varpi \rightarrow \mathcal{B}^\circ/\mathcal{B}^{\circ\circ}$ の核が冪零イデアルになることから従う。

補題 2.3.4. \mathcal{A} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とする。 \mathfrak{m} を \mathcal{A}° の冪等イデアルであって、 $\mathcal{K}^{\circ\circ}\mathfrak{m} = \mathfrak{m}$ となるものとする。 \mathcal{A}° 代数の圏における自己関手 $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ を cadre^{*41} としたときの局所化の almost element により与える。すなわち、 \mathcal{A}° 代数 B に対して

$$B \mapsto (B^a)_* = \text{Hom}_{(\mathcal{A}^\circ)^a\text{-Alg}}((\mathcal{A}^\circ)^a, B^a) = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) \quad (2.51)$$

とする。この関手は系 2.3.2 の四条件を保つ。とくに almost element を取る関手 $(-)^a$ は系 2.3.2 の四条件を満たす \mathcal{A}° 代数のなす圏上の局所化関手 $(-)^a$ の右随伴になる。よって limit と可換になる。

$(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ が cadre であることを確認する。仮定から冪等イデアルになっている。 $\tilde{\mathfrak{m}}$ が \mathcal{A}° 上 flat であることはこの補題 2.3.4 を示すにあたって必要ないため、flat であることは課さなくてよい。

ここで二つの cadre $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ から $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ}\mathcal{A}^\circ = \mathcal{A}^{\circ\circ})$ ^{*42} への cadre の変換が、 $\mathcal{K}^{\circ\circ} \subset \mathcal{K}^{\circ\circ}\mathcal{A}^\circ$ に注意すれば包含写像 $\mathcal{K}^\circ \hookrightarrow \mathcal{A}^\circ$ によって得られる。この cadre の変換について $\mathcal{K}^{\circ\circ}$ が $\mathcal{K}^{\circ\circ}\mathcal{A}^\circ$ を生成していることから section 1.5 より $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ と $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ}\mathcal{A}^\circ)$ における”almost”は同じ意味を持つ。すなわち、任意の \mathcal{A}° 加群 M について cadre $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ に関して almost zero であることと、cadre $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{A}^{\circ\circ})$ に関して almost zero であることは同値になる。

さらに \mathfrak{m} が \mathcal{A}° のイデアルであることから $\mathfrak{m} = \mathcal{K}^{\circ\circ}\mathfrak{m} \subset \mathcal{K}^{\circ\circ}\mathcal{A}^\circ = \mathcal{A}^{\circ\circ}$ より、 \mathcal{A}° 上の恒等写像は $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ から $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{A}^{\circ\circ})$ への cadre の変換を得る。この返還に関して上記のような同値性を示せるとは限らないが、 \mathcal{A}° 加群 M が cadre $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{A}^{\circ\circ})$ に関して almost zero であれば $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ に関しても almost zero になることは

^{*41} ただし $\tilde{\mathfrak{m}}$ の flat 性は課していない

^{*42} $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密なので section 2.2.2 から確かに cadre の仮定 (とくに冪等性) を満たす。

分かる。以上のことから、 $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ に関しての”almost”の性質を示すとき、 $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ で示せば十分であることが分かる。

証明. (1) を保つこと。 B が ϖ -torsion free のとき B_* も ϖ -torsion free になるので良い。

(2) を保つこと。 関手 $B \mapsto (B^a)_*$ は limit と可換だが ϖ^n による剰余と可換とは限らないから注意深く扱う必要がある。任意の \mathcal{A}° 代数 B について、ここで標準的な射 $u: \widehat{(B^a)_*} \rightarrow (\widehat{B^a})_*$ が $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)/\varpi^n \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B/\varpi^n)$ の limit を取ることで得られる。これが同型射になることを示す。ここで $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B/\varpi^n)$ の核を計算する。 B が \mathcal{K}° 上 flat であるから、 \mathcal{A}° 加群の完全列

$$0 \longrightarrow \varpi^n B = \varpi^n \mathcal{K}^\circ \otimes_{\mathcal{K}^\circ} B \longrightarrow B \longrightarrow B/\varpi^n \quad (2.52)$$

に左完全関手 $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, -)$ を作用させると、完全列

$$0 \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \varpi^n B) = \varpi^n \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B/\varpi^n) \quad (2.53)$$

が得られるので $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)/\varpi^n \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B/\varpi^n)$ は単射。ゆえにその limit u も単射。limit と $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, -)$ の可換性から、可換図式

$$\begin{array}{ccc} (B^a)_* = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) & \longrightarrow & \widehat{B^a}_* = \varprojlim_n \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)/\varpi^n \\ \downarrow \cong & & \downarrow u \\ (\widehat{B^a})_* = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \varprojlim_n B/\varpi^n) & \xrightarrow{\cong} & \varprojlim_n \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B/\varpi^n) \end{array}$$

より u は全射にもなるのでとくに \mathcal{A}° 代数の同型を与える。 B が ϖ 進完備であれば、同型 $\widehat{(B^a)_*} \cong (\widehat{B^a})_* = (B^a)_*$ より、 $(B^a)_*$ も ϖ 進完備なので、この性質も保たれることがわかった。

(3) を保つこと。 $f \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)[1/\varpi]$ が $\varpi f \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)$ もしくは $f^p \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)$ となったとする。このとき任意の $\eta \in \tilde{\mathfrak{m}}$ に対して $\varpi f(\eta) \in B$ もしくは $f^p(\eta) \in B$ なので、 B の仮定から $f(\eta) \in B$ なので $f \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)$ より良い。

(4) を保つこと。 $B = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, B)$ であるとする。

$$\text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, (B^a)_*) = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)) \quad (2.54)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ} \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathcal{A}^\circ, \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B)) \quad (2.55)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}((\mathcal{K}^{\circ\circ} \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathcal{A}^\circ) \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \tilde{\mathfrak{m}}, B) \quad (2.56)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ} \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \tilde{\mathfrak{m}}, B) = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, B) \quad (2.57)$$

が成り立つ。ここで二つ目の等号は $\mathcal{K}^{\circ\circ} \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ への base change によるもの。三つ目の等号はテンソル積と $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, -)$ の随伴性から。

五つ目の等号は系 2.3.2(1) から \mathcal{A}° は \mathcal{K}° 上 flat であり、とくに $\mathfrak{m} \subset \mathcal{A}^\circ$ もそうなので \mathcal{K}° 上 flat になる。ここで $\mathcal{K}^{\circ\circ} = \bigcup_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ = \varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ$ であることと、flat 性から

$$\mathcal{K}^{\circ\circ} \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathfrak{m} = \left(\varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathcal{K}^\circ \right) \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathfrak{m} \cong \varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} (\varpi_s \mathcal{K}^\circ \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathfrak{m}) \cong \varinjlim_{s \in \Gamma_{>0}} \varpi_s \mathfrak{m} = \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{m} = \mathfrak{m} \quad (2.58)$$

という同型が得られることから従う。 \square

2.3.5 Remarque

- (1) 一方で、 $(-)^a$ の左随伴 $(-)_!!$ は系 2.3.2(2)~(4) を保たない。しかし、 $(-)^a$ の左随伴 $(-)_\Pi$ であって、 $(\mathcal{A}^\circ)^a\text{-Alg}$ から \mathcal{A}° 代数 B で系 2.3.2(1)~(4) を満たすものからなる $\mathcal{A}^\circ\text{-ALg}$ の充満部分圏への関手になっているものを定義することが出来る。これは次の操作によって得られる。
- (a) $B_{!!}$ を ϖ^∞ -torsion で割る (これで (1) を満たす)。
 - (b) ϖ 進完備化を取る (これで (2) を満たす)。
 - (c) $1/\varpi$ による局所化の中での completely integral closure に置き換える (これで (3) を満たす)。
 - (d) $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ を cadre としたときの almost element をとる (これで (4) を満たす)。
- とくにこれらの操作は互いの性質を保つことを示す (命題 2.3.1(2.27) より互いに性質を消すことはなく、最後の二つは ϖ による局所化における冪有界元全体の集合への変換になる)。
- (2) 同様に、 \mathcal{A}° 代数で (1)~(4) を満たすものからなる圏の余積は \otimes ではない ((2)、(3) と (4) を保たない)。しかし、 $(B \otimes_A C)[1/\varpi]$ における $(B \otimes_A C)/(\varpi^\infty\text{-torsion})$ の completely integral closure の完備化 $B \widehat{\otimes}_A^u C$ で与ええられる bifunctor によって与えられる。

証明. \mathcal{A}° 代数 B について (b)(c)(d) いずれの操作によっても ϖ -torsion free であることは保たれているから (a) を適用してから (b)(c)(d) をしてよい。

(c)(d) が (b) の操作によって得られた ϖ 進完備性を保つことを示す。(c) については $B[1/\varpi]$ における B の completely integral closure を取ることは命題 2.3.1(4) から $B_{B[1/\varpi]}^* = B[1/\varpi]^\circ$ を取ることであるため ϖ 進完備性を保つ。(d) については補題 2.3.4 を $\mathcal{A} = \mathcal{K}$ と $\mathfrak{m} = \mathcal{K}^{\circ\circ}$ として適用すれば ϖ 進完備性を保つ。

(d) が (c) によって得られた completely integral closed 性を保つことは命題 2.3.1(4) から $B \subset B_* \subset (B_*)_{B[1/\varpi]}^* = B_{B[1/\varpi]}^* = B \subset B_*$ であることからわかる。□

2.3.6

位相の文脈に関する疑問に対して almost mathematics を拡張する。位相加群と連続準同型からなる圏はアーベル圏になっていない。しかしながら、一様 Banach 代数に対して、今までの結果から類似物を構成することが出来る。一様 Banach 代数 \mathcal{A} を一つ固定し、一様 Banach \mathcal{A}° 代数の圏 $(\mathcal{A}^\circ\text{-uBan})$ を、対象が (通常の) 一様 Banach \mathcal{A} 代数 \mathcal{B}° であって、射 $\mathcal{B}^\circ \rightarrow \mathcal{C}^\circ$ を $((\mathcal{A}^\circ)^a$ 代数としての射) $(\mathcal{B}^\circ)^a \rightarrow (\mathcal{C}^\circ)^a$ によって与える (cadre として補題 2.3.4 の $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ を取っている)。もし cadre が $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ で取れたとすると、この圏は通常の一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏と一致する。

対象に関して恒等的な関手 $(-)^{\hat{a}}: \mathcal{A}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{A}^\circ\text{-uBan}$ が得られる。^{*43}補題 2.3.4 から、 $(-)^{\hat{a}}$ は右随伴 $(-)_*$ を持つ。これは \mathcal{B}° に対して

$$(\mathcal{B}^\circ)_*^{\hat{a}} := ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*[1/\varpi] \quad (2.59)$$

によって与えられる (系 2.3.2 と補題 2.3.4 から確かに $\mathcal{A}^\circ\text{-uBan}$ へ移る)。実際、とくに単位射は

$$\mathcal{B} \longrightarrow (\mathcal{B}^\circ)_*^{\hat{a}} = ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*[1/\varpi] = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] = \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{B}) \quad (2.60)$$

$$\beta = b/\varpi^n \longmapsto (x \mapsto bx)/\varpi^n \quad (2.61)$$

^{*43} 射に関しては $\mathcal{A}\text{-uBan}$ の射の連続性から $\mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ を制限して $\mathcal{B}^\circ \rightarrow \mathcal{C}^\circ$ が得られるのでこれを $(-)^a$ で移せば良い。

によって与えられる。ここで最後の $\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}$ には標準的な準同型 $\tilde{\mathfrak{m}} \rightarrow \tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}$ によって $\tilde{\mathfrak{m}}$ の ϖ 進位相から誘導される位相を入れる。すなわち $0 \in \tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}$ の基本近傍系として任意の正整数 n によって与えられる \mathcal{A}° 部分加群 $\varpi^n(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} 1)$ を持つ。また環としての積構造は \mathcal{A} 上の位相加群として見たときの連続準同型全体の集合に section 1.4 で定義した積と同様にして演算を入れている。

最後の等号 $\text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] = \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{B})$ を示す。まず $f \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi]$ として

$$\varphi: \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{B}) \quad (2.62)$$

$$f/\varpi^k \longmapsto \varphi(f/\varpi^k) := (m \otimes a/\varpi^n \mapsto f(m)/\varpi^k \cdot a/\varpi^n) \quad (2.63)$$

という写像が構成できる。 $\varphi(f/\varpi^k)$ が連続であることを示すためには \mathcal{B} の基本近傍系 $\varpi^n \mathcal{B}^\circ$ の $\varphi(f/\varpi^k)$ による逆像が開集合になればいい。実際、 $\varpi^{n+k}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes 1)$ の元を $m \in \tilde{\mathfrak{m}}$ によって $\varpi^{n+k}(m \otimes 1)$ と表すと $f \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)$ に注意すれば

$$\varphi(f/\varpi^k)(\varpi^{n+k}(m \otimes 1)) = \varphi(f/\varpi^k)((\varpi^{n+k}m) \otimes 1) = f(\varpi^{n+k}m)/\varpi^k \cdot 1 = \varpi^n f(m) \in \varpi^n \mathcal{B}^\circ \quad (2.64)$$

となる。ゆえに $\varpi^{n+k}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes 1) \subset (\varphi(f/\varpi^k))^{-1}(\varpi^n \mathcal{B}^\circ)$ であるから、 $\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}$ の位相の入れ方から $\varphi(f/\varpi^k)$ は連続になる。よって $\varphi: \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{B})$ が定まる。

φ の逆写像として次が構成できる。ここで $\iota: \tilde{\mathfrak{m}} \rightarrow \tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}$ を上記の位相を定めるときに扱った標準的な準同型とする。このとき

$$\psi: \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{B}) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \quad (2.65)$$

$$g \longmapsto g \circ \iota = (\varpi^k \cdot g \circ \iota)/\varpi^k \quad (2.66)$$

と定義する。ここで 0 以上の整数 k は g に依存しているものであって、次のように定義し、それゆえ確かに ψ は定義できる。 g が連続であることから \mathcal{B} の開集合 \mathcal{B}° の逆像 $g^{-1}(\mathcal{B}^\circ)$ について、ある 0 以上の整数 k で $\varpi^k(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes 1) = \varpi^k \cdot \iota(\tilde{\mathfrak{m}}) \subset g^{-1}(\mathcal{B}^\circ)$ となる。よって $\varpi^k \cdot g \circ \iota(\tilde{\mathfrak{m}}) \subset \mathcal{B}^\circ$ であるから $\varpi^k \cdot g \circ \iota \in \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ)$ となる。これらが互いに逆になっていることは計算するとわかる。

随伴になっていることを示す。 $\mathcal{B} \in \mathcal{A}\text{-uBan}$ と $\mathcal{C} = \mathcal{C}^{\hat{\mathcal{A}}} \in \mathcal{A}^{\hat{\mathcal{A}}}\text{-uBan}$ に対して、

$$\text{Hom}_{\mathcal{A}\text{-uBan}}(\mathcal{B}, (\mathcal{C}^{\hat{\mathcal{A}}})_*) = \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\mathcal{B}, (\mathcal{C}^{\hat{\mathcal{A}}})_*[1/\varpi]) = \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\mathcal{B}, \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}^{\text{cont}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}, \mathcal{C})) \quad (2.67)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} (\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{A}), \mathcal{C}) = \text{Hom}_{\mathcal{A}}^{\text{cont}}(\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{C}) \quad (2.68)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\mathcal{B}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{C}^\circ) = \text{Hom}_{(\mathcal{A}^\circ)^a}((\mathcal{B}^\circ)^a, (\mathcal{C}^\circ)^a) \quad (2.69)$$

$$= \text{Hom}_{\mathcal{A}^{\hat{\mathcal{A}}}}(\mathcal{B}^{\hat{\mathcal{A}}}, \mathcal{C}^{\hat{\mathcal{A}}}) \quad (2.70)$$

よりわかる (五つ目の等式は位相の入れ方から従う)。もし \mathfrak{m} が \mathcal{B} に忠実に作用するならばこの単位射は単射になる。

また、 $((\mathcal{B}^{\hat{\mathcal{A}}})_*)^\circ = \text{Hom}_{\mathcal{A}^\circ}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}^\circ) = ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ を満たす。これは $(\mathcal{B}^{\hat{\mathcal{A}}})_* = ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*[1/\varpi] \in \mathcal{A}\text{-uBan}$ のノルムは $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ から誘導されたノルムであって、これは系 2.3.2 の後に記載されている通りスペクトラルノルムである。すると (b) から

$$((\mathcal{B}^{\hat{\mathcal{A}}})_*)^\circ = ((\mathcal{B}^{\hat{\mathcal{A}}})_*)_{\leq 1} = (((\mathcal{B}^\circ)^a)_*)_* = ((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \quad (2.71)$$

となる。ここでこの二つの $(-)_*$ は三項目で先に作用しているものと最後の項のものは cadre $(\mathcal{A}^\circ, \mathfrak{m})$ に関する almost element であって、三項目で後に作用しているものは cadre $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ に関する almost element である。最後の等号は補題 2.3.4 の後に記載されているような almost 性の同値性からわかる。

一方、 $(-)^{\widehat{a}}$ は $\mathcal{B} \in \mathcal{A}^{\widehat{a}}\text{-uBan}$ に対して section 2.3.5 で定義した $(-)_{\widehat{\Pi}}$ を用いて新しく定義できる関手 $\mathcal{A}^{\widehat{a}}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{A}\text{-uBan}$

$$\mathcal{B}_{\widehat{\Pi}} := ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}[1/\varpi] \quad (2.72)$$

を左随伴を持つ (系 2.3.2)。定義の通りこれも同じ記号 $(-)_{\widehat{\Pi}}$ で表すこととする。 $(-)_{\widehat{\ast}}$ の場合と同じように $((\mathcal{B}^a)_{\widehat{\Pi}})^{\circ} = ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ となる。

射については、 $\mathcal{A}^{\widehat{a}}\text{-uBan}$ の射 $f: \mathcal{B}^{\widehat{a}} \rightarrow \mathcal{C}^{\widehat{a}}$ 、つまり $f: (\mathcal{B}^{\circ})^a \rightarrow (\mathcal{C}^{\circ})^a$ に対して $f_{\widehat{\Pi}}: (\mathcal{B}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} \rightarrow (\mathcal{C}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}$ は section 2.3.5 によって定義される $f_{\widehat{\Pi}}: ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} \rightarrow ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ を $1/\varpi$ によって局所化した $f_{\widehat{\Pi}}[1/\varpi]: (\mathcal{B}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} = ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}[1/\varpi] \rightarrow (\mathcal{C}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} = ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}[1/\varpi]$ によって与えられる。

後に与える例 (section 2.5.4) から、almost element の包含写像

$$(\mathcal{B}^{\widehat{a}})_{\widehat{\ast}} \subset (\mathcal{B}^a)_{\ast} = \text{Hom}_{\mathcal{A}^{\circ}}(\tilde{\mathfrak{m}}, \mathcal{B}) = \text{Hom}_{\mathcal{A}}(\tilde{\mathfrak{m}} \otimes_{\mathcal{A}^{\circ}} \mathcal{A}, \mathcal{B}) \quad (2.73)$$

は一般に等号にはならない。しかしながら次の結果がある。

補題 2.3.5. $\varphi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ を一様 Banach \mathcal{A} 代数の射とする。 $\varphi^{\circ}: \mathcal{B}^{\circ} \rightarrow \mathcal{C}^{\circ}$ をその制限した射とする。このとき $(\mathcal{A}^{\circ}, \mathfrak{m})$ を cadre として取ったとき、 φ が almost isomorphism であることと φ° が almost isomorphism であること (すなわち $\varphi^{\widehat{a}} = (\varphi^{\circ})^a$ が $\mathcal{A}^{\widehat{a}}\text{-uBan}$ で同型射になること) は同値。

証明. φ° が almost isomorphism のとき、 $\mathfrak{m} \text{Ker}(\varphi^{\circ}) = 0$ かつ $\mathfrak{m} \text{Coker}(\varphi^{\circ}) = 0$ となる。ここで $\mathcal{B} = \mathcal{B}^{\circ}[1/\varpi]$ と $\mathcal{C} = \mathcal{C}^{\circ}[1/\varpi]$ より $\varphi = \varphi^{\circ}[1/\varpi]$ となっていることに注意すると、計算によって φ も almost isomorphism であることがわかる。また、 φ が almost injective のとき、 $\text{Ker}(\varphi^{\circ}) \subset \text{Ker}(\varphi)$ から、 $\mathfrak{m} \text{Ker}(\varphi^{\circ}) \subset \mathfrak{m} \text{Ker}(\varphi) = 0$ より φ° も almost injective になる。

φ が almost isomorphism のとき φ° が almost surjective になることを示す。まず φ° から得られる $(\varphi^{\circ})^a: (\mathcal{B}^{\circ})^a \rightarrow (\mathcal{C}^{\circ})^a$ は $\mathcal{A}^{\widehat{a}}\text{-uBan}$ の射 $\mathcal{B}^{\widehat{a}} \rightarrow \mathcal{C}^{\widehat{a}}$ である。すると section 2.3.6 から $(\varphi^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}: (\mathcal{B}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} \rightarrow (\mathcal{C}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}$ が得られ、 $(\varphi^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} = ((\varphi^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}[1/\varpi]$ となっている。 φ は almost isomorphism より φ° も almost isomorphism だから $(\varphi^{\circ})^a$ は同型射だから、 $(\varphi^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}$ も同型射になる。この $(\varphi^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}: (\mathcal{B}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}} \rightarrow (\mathcal{C}^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}$ は $\mathcal{A}\text{-uBan}$ の射であるから、 $(-)_{\widehat{\Pi}}$ によって系 2.3.2 で移した先の $\mathcal{A}^{\circ}\text{-Alg}$ の圏においても同型射になる。ここで前述した通り $((\mathcal{B}^a)_{\widehat{\Pi}})^{\circ} = ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ と $((\mathcal{C}^a)_{\widehat{\Pi}})^{\circ} = ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ が成り立っているから、この同型射 $((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} \rightarrow ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ は、 $(\varphi^{\widehat{a}})_{\widehat{\Pi}}$ を制限した $((\varphi^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}}$ によって与えられる。

よって次の可換図式

$$\begin{array}{ccccc} ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & \longrightarrow & ((\mathcal{B}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & \longrightarrow & \mathcal{B}^{\circ} \\ \downarrow ((\varphi^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & & \downarrow ((\varphi^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & & \downarrow \varphi^{\circ} \\ ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & \longrightarrow & ((\mathcal{C}^{\circ})^a)_{\widehat{\Pi}} & \longrightarrow & \mathcal{C}^{\circ} \end{array}$$

について、真ん中の垂直方向の射は同型射で、下の水平方向の射の合成は almost isomorphism になる ([GR Rem.2.2.28])。よって一番右の φ° も almost surjective になるので示された。 \square

2.4 Extensions entieres d'algebres normees uniformes

2.4.1

\mathcal{A} を一様ノルム K 代数とし、 \mathcal{B} を \mathcal{A} の拡大であって、そのノルムは \mathcal{A} のノルムの延長として持っているとする。まず $\mathcal{A} \cap \mathcal{B}^\circ = \mathcal{A}^\circ$ が成り立つ。

補題 2.4.1. (1) \mathcal{B} における \mathcal{A}° の completely integral closure は \mathcal{B}° に含まれる。とくに \mathcal{A}° は \mathcal{A} において completely integrally closed である。

有限群 G が \mathcal{B} に作用していて、 $\mathcal{B}^G = \mathcal{A}$ となっているとする。

- (2) G の作用がノルムを保つとする (例えばとくに \mathcal{B} がスペクトラルかつ完備なときにこれを満たす^{*44})。このとき $(\mathcal{B}^\circ)^G = \mathcal{A}^\circ$ であり、 \mathcal{B} は \mathcal{A} 上 integral、 \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral、 \mathcal{B} の中での \mathcal{A}° の integral closure は \mathcal{B}° に一致する。
- (3) \mathcal{B} が一様 Banach \mathcal{A} 代数であるとする。このとき \mathcal{B} の $|\cdot|_{sp}$ は \mathcal{B} 上の唯一つの G -不変なスペクトラルなノルムであって \mathcal{A} 上のスペクトラル半ノルムを拡張しているものである。
- (4) さらに \mathcal{B} がスペクトラルであるとする。 g を \mathcal{A} の元とする。もし \mathcal{A} 上で g を掛ける写像が単射/isometric であるならば、 \mathcal{B} 上で g を掛ける写像も単射/isometric になる。

証明. (1) $b \in \mathcal{B}$ について \mathcal{B} の中の有限生成 \mathcal{A}° 加群であって b の任意の冪乗を含むとする。 \mathcal{A} は一様だから \mathcal{A}° は有界であり、包含写像 $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{B}$ は isometric だから、その有限生成 \mathcal{A}° 加群は有界。よって $b \in \mathcal{B}^\circ$ となる。

(2) G がノルムを保つことから、 G の作用は \mathcal{B}° を保つ。すると仮定から $(\mathcal{B}^\circ)^G = \mathcal{A} \cap \mathcal{B}^\circ = \mathcal{A}^\circ$ となる。さらに有限群の作用のある任意の環はその不変部分環上 integral になっている ([AM] ex.5.12)。とくに $\mathcal{B}^G = \mathcal{A}$ から \mathcal{B} は \mathcal{A} 上 integral になる。 $(\mathcal{B}^\circ)^G = \mathcal{A}^\circ$ から \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral になる。また、(1) から \mathcal{B} における \mathcal{A}° の integral closure は \mathcal{B}° に含まれていて、今示したことから \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral なので

$$\mathcal{A}^\circ \subset (\mathcal{A}^\circ)_B^+ \subset \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B} \quad (2.74)$$

であるから、integral closure である $(\mathcal{A}^\circ)_B^+$ は \mathcal{B}° に一致する。

ここで、 \mathcal{B} のノルム $|\cdot|$ がスペクトラルかつ完備であるとき、section 2.2.4 からそのようなノルムの唯一性より $|\cdot|$ は G の作用で不変である。

(3) \mathcal{B} が一様なので section 2.2.2 から $|\cdot|_{sp}$ は \mathcal{B} 上スペクトラルなノルムであり \mathcal{A} 上のスペクトラル半ノルムを拡張したものになる。さらに \mathcal{B} が一様 Banach \mathcal{A} 代数であるからそのスペクトラル半ノルムに関して完備であるため、(2) の通り G の作用で \mathcal{B} のスペクトラル半ノルムは不変である。

$|\cdot|'$ を \mathcal{B} 上のスペクトラルなノルムであって、 G の作用で不変であって \mathcal{A} のスペクトラル半ノルムを拡張

^{*44} 一様 Banach 代数ならノルムをスペクトラル半ノルムに取り替えればこの仮定を満たすため、今考えたい対象に関してはほぼ全てにおいて成り立つ。

したものであるとする。\$|-|' = |-|_{sp}\$ を示す。\$b \in \mathcal{B}\$ について、\$\mathcal{B}^G = \mathcal{A}\$ より、多項式

$$\prod_{\gamma \in G} (T - \gamma(b)) = T^d + \sum_{i=1}^d a_i T^{d-i} \in \mathcal{A}[T] \quad (2.75)$$

が取れる。\$|-|'\$ の \$\mathcal{A}\$ への制限は \$\mathcal{A}\$ のスペクトラル半ノルム \$|-|_{sp}\$ であるから、[BGR] 3.1.2. Prop.1 と合わせて

$$\max_{\gamma \in G} |\gamma(b)|' = \max_{1 \leq i \leq d} (|a_i|')^{1/i} = \max_{1 \leq i \leq d} |a_i|_{sp}^{1/i} \quad (2.76)$$

となる。\$\mathcal{B}\$ のスペクトラル半ノルム \$|-|_{sp}\$ は上述したとおり \$|-|'\$ の仮定を満たしているので (2.76) を満たすから

$$\max_{\gamma \in G} |\gamma(b)|' = \max_{1 \leq i \leq d} |a_i|_{sp}^{1/i} = \max_{\gamma \in G} |\gamma(b)|_{sp} \quad (2.77)$$

となり、\$G\$ の作用による不変性から \$|-|' = |-|_{sp}\$ となる。

(4) 同様の計算によってわかる。そもそも \$b \in \mathcal{B}\$ と \$a_i \in \mathcal{A}\$ を上の (3) のように取ると、任意の \$a \in \mathcal{A}\$ について、

$$\prod_{\gamma \in G} (T - \gamma(ab)) = T^d + \sum_{i=1}^d (a^i a_i) T^{d-i} \quad (2.78)$$

となる。すると (3) と \$\mathcal{B}\$ がスペクトラルであることから \$|ab| = |ab|_{sp} = \max_{1 \leq i \leq d} |a^i a_i|^{1/i}\$ となる。

これを用いて示す。\$\mathcal{A}\$ 上で \$g\$ を掛ける写像が単射であるとする。\$g \in \mathcal{A}\$ であり、もし \$b \in \mathcal{B}\$ が \$gb = 0\$ となったとすると、\$0 = |gb| = \max_{1 \leq i \leq d} |g^i a_i|^{1/i}\$ ゆえ、任意の \$1 \leq i \leq d\$ で \$|g^i a_i| = 0\$ から \$g^i a_i = 0 \in \mathcal{A}\$ となる。仮定から \$a_i = 0\$ である。よって、(2.75) から \$T^d = \prod_{\gamma \in G} (T - \gamma(b))\$ より、\$b\$ を代入して \$b^d = 0 \in \mathcal{B}\$ となるが、\$\mathcal{B}\$ はとくに一樣なので section 2.2.2 から被約なので \$b = 0\$ となる。よって \$\mathcal{B}\$ 上でも \$b\$ を掛ける写像は単射になる。

\$\mathcal{A}\$ 上で \$g\$ を掛ける写像が isometric になったとすると、上で示したことから

$$|gb| = \max_{1 \leq i \leq d} |g^i a_i|^{1/i} = \max_{1 \leq i \leq d} |a_i|^{1/i} = |b| \quad (2.79)$$

より isometric になる。□

(2) の \$G\$ の作用によるノルムの不変性が無いと、\$\mathcal{B}^\circ\$ は \$\mathcal{A}^\circ\$ 上 integral にならないように取れることがある。また、(2) の仮定のもとであっても必ずしも \$\mathcal{B}\$ が \$\mathcal{A}\$ 上有限ではなく、もし有限であったとしても、\$\mathcal{B}^\circ\$ が \$\mathcal{A}^\circ\$ 上有限ではない可能性がある。その例は次のとおりである。

2.4.2 Exemples prophylactiques

- (1) \$V\$ を完備離散付値環で標数が 2 でないものとし、その一意化係数を \$\varpi\$ とする。\$A := V[[T]]\$ とし、\$A\$ の商体 \$Q(A)\$ の、ある有限次 Galois 拡大で Galois 群を \$G\$ とする体の中での \$A\$ の integral closure を \$B\$ とおく。このとき \$B\$ は \$A\$ 上有限になる。^{*45} \$\mathcal{A} := A[1/\varpi]\$ とし、\$\mathcal{B} := B[1/\varpi]\$ とおき、ノルムを命題 2.3.1(2) で定義した \$^A|-|\$ と \$^B|-|\$ とする。

^{*45} [AM] Prop.5.17 と有限次 Galois 拡大は有限次分離的代数拡大なので、\$B\$ は \$A\$ 上の有限生成加群の部分加群になる。\$A\$ はその構成から Noether なので \$B\$ も \$A\$ 上有限生成加群になる。

\mathcal{A} は $\mathcal{K} := Q(V)$ 代数であり、 $|\varpi|^\Gamma = |\mathcal{K}|$ となる $\Gamma \subset \mathbb{R}$ は ϖ が V の一意化係数なので $\Gamma = \mathbb{Z}$ となる。よって命題 2.3.1(b) から $\mathcal{A}_{\leq 1} = A$ かつ $\mathcal{B}_{\leq 1} = B$ 成り立つ。 $A = V[[T]]$ は $V[T]$ の ϖ 進位相による完備化なので ϖ 進完備であるから、infinite ϖ -divisible を持たないので命題 2.3.1(a) から \mathcal{A} はノルム \mathcal{K} 代数であり、 $\mathcal{A}_{\leq 1} = A$ と、その ϖ 進完備性から命題 2.3.1(1) と合わせて ${}^A|\cdot|$ は A 上の ϖ 進位相と一致し、 \mathcal{A} は Banach \mathcal{K} 代数になる。さらに ${}^A|\cdot|$ が \mathcal{A} 上で乗法的ノルムになることもわかる。^{*46} ゆえに \mathcal{A} はとくにスペクトラルであることから命題 2.3.1(5) と合わせて $A = \mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}^\circ$ より \mathcal{A} は一様 Banach \mathcal{K} 代数となる。補題 2.4.1(2) のように \mathcal{A} は G が isometric に作用する。

さらに \mathcal{B} も一様 Banach \mathcal{K} 代数となる。

例えば $Q(A)$ の有限次 Galois 拡大を $B = A[U]/(U^2 - TU + \varpi)$ となるように取れる。このとき $\mathcal{B} = B[1/\varpi] = A[\sqrt{T^2 - 4\varpi}]$ となる。多項式 $U^2 - TU + \varpi$ は $Q(A)$ で既約になるが、 $\widehat{Q(A)}$ で分解し、同じく $\widehat{A[1/T]}$ で分解する。根は

$$u := \frac{\varpi}{T} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(1 \cdot 3 \cdot 5 \cdots (2n-1))2^n \varpi^{n+1}}{(n+1)!T^{2n+1}} \quad (2.80)$$

と $T - u$ を持つ。すると B は U と $T - U$ をそれぞれ 1 に移すような A から誘導される二つの乗法的ノルムを持つ。つまり前者は $T - U$ 進位相、後者は U 進位相を与える。代数 $\mathcal{B}' := B[1/\varpi]$ に後者のノルム (これは G -不変でもなく完備でもない) を入れると $U/\varpi = 1/(T - U) \in \mathcal{B}'$ を持つが、これはノルムが 1 だが A 上 integral ではない。 $(\mathcal{B}')^\circ$ の位相は ϖ 進位であるが、 B 上は ϖ 進位相ではなく U 進位相を持つ (より弱い)。

- (2) \mathcal{K} が完全体かつ標数 2 であるとする。 $\mathcal{A} := \mathcal{K}^\circ[[T^{1/2^\infty}]] \otimes_{\mathcal{K}^\circ} \mathcal{K}$ とし、 \mathcal{B} を quadratic extension である $A[U](U^2 - TU - 1)$ における 2-root closure とする。 \mathcal{A} 上 integral であることから、 $(\mathcal{A} + \mathcal{A}U)/T$ に含まれる。計算すると

$$U^{1/2} = T^{1/2}(U - 1), \dots, U^{1/2^i} = T^{-1/2-1/4 \cdots -1/2^i}(U - \alpha_i), \alpha_i \in \mathcal{A} \quad (2.81)$$

となり、 $\mathcal{B}/\mathcal{A} = \cup_{i \geq 1} T^{-1/2-1/4 \cdots -1/2^i} U \mathcal{A} = U/TT^{1/2^\infty} \mathcal{A}$ であり、これは \mathcal{A} 上有限にならない。 \mathcal{B} についても同じく有限にならない。一方で \mathcal{A} 線型な $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ のレトラクションに対して、 $U^{1/2^i}$ の像は $1 + a_i \in \mathcal{A}$ で $a_i = T^{1/2^i}(1 + a_{i+1})$ を満たすものに移される。ここで $a_0 = T^{1/2}(1 + a_1) = T^{1/2} + \cdots + T^{1/2^{i-1}}(1 + a_i)$ を $i \rightarrow \infty$ とすると、?これは \mathcal{A} では収束しない。よってそのようなレトラクションは存在しない。とくにこれは finite étale にならない例になっている。

- (3) 同様に、 \mathcal{B} が \mathcal{A} 上有限であって、 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が split するとすると、 \mathcal{B}° は必ずしも \mathcal{A}° 上有限ではない。さらに \mathcal{A}° 線型な $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ は必ずしも split しない。 \mathcal{A} を前述の \mathcal{K} として取る (標数 2 の完体)。 \mathcal{B} を $\varpi \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ を取って、quadratic extension である $\mathcal{K}[U]/(U^2 - \varpi U - 1)$ とする。すると \mathcal{B}° は \mathcal{B} において \mathcal{K}° の integral closure になり、 $\mathcal{K}^\circ[U]$ の 2-root closure とる。しかし \mathcal{K}° 加群 $\mathcal{B}^\circ/\mathcal{K}^\circ = \varpi^{1/2^\infty} \mathcal{K}^\circ U/\varpi$ は有限ではなく、 \mathcal{K}° 線型なレトラクション $\mathcal{K}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ は存在しない。これは $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が finite projective であっても $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ が finite projective にならない例になっている。同じような例は他にもある ([BGR] 6.4.1)。

^{*46} 任意の $\alpha, \beta \in \mathcal{A}$ はある整数 n, m と $a, b \in A \setminus \varpi A$ によって $\alpha = a\varpi^n$ と $\beta = b\varpi^m$ と書ける。 $\Gamma = \mathbb{Z}$ に注意すると、 $\varpi_{-N}\alpha\beta \in A$ なら、 $ab\varpi^{-N+n+m} \in A$ より、 $ab \in \varpi^{N-n-m}A$ となる。 $\varpi A = \varpi V[[T]]$ が $A/\varpi A = V/\varpi V[T]$ で A の素イデアルなることに注意すると、 $ab \notin \varpi A$ であるから $N - n - m \leq 0$ ゆえ、 $N \leq n + m$ となるので、定義から ${}^A|ab| = {}^A|a|{}^A|b|$ になるので、乗法的ノルムになる。

2.4.3

補題 2.4.2. \mathcal{A} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とする。ノルムを忘れることで、忠実充満関手

$$\{\text{finite étale 一様 Banach } \mathcal{A} \text{ 代数}\} \longrightarrow \{\text{finite étale } \mathcal{A} \text{ 代数}\} \quad (2.82)$$

が得られる。

証明. 忠実性は明らか。充満性について finite étale \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} の商 \mathcal{B}' は直和因子であること ($\text{Spec}(\mathcal{B}')$ は $\text{Spec}(\mathcal{B})$) において開かつ閉である) を考えると、完備スペクトラルノルムの一意性から、同型射であって isometric の場合に帰着できる。

もしくは [He] Lem.1.17 より、finite étale \mathcal{A} 代数の射は連続になっていることから分かる。 \square

2.4.4 Remarque

上記は圏同値になる ([KL] prop. 2.8.16 (b))。 \mathcal{B} は加群として finite projective な \mathcal{A} 代数であり、これは標準的な完備ノルムの同値類を持つ。技巧的な点はこれらが一様であることを示す点である。ただしこの事実はこの後使わない。

2.5 Monomorphismes (et recadrage)

2.5.1

\mathcal{K} -uBan の mono 射は \mathcal{K} 代数の射であって連続かつ単射なものである。実際、単射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は明らかに mono 射になる。逆を考えると、 \mathcal{A} は零でないとしてよく、そのとき $\mathcal{K} \oplus \text{Ker } \varphi \subset \mathcal{A}$ は \mathcal{A} の Banach 部分代数になる。すると、 $\mathcal{K} \oplus \text{Ker } \varphi \rightarrow \mathcal{A}$ となる射を $\text{Ker } \varphi$ をそのまま \mathcal{A} に移すものと、 $0 \in \mathcal{A}$ に移すものが取れる。この二つの射について mono 射の性質を用いれば良い。

このことは系 2.3.2 ので与えられる \mathcal{K} -uBan と圏同値な \mathcal{K}° 代数の圏の部分圏 (これを簡単のため \mathcal{C} とおいておく) が自由対象 (free object) を持つこと、すなわち、 $S \mapsto \mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}$ が忘却関手 $\mathcal{C} \rightarrow (\text{Sets})$ の左随伴になることから次のように従う。まず $\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S}$ は $\mathcal{K}[T_s]_{s \in S}$ に (2.5) と同様にして定義した Gauss ノルムによる完備化である。すなわち多重添字を用いて

$$\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S} = \left\{ \sum_{\nu \in \oplus_{s \in S} \mathbb{Z}_{\geq 0}} a_\nu T^\nu \in \mathcal{K}[[T_s]]_{s \in S} \mid a_\nu \in \mathcal{K}, \lim_{|\nu| \rightarrow \infty} a_\nu = 0 \right\} \quad (2.83)$$

となり、 $(\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S})^\circ = \mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}$ である。まず系 2.3.2 の圏同値から一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} に対して $\text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{A}) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ\text{-Alg}}(\mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{A}^\circ)$ という同型がある。すると次の写像

$$\text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ\text{-Alg}}(\mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{A}^\circ) \longrightarrow \text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{A}^\circ) \quad (2.84)$$

$$\varphi \longmapsto (s \mapsto \varphi(T_s)) \quad (2.85)$$

$$\text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{A}^\circ) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ\text{-Alg}}(\mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{A}^\circ) \quad (2.86)$$

$$\psi \longmapsto (T_s \mapsto \psi(s)) \quad (2.87)$$

が定義できてこれらは互いに逆写像になる。ゆえに \mathcal{C} は $S \mapsto \mathcal{K}^\circ \langle T_s \rangle_{s \in S}$ を忘却関手の左随伴に持つ。

すると \mathcal{K} -uBan の mono 射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ に対して随伴性から $\text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{A}^\circ) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{A}) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{K} \langle T_s \rangle_{s \in S}, \mathcal{B}) \cong \text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{B}^\circ)$ は単射になる。まずは $\varphi^\circ: \mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ が単射になることを示す。 $a, b \in \mathcal{A}^\circ$ で $\varphi(a) = \varphi(b)$ となったとする。一点集合 $S = \{*\}$ からそれぞれ $a, b \in \mathcal{A}^\circ$ に移す二つの写像 $S \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ が取れる。このときこの二つの写像は $\text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{B}^\circ)$ へ移すと等しくなるため、 $\text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{A}^\circ) \rightarrow \text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{B}^\circ)$ の単射性から二つの $S \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ は等しいので $a = b$ となる。よって $\varphi^\circ: \mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ が単射になり、 $\mathcal{A} = \mathcal{A}^\circ[1/\varpi]$ と $\mathcal{B} = \mathcal{B}^\circ[1/\varpi]$ であるので局所化の完全性から $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は単射になるから \mathcal{K} -uBan の mono 射は単射である。^{*47}

2.5.2

$|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密であるとする。section 2.3.6 で考えた形の recadrage によって一様 Banach 代数の mono 射を生じさせることが出来る (2.61)。このことについて詳しく考えるために、基本的な場合として、cadre として取った $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ から、cadre

$$(B := \mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle := \widehat{\mathcal{K}^\circ [T^{1/p^\infty}]}, \mathfrak{m} := T^{1/p^\infty} B^{\circ\circ} = (T)^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} B) \quad (2.88)$$

への変換を考える。ここで $(\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle)^\circ = \mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ であり、 \mathfrak{m} は flat であり $\mathfrak{m} = \tilde{\mathfrak{m}}$ となる。また、 $\mathcal{K}^{\circ\circ} = \bigcup_{m \geq 0} \varpi^{1/p^m} \mathcal{K}^\circ$ であることに注意すると

$$T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle = \bigcup_{m \geq 0} T^{1/p^m} \varpi^{1/p^m} B = \bigcup_{m \geq 0} (\varpi T)^{1/p^m} B \quad (2.89)$$

となっている。

もし \mathcal{B} が一様 Banach \mathcal{K} 代数であれば、射 $(\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle)^\circ \rightarrow \mathcal{B}$ を与えることはある $g \in \mathcal{B}^\circ$ であって整合的な p 冪乗根の列 (g^{1/p^m}) を持つものを与えることに等しい (g^{1/p^m} が T^{1/p^m} の像になる)。

補題 2.5.1. \mathcal{B} を一様 Banach $\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数として、 $T \in \mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ の像を $g \in \mathcal{B}$ とする (とくに $g \in \mathcal{B}^\circ$ となるが、 g は \mathcal{B} で非零因子とは限らない)。

- (1) 標準的な射 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \rightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g]$ が取れて、これは単射であり、像は ϖ 進完備かつ、

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ := \bigcap_{m \geq 1} g^{-1/p^m} \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g] \quad (2.90)$$

と等しい。ここで $g^{1/p^n} \mathcal{B}^\circ = \{x \in \mathcal{B}^\circ[1/g] \mid g^{1/p^n} x \in \mathcal{B}^\circ\}$ である。

- (2) 射 $\mathcal{B}^\circ \rightarrow ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ が単射であることと、 g が \mathcal{B} で非零因子であることは同値。
(3) 射 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*/\varpi \rightarrow ((\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi)_*$ は単射 (ϖ は $\mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ の任意の元)。

(almost element を取る $(-)_*$ は cadre として (B, \mathfrak{m}) という (2.88) で定義したものを取っている)

証明. (1) \mathcal{B} が一様なので命題 2.3.1 の (6) から $\mathcal{B}^\circ = \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ となっている。 $\text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \cong \text{Hom}_B(\mathcal{B}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ という全単射を示す (これらはそれぞれ加群の射からなる集合であることに注意する)。

^{*47} section 3.5.1 も同様に示すことが出来る。

まず $\text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ の元と $\text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ の元は ϖ 進位相に関して連続になっていることを示す。 $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ について $\varpi^n \mathcal{K}^{\circ\circ} \subset \varphi^{-1}(\varpi^n \mathcal{B}^\circ)$ であり、 $\psi \in \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ について $\varpi^n B^{\circ\circ} \subset \psi^{-1}(\varpi^n \mathcal{B}^\circ)$ から分かる。

次に全単射を与える写像を構成する。 $B^{\circ\circ} = \mathcal{K}^{\circ\circ} B = \mathcal{K}^{\circ\circ} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ であるから

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \longrightarrow \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \quad (2.91)$$

$$\varphi \longmapsto F(\varphi) := \left(\sum_{\nu \in \mathbb{Z}_{\geq 0}[1/p]} a_\nu T^\nu \mapsto \sum_{\nu \in \mathbb{Z}_{\geq 0}[1/p]} \varphi(a_\nu) g^\nu \right) \quad (2.92)$$

が定義できる。実際、まず $\sum a_\nu T^\nu \in B^{\circ\circ}$ から $\lim_{\nu \rightarrow \infty} |a_\nu| = 0 \in \mathcal{K}$ である。 \mathcal{B} の一様性からスペクトラルであると仮定してよいので $g \in \mathcal{B}^\circ$ より $|g| \leq 1$ となる。すると φ の連続性から、ある定数 $C > 0$ で $|\varphi(a_\nu)| \leq C|a_\nu|$ となる。ゆえに $\lim_{\nu \rightarrow \infty} |\varphi(a_\nu) g^\nu| \leq \lim_{\nu \rightarrow \infty} C|a_\nu| |g|^\nu = 0$ より確かに $\sum \varphi(a_\nu) g^\nu$ は \mathcal{B}° で存在するから $F: \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \rightarrow \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ が定義できる。

一方、逆向きの写像を

$$G: \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \quad (2.93)$$

$$\psi \longmapsto G(\psi) := \psi|_{\mathcal{K}^{\circ\circ}} \quad (2.94)$$

として定義でき、上で示した $\psi \in \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ の連続性と B 加群の射であることから $\sum a_\nu T^\nu \in B^{\circ\circ}$ に対して $\psi(\sum a_\nu T^\nu) = \sum \psi(a_\nu T^\nu) = \sum T^\nu \cdot \psi(a_\nu) = \sum \psi(a_\nu) g^\nu$ となるので $G: \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ は F の逆写像になる。したがって全単射

$$\mathcal{B}^\circ \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \cong \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \quad (2.95)$$

が得られた。

$\mathfrak{m} = T^{1/p^\infty} B^{\circ\circ} = \bigcup_{n \geq 1} T^{1/p^n} B^{\circ\circ} = \varinjlim_n T^{1/p^n} B^{\circ\circ}$ であり、 T が $B^{\circ\circ}$ で非零因子だから、垂直方向が同型射な可換図式

$$\begin{array}{ccccccc} B^{\circ\circ} & \xrightarrow{\cdot T^{1-1/p}} & B^{\circ\circ} & \xrightarrow{\cdot T^{1/p-1/p^2}} & B^{\circ\circ} & \longrightarrow & \dots \\ \downarrow \cdot T & & \downarrow \cdot T^{1/p} & & \downarrow \cdot T^{1/p^2} & & \\ TB^{\circ\circ} & \hookrightarrow & T^{1/p} B^{\circ\circ} & \hookrightarrow & T^{1/p^2} B^{\circ\circ} & \hookrightarrow & \dots \end{array}$$

を考えると、 T^{1/p^m} を掛ける写像で $\mathfrak{m} \cong \varinjlim_{T^{1/p^m-1/p^{m+1}}} B^{\circ\circ}$ となる。

ゆえに、(2.95) と $T^{1/p^m} \in B$ が $g^{1/p^m} \in \mathcal{B}$ に対応していて、 $\mathcal{B}^\circ \xrightarrow{\cong} \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ は $b \in \mathcal{B}^\circ$ を $B^{\circ\circ}$ の元に b を掛ける写像に移しているから、

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) & \xrightarrow{\cdot T^{1/p^m-1/p^{m+1}}} & \text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) \\ \cong \uparrow & & \cong \uparrow \\ \mathcal{B}^\circ & \xrightarrow{\cdot g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} & \mathcal{B}^\circ \end{array} \quad \begin{array}{ccc} \cdot b & \longrightarrow & \cdot T^{1/p^m-1/p^{m+1}} b \\ \uparrow & & \uparrow \\ b & \longrightarrow & \cdot g^{1/p^m-1/p^{m+1}} b \end{array}$$

より $\text{Hom}_B(B^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ)$ 上の $T^{1/p^m-1/p^{m+1}}$ を掛ける写像は \mathcal{B}° 上では $g^{1/p^m-1/p^{m+1}}$ を掛ける写像に一致する。

以上のことに注意すると (とくに四つ目の等号に注意して)

$$((\mathcal{B}^\circ)^a)_* = \text{Hom}_B(\mathfrak{m}, \mathcal{B}^\circ) = \text{Hom}_B \left(\varinjlim_{T^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ \right) \quad (2.96)$$

$$= \varprojlim_{T^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \text{Hom}_B(\mathcal{B}^{\circ\circ}, \mathcal{B}^\circ) = \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ \quad (2.97)$$

となる。

とくに \mathcal{B} が一様であることから \mathcal{B}° は被約であるので、(2.97) から $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ は被約になる。ゆえに $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ 上で $g \in \mathcal{B}^\circ$ を掛ける写像は単射になる。実際、 $b = (b_m) \in ((\mathcal{B}^\circ)^a)_* = \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ$ について、 $gb = g(b_m) = (gb_m) = 0$ とすると、 $0 = gb^{p^m} = (g^{1/p^m}b)^{p^m} \in ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ から被約性より $g^{1/p^m}b = 0$ となる。ゆえに任意の正整数 m で $g^{1/p^m}b_m = 0$ であるため、limit の定義から $b_m = g^{1/p^m-1/p^{m+1}}b_{m+1} = g^{(p-1)/p^{m+1}}b_{m+1} = 0$ より $b = 0$ となるから $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ 上で g を掛ける写像は単射になる。

したがって、 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ は任意の正整数 n に関して T^{1/p^n} -torsion free である。^{*48} ここで次の環準同型

$$((\mathcal{B}^\circ)^a)_* = \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ \longrightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g] \quad (2.98)$$

$$(b_m) \longmapsto b_0/g \quad (2.99)$$

が取れる。

もし $b_0/g = 0 \in \mathcal{B}^\circ[1/g]$ となったとすると、ある正整数 n で $g^n b_0 = 0 \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ となる。 $(b_m) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ$ から正整数 m について $0 = g^n b_m = g^n g^{1-1/p^m} b_m$ に g^{1/p^m} を掛けて $g^{n+1} b_m = 0 \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ となる。とくに $g^{n+1} b_0 = 0$ でもあるから $g^{n+1}(b_m) = 0 \in ((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ となるが、上で示したとおり $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ 上で g は非零因子だから $(b_m) = 0$ となるため (2.99) の $((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \rightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g]$ は単射になる。

この像が $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g]$ となることを示す。

まず $b = (b_m) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ$ であるから $g^{1-1/p^m} b_m = b_0 \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ より $g^{1/p^m} \cdot (b_0/g) = b_m \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g]$ なので $b_0/g \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。よって像は $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ に含まれる。

逆に $\beta \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g]$ に対して $g^{1/p^m} \beta \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g]$ を取る。このとき各 m に対して正整数 N_m を $g^{N_m+1/p^m} \beta \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ となるように取れる。さらに $g \in \mathcal{B}^\circ$ から $N_{m+1} \geq N_m$ として単調増加になるように取り直すことができる。ゆえに、

$$g^{1/p^m-1/p^{m+1}} \cdot g^{N_{m+1}+1/p^{m+1}} \beta = g^{N_{m+1}+1/p^m} \beta = g^{N_{m+1}-N_m} \cdot g^{N_m+1/p^m} \beta \in \mathcal{B}^\circ \quad (2.100)$$

である。もし g が非零因子であれば $N_m = 0$ と取れるから $b_m := g^{1/p^m} \beta \in \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ によって $(b_m) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1/p^{m+1}}} \mathcal{B}^\circ$ が得られて、 $b_0/g = (g\beta)/g = \beta$ より全射にもなるから $((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \rightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g]$ の像は $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ になる。

もしくは、次のような可換図式 (以降の証明でも g が非零因子であることを使わなければならない)

$$\begin{array}{ccccccc} \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1-1/p}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1/p-1/p^2}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & \cdots \\ \uparrow \cdot g & & \uparrow \cdot g^{1/p} & & \uparrow \cdot g^{1/p^2} & & \\ g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & g^{-1/p} \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & g^{-1/p^2} \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & \cdots \end{array}$$

を考えて次のように証明することができる。まず上記の図式の \mathcal{B}° は $\mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ ではなく、 $\mathcal{B}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g]$ の像

^{*48} $\mathfrak{m} = T^{1/p^\infty} \mathcal{B}^{\circ\circ}$ より、 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ が \mathfrak{m} -torsion free であるためには \mathcal{B}° が \mathcal{B} -torsion free である必要がある。

のこととする。このとき、もし g が $\mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}$ で零因子であったとしても、垂直方向の射が同型になる。よって

$$\varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ(\subset \mathcal{B}^\circ[1/g]) \cong \varprojlim_{incl} g^{-1/p^m} \mathcal{B}^\circ = \bigcap_{m \geq 1} g^{-1/p^m} \mathcal{B}^\circ = g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g] \quad (2.101)$$

となる。ゆえに $\varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ(\subset \mathcal{B}^\circ[1/g]) \cong \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ(\subset \mathcal{B})$ を示せばよい。さらに次の図式

$$\begin{array}{ccccccc} \mathcal{B} \supset & & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1-1/p}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1/p-1/p^2}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & \cdots \\ & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \\ \mathcal{B}^\circ[1/g] \supset & & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1-1/p}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\cdot g^{1/p-1/p^2}} & \mathcal{B}^\circ & \xleftarrow{\quad} & \cdots \end{array}$$

を考えると、垂直方向の射は全射になっている。 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \rightarrow \mathcal{B}^\circ[1/g]$ の像は $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。

また \mathcal{B}° は ϖ 進完備なので補題 2.3.4 から $((\mathcal{B}^\circ)^a)_*$ は ϖ 進完備である。

(2) $\mathcal{B}^\circ \rightarrow ((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \subset \mathcal{B}^\circ[1/g]$ を考えれば良い。

(3) \mathcal{B}° は \mathcal{B} が \mathcal{K} 代数であって、 $\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ から ϖ -torsion free であるから、系列

$$0 \rightarrow \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/p^{m+1}} \mathcal{B}^\circ \xrightarrow{\cdot \varpi} \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/p^{m+1}} \mathcal{B}^\circ \rightarrow \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/p^{m+1}} (\mathcal{B}^\circ/\varpi) \quad (2.102)$$

の1つ目の射は単射である。さらに $(b_m) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ$ が $(\overline{b_m}) = (0) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} (\mathcal{B}^\circ/\varpi)$ のとき、ある $b'_m \in \mathcal{B}^\circ$ で $b_m = \varpi b'_m$ となる。すると

$$\varpi g^{1/p^m-1/p^{m+1}} b'_{m+1} = b_m = \varpi b'_m \in \mathcal{B}^\circ \quad (2.103)$$

であるので \mathcal{B}° が ϖ -torsion free ゆえ $g^{1/p^m-1/p^{m+1}} b'_{m+1} = b'_m \in \mathcal{B}^\circ$ だから $(b'_m) \in \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ$ であるので $(b_m) = \varpi(b'_m)$ となる。したがって (2.102) が完全列になる。(1) で示した同型 $((\mathcal{B}^\circ)^a)_* \cong \varprojlim_{g^{1/p^m-1}/g^{m+1}} \mathcal{B}^\circ$ は \mathcal{B} についての性質のみを用いていたので \mathcal{B}°/ϖ においても同様に成り立つことから、求める単射性がわかる。□

$(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \subset \mathcal{B}^\circ[1/g][1/\varpi] = \mathcal{B}[1/g]$ と、それを含む $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B} \subset \mathcal{B}[1/g]$ を比較して $b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ に対して次を定義する。

$$|b|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}} := \sup_{m \geq 1} |g^{1/p^m} b|_{\mathcal{B}} \in \mathbb{R} \cup \{+\infty\}. \quad (2.104)$$

ここで $|\cdot|_{\mathcal{B}}$ は一様 Banach \mathcal{K} 代数である \mathcal{B} のノルムのことである。

$+\infty$ の値を取るということ以外は $|\cdot|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ はノルムの性質を満たす。

$b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ であって $|b|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}} < \infty$ を満たすものの全体の集合を誘導し、これは一様 Banach \mathcal{K} 代数をなす(もし \mathcal{B} がスペクトラルであればこれもスペクトラルになる)。実際、その集合は \mathcal{K} 部分代数になり、そのような集合の中の元を中心とする半径が有限な開球はまたその集合の中に含まれるため、 $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ においてその集合は開集合になっているから、部分代数であることと合わせて閉集合にもなっている。ゆえに Banach 部分 \mathcal{K} 代数になる。一様性は \mathcal{B}° が有界であることと、次に示す $(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B})^\circ = g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ から分かる。

上記のように誘導された(スペクトラル)ノルム代数は $(\mathcal{B}^\circ)_*$ ではない(例えば section 2.3.6 参照)。

$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ の部分環 $(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B})^\circ$ は、冪乗からなる集合が $|\cdot|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ に関して有界であるような元からなるものであり、

$$(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B})^\circ = g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \quad (2.105)$$

を満たす。実際、 $b \in (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B})^\circ \Leftrightarrow \sup_{l \geq 1} |b^l|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}} < \infty \Leftrightarrow \sup_{l, m \geq 1} |(g^{1/p^m} b)^l|_{\mathcal{B}} < \infty \Leftrightarrow b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ から一致する。

補題 2.5.2. $g \in \mathcal{B}^\circ$ が \mathcal{B} で可逆であるとする (すなわち $\mathcal{B} = \mathcal{B}[1/g]$)。このとき $\mathcal{B}^\circ = g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。

証明. \mathcal{B} の一様性から最初から \mathcal{B} がスペクトラルであるとして良い。 $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\leq 1}$ ゆえ、 $g \in \mathcal{B}^\circ$ より命題 2.3.1(5) から $g^{1/p^m} \in \mathcal{B}^\circ$ であることから、 $1 \leq |g^{-1/p^m}| = |g|^{-1/p^m}$ となる。section 2.5.2 の仮定から $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密なので、ある $\lambda'_m \in \mathcal{K}$ であって

$$1 \leq |g^{-1/p^m}| \leq |\lambda'_m| \leq |g^{-1/p^m}| + \frac{1}{m} \quad (2.106)$$

となるものが取れる。すると $1 \leq |\lambda'_m|$ と $\mathcal{K}^\circ = \mathcal{K}_{\leq 1}$ から $\lambda_m := (\lambda'_m)^{-1} \in \mathcal{K}^\circ$ が取れて、とくに \mathcal{K} の元なのでノルムを分割できて (2.106) から $|\lambda_m g^{-1/p^m}| = |(\lambda'_m)^{-1} g^{-1/p^m}| = |\lambda'_m|^{-1} |g^{-1/p^m}| \leq 1$ から $\lambda_m g^{-1/p^m} \in \mathcal{B}_{\leq 1} = \mathcal{B}^\circ$ となる。さらに $m \rightarrow \infty$ で $|g^{-1/p^m}| = |g|^{-1/p^m} \rightarrow 1$ に注意すれば (2.106) より $|\lambda'_m| \rightarrow 1$ ゆえ、 $|\lambda_m| \rightarrow 1$ となる。すなわち、点列 $\lambda_m \in \mathcal{K}^\circ$ であって、ノルムが 1 に収束していき、 $\lambda_m g^{-1/p^m} \in \mathcal{B}^\circ$ となるものが存在する。すると任意の $b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ に対して、 $b_m := \lambda_m b = (\lambda_m g^{-1/p^m})(g^{1/p^m} b) \in \mathcal{B}^\circ$ から、 $|b_m| \leq 1$ である。 $b = \lambda'_m b_m$ となり、 λ_m のノルムが 1 に収束していることと合わせて $m \rightarrow \infty$ で

$$|b| \leq |b_m| |\lambda'_m| \leq |\lambda'_m| \rightarrow 1 \quad (2.107)$$

となるので $b \in \mathcal{B}_{\leq 1} = \mathcal{B}^\circ$ となる。 \square

2.5.3 Remarque

(1) 一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{B} 上で g を掛ける写像が isometric になったとすると、次の四つが成り立つ (証明は下に記載)。

(a) $\mathcal{B}^\circ[1/g] \cap \mathcal{B} = \mathcal{B}^\circ$ となる。

(b) $g^{1/p^m} \mathcal{B}^\circ$ は \mathcal{B}° で閉集合になる。

(c) $\mathcal{B}^\circ \hookrightarrow g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は isometric になる。

(d) $|\cdot|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ は $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ を一様 Banach 代数にするノルムになる。すなわち $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ 上で $|\cdot|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ は有限の値しかとらない。

さらにこのとき

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B} = (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B})^\circ [1/g] = (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ) [1/g] = ((\mathcal{B}^\circ)^a)_* [1/g] = \mathcal{B}_* \quad (2.108)$$

となる。ただし最後の almost element は cadre として $(\mathcal{K}^\circ [T^{1/p^\infty}], (T)^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathcal{K}^\circ [T^{1/p^\infty}])$ を取っている。一方、もし g を掛ける写像が isometric でなかったとすると、 g が非零因子であったとしても、包含 $\mathcal{B}^\circ \hookrightarrow g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ が必ずしも isometric にはならないだけでなく、 $(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ) [1/\varpi]$ は下記の section 2.5.4 の例の通り $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ と異なる可能性がある。

(2) 包含 $\mathcal{B}^\circ \subset g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は一般に真の包含であり、 g を掛ける写像が isometric であったとしても真の包含である。? 実際、 $\mathcal{K} + T_1^{1/p^\infty} \mathcal{K} \langle T_1^{1/p^\infty}, T_2^{1/p^\infty} \rangle$ の $\mathcal{K} \langle T_1^{1/p^\infty}, T_2^{1/p^\infty} \rangle$ の中での完備化を取り、 $g = T_1$ として取れば良い。

証明. (a) まず、 $\mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ[1/g] \cap \mathcal{B}$ は明らか。

$\beta = b/g^n \in \mathcal{B}^\circ[1/g] \cap \mathcal{B}$ を取る。とくに n を十分大きく取ると $b = g^n \beta \in \mathcal{B}$ となる。ここで $\beta \in \mathcal{B}$ かつ $b \in \mathcal{B}^\circ$ である。すると g を掛けても \mathcal{B} 上のノルムは変わらず、とくに \mathcal{B} がスペクトラルであるとするとき $b \in \mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\leq 1}$ であるから、 $1 \geq |b| = |g^n \beta| = |\beta|$ となる。ゆえに $\beta \in \mathcal{B}^\circ$ となるので $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}^\circ[1/g] \cap \mathcal{B}$ である。

(b) \mathcal{B} をスペクトラルとしておく。まず任意の $b \in \mathcal{B}$ について g を掛ける写像が isometric であるから $|g^{1/p^m} b|^{p^m} = |g b^{p^m}| = |b^{p^m}| = |b|^{p^m}$ ゆえ $|g^{1/p^m} b| = |b|$ となる。とくに g^{1/p^m} を掛ける写像は \mathcal{B} 上 isometric になっている。

すると $g^{1/p^m} \mathcal{B}^\circ$ の Cauchy 列 $(g^{1/p^m} b_k)_{k=1}^\infty$ について、 $|g^{1/p^m} b_k - g^{1/p^m} b_l| = |b_k - b_l|$ となる。ゆえに $(b_k)_{k=1}^\infty$ も \mathcal{B}° における Cauchy 列になる。 \mathcal{B} をスペクトラルとしているから $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\leq 1}$ であるため、とくに閉集合であるから \mathcal{B} の完備性と合わせて、ある $\beta \in \mathcal{B}^\circ$ に $(b_k)_{k=1}^\infty$ は収束する。ゆえに $|g^{1/p^m} b_k - g^{1/p^m} \beta| = |b_k - \beta|$ と合わせて、 $(g^{1/p^m} b_k)_{k=1}^\infty$ は $g^{1/p^m} \beta$ に収束するから、 $g^{1/p^m} \mathcal{B}^\circ$ は \mathcal{B}° で閉集合になる。

(c) ここで \mathcal{B}° は $|\cdot|_{\mathcal{B}}$ をノルムとして持ち、 $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は (2.104) で定義したノルムを持つ。ゆえに $b \in \mathcal{B}^\circ$ に対して (b) の証明で用いた通り \mathcal{B}° 上で g^{1/p^m} を掛ける写像も isometric であるから、

$$|b|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ} = \sup_{m \geq 1} |g^{1/p^m} b|_{\mathcal{B}} = \sup_{m \geq 1} |b|_{\mathcal{B}} = |b|_{\mathcal{B}} \quad (2.109)$$

ゆえ、包含写像 $\mathcal{B}^\circ \hookrightarrow g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は isometric になる。

(d) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ 上で $|\cdot|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ は有限であることを示す。 \mathcal{B}° 上 $g^{1/p^m-1/p^{m+1}} = g^{(p-1)/p^{m+1}}$ を掛ける写像は isometric であるから $b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ について、 $|g^{1/p^{m+1}} b|_{\mathcal{B}} = |g^{1/p^m-1/p^{m+1}} g^{1/p^{m+1}} b|_{\mathcal{B}} = |g^{1/p^m} b|_{\mathcal{B}} < \infty$ となる。したがって、 $|b|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}} = \sup_{m \geq 1} |g^{1/p^m} b|_{\mathcal{B}}$ について、 \sup は常に一定の値を取るのだから $|b|_{g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}}$ は有限の値を取る。□

2.5.4 Exemple prophylactique

\mathcal{K} が標数 p の完全体であるとする。完全 \mathcal{K}° 代数 $\mathcal{K}^\circ \langle T_1^{1/p^\infty}, (\varpi^m T_1^{1/p^m} T_2)^{1/p^\infty} \rangle_{m \in \mathbb{Z}^+}$ は、ある一様 Banach $\mathcal{K} \langle T_1^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{B} の \mathcal{B}° になる。とくに $T_2 \notin \mathcal{B} = (T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \neq T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B} \ni T_2$ となるのが次のように示される。

まず任意の正整数 n で $T_1^{1/p^m} T_2 = (\varpi^m T_1^{1/p^m} T_2)/\varpi^m \in \mathcal{B}^\circ[1/\varpi] = \mathcal{B}$ ゆえ、 $T_2 \in T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ である。これらの場合は各 m についてそれぞれ $1/\varpi^m$ が取れていることに注意する。

もし $T_2 \in (T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi]$ であったとすると、ある正整数 n で $\varpi^n T_2 \in T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。ゆえに任意の正整数 m で $\varpi^n T_1^{1/p^m} T_2 \in \mathcal{B}^\circ = \mathcal{K}^\circ \langle T_1^{1/p^\infty}, (\varpi^k T_1^{1/p^k} T_2)^{1/p^\infty} \rangle_{k \in \mathbb{Z}^+}$ となる。 $T_1^{1/p^m} T_2$ の次数を考えると、ある \mathcal{K}° の元 a によって $\varpi^n T_1^{1/p^m} T_2 = a \varpi^m T_1^{1/p^m} T_2$ となる。係数を比較すると $\varpi^n = a \varpi^m \in \mathcal{B}^\circ$ である。しかし、この n は固定されていて、 m は n にらず任意に動いているため、 n より大きい m を取ることによって $\mathcal{K}^\circ \ni a = \varpi^{n-m} \notin \mathcal{K}^\circ$ となり矛盾する。したがって $T_2 \notin (T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi]$ から、 $(T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \neq T_1^{-1/p^\infty} \mathcal{B}$ となる。

2.5.5

g が非零因子であるとする。 $\mathcal{B}^\circ[1/g]$ と $\mathcal{B}[1/g] = \mathcal{B}^\circ[1/g\varpi]$ ^{*49} のそれぞれにおける \mathcal{B}° の complete integral closure の定義を思い出す (section 2.3.1) と (2.26) から

^{*49} $\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ}$ から section 2.3.2 の議論と同様にして $\mathcal{B} = \mathcal{B}^\circ[1/\varpi]$ となっていることに注意する。

$$(\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} := \{b \in \mathcal{B}^\circ[1/g] \mid \exists m \in \mathbb{Z}^+, \forall n \in \mathbb{Z}^+, g^m b^n \in \mathcal{B}^\circ\} \quad (2.110)$$

$$(\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]} := \{b \in \mathcal{B}[1/g] = \mathcal{B}^\circ[1/\varpi g] \mid \exists m \in \mathbb{Z}^+, \forall n \in \mathbb{Z}^+, (\varpi g)^m b^n \in \mathcal{B}^\circ\} \quad (2.111)$$

となる。また、もし G が \mathcal{B}° の \mathcal{K}° 上の自己同型であって g を固定するものからなる群とすると、 G は $\mathcal{B}[1/g] = \mathcal{B}^\circ[1/\varpi g]$ 上へと延長できて、

$$((\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]})^G = ((\mathcal{B}^\circ)^G)^*_{\mathcal{B}[1/g]} \quad (2.112)$$

となる。実際、 $(\mathcal{B}^\circ)^G \subset \mathcal{B}^\circ$ から \supset の包含は分かる。逆を示す。 $b \in ((\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]})^G$ を取ると、(2.111) より、ある正整数 m で任意の正整数 n に対して $(\varpi g)^m b^n \in \mathcal{B}^\circ$ となる。任意の $\sigma \in G$ は \mathcal{K}° と g を固定して、 $\sigma(b) = b$ でもあるから、 $\sigma((\varpi g)^m b^n) = (\varpi g)^m b^n$ となる。したがって $(\varpi g)^m b^n \in (\mathcal{B}^\circ)^G$ であるため、 $b \in ((\mathcal{B}^\circ)^G)^*_{\mathcal{B}[1/g]}$ となるから \subset の包含も示された。

補題 2.5.3. \mathcal{B} を一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 (もしくは一様ノルム代数) であり、 T の像を $g \in \mathcal{B}^\circ$ とする。このとき以下は同値。

- (1) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\dagger_{\mathcal{B}[1/g]}$ となる ($g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は $\mathcal{B}^\circ[1/g]$ で p -root closed になる)。
- (2) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\dagger_{\mathcal{B}[1/g]}$ となる ($g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は $\mathcal{B}[1/g]$ で p -root closed になる)。
- (3) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]}$ となる。
- (4) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]}$ となる。
- (5) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は $\mathcal{B}^\circ[1/g]$ で completely integrally closed になる。
- (6) $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は $\mathcal{B}[1/g]$ で completely integrally closed になる。

証明. まず (2.110) と (2.111) から

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \subset (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]} \subset (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]} \quad (2.113)$$

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \subset (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \subset (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}[1/g]} \quad (2.114)$$

から、(6) に注意してまず次の図式の通り従う。

$$\begin{array}{ccc} (4) & \Longleftarrow (6) & \Longrightarrow (5) \\ \Downarrow & & \Downarrow \\ (3) & & (1) \end{array}$$

よって (3) \implies (6) と (1) \implies (2) と (2) \implies (6) を示せば良い。

(3) \implies (1) まず一般に

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ \subset (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\dagger_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \quad (2.115)$$

であって、(3) の仮定から $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]}$ となっているため、(1) を示すためには

$$(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\dagger_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \subset (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]} \quad (2.116)$$

を示せば良いことがわかる。つまり $b \in \mathcal{B}^\circ[1/g]$ が $b^p \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ ならば $b \in (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]}$ を示せばよい。

まず仮定より $b^p \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (\mathcal{B}^\circ)^*_{\mathcal{B}^\circ[1/g]}$ から、(2.110) より、ある正整数 m が存在して任意の正整数 n で $g^m (b^p)^n = g^m b^{pn} \in \mathcal{B}^\circ$ となる。ゆえに b の指数が p の (0 より大きい) 倍数のとき g^m を掛けると \mathcal{B}°

に含まれる。ここで、任意の正整数 n' に対して p による剰余 $n' = pk + r$ を取る。すなわち $k, r \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ で $0 \leq r \leq p-1$ となる。ここで、 $b^r \in \mathcal{B}^\circ[1/g]$ から、十分大きい正整数 l によって $g^l b^r \in \mathcal{B}^\circ$ となる。すると b の指数が p の倍数である部分に注意すると

$$g^{m'} b^{n'} = g^{m+l} b^{pk+r} = (g^m b^{pk})(g^l b^r) \in \mathcal{B}^\circ \quad (2.117)$$

となる。したがって (2.110) から $b \in (\mathcal{B}^\circ)_{\mathcal{B}^\circ[1/g]}^*$ となるため、示された。

(1) \implies (2) \mathcal{B} の一様性から、最初からスペクトラルであるとして良い。 $b \in \mathcal{B}[1/g]$ が $b^p \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となったとする。(1) を示すために $b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ を示す。

$b \in \mathcal{B}[1/g]$ から、ある $m \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ で $g^m b \in \mathcal{B}$ となる。すると $b^p \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ からとくに $(g^m b)^p = g^{pm} b^p \in \mathcal{B}^\circ$ なので命題 2.3.1(5) から $g^m b \in \mathcal{B}^\circ$ となる。ゆえに $b \in \mathcal{B}^\circ[1/g]$ であるので、(1) の仮定から $b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ であるので示された。

(2) \implies (6) $b \in (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)_{\mathcal{B}[1/g]}^*$ を取る。(2.111) のようにして、ある正整数 m が存在して、任意の正整数 n で $(\varpi g)^m b^{p^n} \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。 $\varpi_{m/p^n} g^{m/p^n} b \in \mathcal{B}[1/g]$ であって、スペクトラルであるとしていることから $\mathcal{B}^\circ = \mathcal{B}_{\leq 1}$ より ϖ について ϖ_{m/p^n} を取ると確かに $(\varpi_{m/p^n} g^{m/p^n} b)^{p^n} \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。(2) の仮定から $\varpi_{m/p^n} g^{m/p^n} b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となる。(2.105) の議論から一様性に注意すると命題 2.3.1(6) から

$$g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ = (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\circ = ((g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)^\circ)_* \quad (2.118)$$

$$= (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)_* = \bigcap_{\Gamma \ni s > 0} \varpi_{-s}(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ) \subset (g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi] \subset \mathcal{B}[1/g] \quad (2.119)$$

となる。よって $b \in \bigcap_{\Gamma \ni s > 0} \varpi_{-s}(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)$ を示せばよいから、任意の $0 < s \in \Gamma$ について $\varpi_s b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ であることを示す。つまり、任意の $0 < s \in \Gamma$ と任意の正整数 n' で $\varpi_s g^{1/p^{n'}} b \in \mathcal{B}^\circ$ を示せば良い。任意の正整数 n で $\varpi_s g^{m/p^n} b \in g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ となっていることから任意の正整数 k に対して $\varpi_{m/p^n} g^{m/p^n + 1/p^k} b \in \mathcal{B}^\circ$ となる。すると m は n と k によらず一定の正整数であるから n と k を任意に動かすことで、与えられた $s \in \Gamma_{>0}$ と n' に対し

$$s - \frac{m}{p^n} > 0 \quad (2.120)$$

$$\frac{1}{p^{n'}} - \left(\frac{m}{p^n} + \frac{1}{p^k} \right) > 0 \quad (2.121)$$

となるように取ることができる。すると $\varpi_{s-m/p^n} \in \mathcal{K}^\circ \subset \mathcal{B}^\circ$ かつ $g^{1/p^{n'}} - (m/p^n + 1/p^k) \in \mathcal{B}^\circ$ から

$$\varpi_s g^{1/p^{n'}} b = \left(\varpi_{s-m/p^n} g^{1/p^{n'} - (m/p^n + 1/p^k)} \right) \left(\varpi_{m/p^n} g^{m/p^n + 1/p^k} b \right) \in \mathcal{B}^\circ \quad (2.122)$$

となる。したがって $b \in \bigcap_{\Gamma \ni s > 0} \varpi_{-s}(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)$ が示された。 \square

2.5.6 Remarque

以上の最後の (2) \implies (6) の議論から、環 R であって適合的な p 冪乗根 t^{1/p^m} を持つ R の非零因子 t について、もともと $(t^{-1/p^\infty} R)_{R[1/t]}^\dagger \subset R_{R[1/t]}^*$ となっていることに注意すると $R_{R[1/t]}^* = (t^{-1/p^\infty} R)_{R[1/t]}^\dagger$ を示せる。

2.6 Epimorphismes (et localisation)

2.6.1

まず \mathcal{K} -uBan において、像が稠密であるような射は epi 射になる。とくに単なるノルム \mathcal{K} 代数の圏においても像が稠密な射は epi 射になる。

証明. $f: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ をノルム \mathcal{K} 代数の射であって $f(\mathcal{A})$ が \mathcal{B} で稠密であるとする。 $\varphi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ と $\psi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ というノルム \mathcal{K} 代数の間の二つの射が $\varphi \circ f = \psi \circ f$ となっているとする。任意の $b \in \mathcal{B}$ は $f(\mathcal{A})$ の稠密性から、ある $a_n \in \mathcal{A}$ によって $b = \lim_{n \rightarrow \infty} f(a_n)$ と書ける。 φ と ψ の連続性から $\varphi(b) = \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(f(a_n)) = \lim_{n \rightarrow \infty} \psi(f(a_n)) = \psi(b)$ となるから $\varphi = \psi$ となるので $f: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は epi 射になる。 \square

epi 射 φ が extrémal であるとは、 $\varphi = \mu \circ \lambda$ という分解であって μ が mono 射であるとき、 μ が同型射になることが成り立つことである。

\mathcal{K} -uBan において任意の射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は連続性によって標準的な分解 $\mathcal{A} \xrightarrow{\psi} (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u \xrightarrow{\chi} \mathcal{B}$ を

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{A} & \xrightarrow{\varphi} & \mathcal{B} \\ \downarrow & \searrow & \uparrow \\ \mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi) & & \mathcal{B} \\ \downarrow & \nearrow \chi & \\ (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u & & \end{array}$$

と構成することができる。ただし $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ は \mathcal{A} のノルム $|\cdot|_{\mathcal{A}}$ から誘導される剰余半ノルム $|\cdot|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)}$ を持ち、 $\text{Ker}(\varphi) = \varphi^{-1}(\{0\})$ が \mathcal{A} で閉集合であることから、 $|\cdot|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)}$ はノルムであって $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ は Banach \mathcal{K} 代数になっている。さらに $(\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ は定義から $|\cdot|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)}$ から得られるスペクトラル半ノルム $|\cdot|_{sp}$ による完備化である。

このとき ψ は extrémal な epi 射になる。

証明. まず $\psi(\mathcal{A})$ は $(\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ において $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ と一致しているから、一様化は完備化であるから $\psi(\mathcal{A})$ は $(\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ で稠密である。したがって最初に示したとおり ψ は epi 射になる。

ψ が extrémal であることを示す。 ψ の任意の分解 $\psi = \mu \circ \lambda$ であって μ が mono 射であるとする。section 2.5.1 から μ は単射になっている。とくに $\lambda: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{C}$ と $\mu: \mathcal{C} \rightarrow (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ として \mathcal{C} を経由しているとする。もし μ が全射であれば連続全射 $\mu: \mathcal{C} \rightarrow (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ に対して Banach の開写像定理から μ は開写像になるため、単射性と合わせて μ は \mathcal{K} -uBan における同型射になる。ゆえに μ が全射であることを示せば良い。ここで任意の $a \in (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ は、 $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ のスペクトラル半ノルム $|\cdot|_{sp}$ による Cauchy 列 $(\bar{a}_n)_{n=0}^{\infty}$ によって $a = \lim_{n \rightarrow \infty} \bar{a}_n$ となる (ただし $a_n \in \mathcal{A}$ として一つ代表元を固定しておく)。すなわち $\psi: \mathcal{A} \rightarrow (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ の構成に注意すると $a = \lim_{n \rightarrow \infty} \psi(a_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mu(\lambda(a_n))$ となっている。^{*50} \mathcal{C} は一様 Banach \mathcal{K} 代数なのでスペクトラルとしてよく、そのノルムを $|\cdot|_{\mathcal{C}}$ とする。 \mathcal{C} における点列 $(\lambda(a_n))_{n=0}^{\infty}$ が $|\cdot|_{\mathcal{C}}$ で Cauchy 列になっていることを示す。任意の $\epsilon > 0$ に対し、 $(\bar{a}_n)_{n=0}^{\infty}$ は $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ のスペクトラル半ノルム $|\cdot|_{sp}$ に関する Cauchy 列であるため、ある正整数 N が存在して $n, m \geq N$ で

^{*50} $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ が \mathcal{A} で存在するとは限らないため、 $a = \psi(\lim_{n \rightarrow \infty} a_n)$ とできるわけではないことに注意する。

$|\overline{a_n} - \overline{a_m}|_{sp} = |\overline{a_n - a_m}|_{sp} < \epsilon$ となる。Fukete の補題から

$$|\overline{a_n} - \overline{a_m}|_{sp} = \inf_{k \geq 1} \left(\left| \overline{(a_n - a_m)^k} \right|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)} \right)^{1/k} = \inf_{k \geq 1} \left(\left| \overline{(a_n - a_m)^k} \right|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)} \right)^{1/k} < \epsilon \quad (2.123)$$

である。ゆえに、ある正整数 k によって

$$\left(\left| \overline{(a_n - a_m)^k} \right|_{\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)} \right)^{1/k} < \epsilon \quad (2.124)$$

となる。ゆえに剰余半ノルムの定義から、ある $x \in \text{Ker}(\varphi)$ が存在して

$$\left(\left| (a_n - a_m)^k + x \right|_{\mathcal{A}} \right)^{1/k} < \epsilon \quad (2.125)$$

となる。ここで、 μ の単射性から $\alpha \in \mathcal{A}$ について $0 = \varphi(\alpha) = \mu(\lambda(\alpha)) \iff \lambda(\alpha) = 0$ であるので $\text{Ker}(\varphi) = \text{Ker}(\mu)$ から、上で取った $x \in \text{Ker}(\varphi)$ は $x \in \text{Ker}(\mu)$ となっている。すると、 $|\cdot|_{\mathcal{C}}$ がスペクトラルで、 $\lambda: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{C}$ の連続性から、ある定数 $C > 0$ が取れて

$$|\lambda(a_n) - \lambda(a_m)|_{\mathcal{C}} = \left(\left| \lambda((a_n - a_m)^k) \right|_{\mathcal{C}} \right)^{1/k} = \left(\left| \lambda(a_n - a_m)^k + x \right|_{\mathcal{C}} \right)^{1/k} \quad (2.126)$$

$$\leq C^{1/k} \cdot \left(\left| (a_n - a_m)^k + x \right|_{\mathcal{A}} \right)^{1/k} < \epsilon \quad (2.127)$$

となるから、 \mathcal{C} の点列 $(\lambda(a_n))_{n=0}^{\infty}$ は Cauchy 列になっているので $c := \lim_{n \rightarrow \infty} \lambda(a_n) \in \mathcal{C}$ が存在する。ゆえに $a = \lim_{n \rightarrow \infty} \psi(a_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mu(\lambda(a_n)) = \mu(c) \in \mu(\mathcal{C})$ となっているので $\mu: \mathcal{C} \rightarrow (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ は全射になる。上で述べたとおり、この全射性から μ が同型射になることがわかる。□

しかしながら χ が mono 射であることは明らかではなく、それゆえ任意の extrémal な epi 射が ψ の形をしているかも明らかではない。

一方、全射な射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は extrémal な epi 射になる。

証明. まず全射性から上で示したとおり φ は epi 射であることがわかる。

extrémal であることを示す。 φ の全射性と連続性から Banach の開写像定理を用いて $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は開写像であることがわかる。すると標準的な全射 $\pi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ と連続全単射 $\chi': \mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi) \rightarrow \mathcal{B}$ について、 $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi)$ の開集合 U に対し $\chi'(U) = \varphi(\pi^{-1}(U))$ から χ' も開写像になることがわかる。ゆえに \mathcal{B} が一様であることに注意すれば \mathcal{K} -uBan において $\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi) = (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u \cong \mathcal{B}$ である。ゆえに上で定義された χ が同型射になるということだから、 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ は上記で extrémal であることを示した $\psi: \mathcal{A} \rightarrow (\mathcal{A}/\text{Ker}(\varphi))^u$ に等しい。したがって $\varphi = \psi$ も extrémal である。□

以下では \mathcal{A} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とする。

2.6.2

次に、 \mathcal{K} 上の解析幾何学で使われる uniform localisation を定義する。 $f_1, \dots, f_n, f \in \mathcal{A}$ がイデアルとして \mathcal{A} を生成するとする。 $(fU_i - f_i)_i$ によって $\mathcal{A}\langle U_1, \dots, U_n \rangle$ ^{*51} で $fU_i - f_i$ によって生成されるイデアルの閉包 (これもまたイデアルになる) とする。このとき

$$\mathcal{A} \left\{ \frac{f_1, \dots, f_n}{f} \right\} := \mathcal{A}\langle U_1, \dots, U_n \rangle / \overline{(fU_i - f_i)_i} \quad (2.128)$$

^{*51} section 2.1.5 で定義したもの。

と定義する。位相は $\mathcal{A}\langle U_1, \dots, U_n \rangle$ から得られる商半ノルムによって入れる。閉イデアルで割っているから完備性が保たれていることに注意する。これは Banach \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} であって f の像が可逆で $f_i/f \in \mathcal{B}^\circ$ となるものの中で普遍性を持つ ([BGR] 6.4.1)。^{*52} とくにこの普遍性を確かめることで、 $\mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ は多項式環の剰余環

$$\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \quad (2.129)$$

に $\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]$ 上の Gauss ノルムから得られる剰余半ノルムによる完備化と一致していることがわかる。

さらに射 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ は Banach \mathcal{K} 代数の射として epi 射になる。

証明. まず $\mathcal{A}[1/f] \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ の像が稠密になることを示す。

$f_1, \dots, f_n, f \in \mathcal{A}$ が \mathcal{A} をイデアルとして生成することから、ある $a_1, \dots, a_n \in \mathcal{A}$ で $a_1f_1 + \dots + a_nf_n = 1$ ゆえ $\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i)$ の中で $1 = a_1fU_1 + \dots + a_nfU_n = f(a_1U_1 + \dots + a_nU_n)$ だから $1/f \in \mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i)$ となっている。すると

$$\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \longrightarrow \mathcal{A}[1/f] \quad (2.130)$$

$$U_i \longmapsto f_i/f \quad (2.131)$$

という環準同型が定義できてこれは全射になる。このことから $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i)$ は $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}[1/f]$ の普遍性を満たしているため、この全射は同型 $\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \cong \mathcal{A}[1/f]$ となっている。したがって、 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ は

$$\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}[1/f] \cong \mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\} \quad (2.132)$$

と分解できている。ここで完備化をしていることから $\mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ の像は稠密であるため $\mathcal{A}[1/f] \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ の像も稠密になる。ゆえに $\mathcal{A}[1/f] \cong \mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i)$ はノルム \mathcal{K} 代数だから section 2.6.1 で示したとおり $\mathcal{A}[1/f] \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ はノルム \mathcal{K} 代数の圏において epi 射になる。

このことを用いて $\mathcal{A} \xrightarrow{\varphi} \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ が \mathcal{K} -uBan において epi 射であることを示す (ノルム \mathcal{K} 代数の圏においても全く同じように示すことができる)。 \mathcal{K} -uBan で $\mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\} \rightarrow \mathcal{B}$ となるような二つの射 s と t が $s \circ \varphi = t \circ \varphi$ となったとする。すなわち $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}[1/f] \cong \mathcal{A}[U_1, \dots, U_n]/(fU_i - f_i) \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\} \rightrightarrows \mathcal{B}$ が等しい。ここで s と t が \mathcal{A} 上で一致していることから $f \in \mathcal{A}$ より $1/f$ の移る先も一致しているため $\mathcal{A}[1/f] \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\} \rightrightarrows \mathcal{B}$ は等しい。すると上で示したとおり $\mathcal{A}[1/f] \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ がノルム \mathcal{K} 代数の圏において epi 射だから $s = t$ となる。したがって $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/f\}$ は \mathcal{K} -uBan で epi 射になることがわかった。 \square

$i = 1$ で $f_i = 1$ として取れる基本的な形

$$\mathcal{A}\left\{\frac{1}{f}\right\} := \mathcal{A}\langle U \rangle / \overline{(fU - 1)} \quad (2.133)$$

について考える。これは Banach \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} であって f の像が可逆で $f^{-1} \in \mathcal{B}^\circ$ となるものの中で普遍性を持つ。もし $f \in \mathcal{A}^\circ$ だったら、 $fU - 1$ が $\mathcal{A}\langle U \rangle$ で可逆なので $\mathcal{A}\{1/f\} = 0$ となる。

^{*52} [BGR] ではアフィノイドの場合で行っていて、このとき $(fU_i - f_i)_i$ は自然に閉集合になっている。そのかわりに閉包を取った $\overline{(fU_i - f_i)_i}$ で考えても同じことが言える。

補題 2.6.1 ([Mih] Prop.2.3). \mathcal{A} が一様であれば、 $\mathcal{A}\langle U \rangle$ のイデアル $(fU - 1)$ は閉イデアルである。

Gelfand 変換を用いて同様のことを示している議論は、より明確に [KL] 2.8.8 に記載されている。

任意の $f \in \mathcal{A}$ に対して $\lambda \in \mathcal{K}^\circ$ であって $g := \lambda f \in \mathcal{A}^\circ$ となる λ を一つ固定する。

$$\mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} := \mathcal{A}\left\{\frac{1}{f}\right\} \quad (2.134)$$

と定義するとこれは $T \mapsto g$ となる Banach $\mathcal{K}\langle T \rangle$ 代数となる (そのために $g \in \mathcal{A}^\circ$ が必要)。

また、 $\iota_{\lambda/g}: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\{\lambda/g\}$ を標準的な射とする。 \mathcal{A} の $\mathcal{K}\langle T \rangle$ 代数としての構造射 $\mathcal{K}\langle T \rangle \rightarrow \mathcal{A}$ を取る。 $J := (\lambda^{-1}TU - 1) \subset (\mathcal{K}\langle T \rangle)\langle U \rangle$ というイデアルについて (2.14) を用いると、 $J\mathcal{A}\langle U \rangle = (\lambda^{-1}gU - 1) \subset \mathcal{A}\langle U \rangle$ であることと (2.128) の定義、および補題 2.6.1 から J が閉イデアルなので

$$\mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} = \mathcal{A}\langle U \rangle / (\lambda^{-1}gU - 1) = \mathcal{A}\langle U \rangle / \overline{J\mathcal{A}} \quad (2.135)$$

$$\cong \widehat{\mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}\langle T \rangle} ((\mathcal{K}\langle T \rangle)\langle U \rangle / J)} = \widehat{\mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}\langle T \rangle} ((\mathcal{K}\langle T \rangle)\langle U \rangle / \overline{(\lambda^{-1}TU - 1)})} \quad (2.136)$$

$$= \widehat{\mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right)} \quad (2.137)$$

となるから、同型

$$\mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} \cong \widehat{\mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right)} \quad (2.138)$$

が取れる。とくに $g \in \lambda\mathcal{A}^{\circ\circ}$ のとき $\mathcal{A}\{\lambda/g\} = 0$ となる。

さらにこれらについて以下の性質がわかる。

- (a) もし $|\lambda| \leq |\mu|$ ならば、標準的な射 $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}$ が取れて、標準的な射 $\mathcal{A}\{\mu/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\lambda/g\}\{\mu/g\}$ は同型になる。
- (b) もし $|g - h| < |\lambda|$ ならば、標準的な同型 $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \cong \mathcal{A}\{\lambda/h\}$ が取れる (等式 $1/h - 1/g = \sum_{m \geq 1} \lambda^{-m-1}(g-h)^m(\lambda/g)^{m+1}$ を考えれば良い)。
- (c) 任意の $a \in \mathcal{A}$ について $|\iota_{\lambda/g}(a)| = \inf_{m \geq 1} |(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}}$ となる。

証明. まず、任意の $\lambda, \mu \in \mathcal{K}^\circ$ について (2.138) より

$$\mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\}\left\{\frac{\mu}{g}\right\} \cong \left(\mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} \right) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\mu}{T} \right\} \right) \quad (2.139)$$

$$\cong \left(\left(\mathcal{K}\langle S \rangle \left\{ \frac{\lambda}{S} \right\} \right) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle S \rangle} \mathcal{A} \right) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\mu}{T} \right\} \right) \quad (2.140)$$

$$\cong \left(\mathcal{K}\langle S \rangle \left\{ \frac{\lambda}{S} \right\} \right) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle S \rangle} \left(\mathcal{A}\left\{\frac{\mu}{g}\right\} \right) = \mathcal{A}\left\{\frac{\mu}{g}\right\}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} \quad (2.141)$$

となっている。(a) 仮定より $|\lambda| \leq |\mu|$ であるから $|\lambda\mu^{-1}| \leq 1$ より $\lambda\mu^{-1} \in \mathcal{K}^\circ$ である。このとき、まず $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}$ を構成する。最初に多項式環の剰余環の間の射

$$\varphi: \mathcal{A}[U]/(\lambda^{-1}gU - 1) \longrightarrow \mathcal{A}[U]/(\mu^{-1}gU - 1) \quad (2.142)$$

$$U \longmapsto \lambda\mu^{-1}U \quad (2.143)$$

が $\lambda^{-1}g(\lambda\mu^{-1}U) - 1 = \mu^{-1}gU - 1$ によって定まる。それぞれに Gauss ノルムを入れると $\sum_{k=0}^n a_k U^k \in \mathcal{A}[U]/(\lambda^{-1}gU - 1)$ に対して

$$\left| \varphi \left(\sum_{k=0}^n a_k U^k \right) \right| = \left| \sum_{k=0}^n a_k (\lambda\mu^{-1}U)^k \right| \leq \max_{k=0}^n |a_k| |\lambda\mu^{-1}| \leq \max_{k=0}^n |a_k| = \left| \sum_{k=0}^n a_k U^k \right| \quad (2.144)$$

であるから φ は連続になる。したがって完備化を取って延長できるから $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}$ が得られる。

つぎに $\mathcal{A}\{\mu/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\lambda/g\}\{\mu/g\}$ が同型になることを示す。まず、最初に示したことから、自然な射

$$\varphi: \mathcal{A}\left\{\frac{\mu}{g}\right\} \longrightarrow \mathcal{A}\left\{\frac{\mu}{g}\right\}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\} = \mathcal{A}\left\{\frac{\lambda}{g}\right\}\left\{\frac{\mu}{g}\right\} \quad (2.145)$$

が定義できる。ここで $\mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\} = ((\mathcal{A}\{\mu/g\})\langle T \rangle)/(\lambda^{-1}gT - 1)$ には $(\mathcal{A}\{\mu/g\})\langle T \rangle$ 上の Gauss ノルムから得られる剰余ノルムを持っているため φ は連続になっている。さらに

$$T = \frac{\lambda}{g} = \varphi \left(\frac{\lambda}{\mu} \cdot \frac{\mu}{g} \right) \in \mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\} = ((\mathcal{A}\{\mu/g\})\langle T \rangle)/(\lambda^{-1}gT - 1) \quad (2.146)$$

となっている。 φ が全射になることを示す。任意の $\sum_{n \geq 0} a_n T^n \in ((\mathcal{A}\{\mu/g\})\langle T \rangle)/(\lambda^{-1}gT - 1)$ を取る。このとき、 $a_k \in \mathcal{A}\{\mu/g\}$ であって、定義から $\lim_{k \rightarrow \infty} |a_k| = 0$ である。すると $\lambda\mu^{-1} \in \mathcal{K}^\circ$ であることと、 $\mu/g \in \mathcal{A}\{\mu/g\} = \mathcal{A}\langle U \rangle/(\mu^{-1}gU - 1)$ はこの上のノルムの定義から $|\mu/g| \leq 1$ より $k \rightarrow \infty$ で

$$\left| a_k \left(\frac{\lambda}{\mu} \cdot \frac{\mu}{g} \right)^k \right| \leq |a_k| \left| \frac{\lambda}{\mu} \right|^k \left| \frac{\mu}{g} \right|^k \leq |a_k| \rightarrow 0 \quad (2.147)$$

であるから $\sum_{n \geq 0} a_n ((\lambda\mu^{-1})(\mu/g))^n \in \mathcal{A}\{\mu/g\}$ が存在している。 φ の連続性と (2.146) から

$$\varphi \left(\sum_{n \geq 0} a_n \left(\frac{\lambda}{\mu} \cdot \frac{\mu}{g} \right)^n \right) = \sum_{n \geq 0} a_n \left(\varphi \left(\frac{\lambda}{\mu} \cdot \frac{\mu}{g} \right) \right)^n = \sum_{n \geq 0} a_n T^n \quad (2.148)$$

であるので $\varphi: \mathcal{A}\{\mu/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\}$ は全射になる。連続でもあるので Banach の開写像定理からこれは開写像になっている。

$\varphi: \mathcal{A}\{\mu/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\}$ が単射になることを示す。簡単のため $\mathcal{B} := \mathcal{A}\{\mu/g\}$ とおくと $\mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\} = (\mathcal{B}\langle T \rangle)/(\lambda^{-1}gT - 1)$ となっていた。 $b \in \mathcal{B}$ が $\varphi(b) = 0 \in (\mathcal{B}\langle T \rangle)/(\lambda^{-1}gT - 1)$ となったとすると、ある $\sum_{n \geq 0} a_n T^n \in \mathcal{B}\langle T \rangle$ によって $b = (\lambda^{-1}gT - 1)(\sum_{n \geq 0} a_n T^n) \in \mathcal{B}\langle T \rangle$ となる。計算すると

$$b = -a_0 + \sum_{n \geq 1} ((-a_n + \lambda^{-1}ga_{n-1})T^n) \quad (2.149)$$

なので、係数を比較すれば $a_0 = -b$ かつ $n \geq 1$ で $a_n = \lambda^{-1}ga_{n-1} \in \mathcal{B}$ となるから $a_n = -b(\lambda^{-1}g)^n$ である。 $\lambda/g \in \mathcal{B}$ から $b = -(\lambda g^{-1})^n a_n$ になる。ここで $\sum_{n \geq 0} a_n T^n \in \mathcal{B}\langle T \rangle$ であるから $\lim_{n \rightarrow \infty} |a_n| = 0$ であり、さらに全射性の証明でも用いたとおり $|\lambda/g| \leq 1$ だから、 $n \rightarrow \infty$ とすれば

$$|b| = |(\lambda g^{-1})^n a_n| \leq |\lambda g^{-1}|^n |a_n| \leq |a_n| \rightarrow 0 \quad (2.150)$$

となるので $b = 0$ となるから $\varphi: \mathcal{A}\{\mu/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\mu/g\}\{\lambda/g\}$ は単射になるので全射連続開写像であることと合わせてこれは同型射になる。

(b) 後ほど

(c) 後ほど

□

2.6.3 Examples

- (1) スペクトラルノルム代数 $\mathcal{A} := \mathcal{K}\langle T \rangle$ について、 $\mathcal{K}\langle T, \lambda/T \rangle := \mathcal{A}\{\lambda/T\} = (\mathcal{A}\{\lambda/T\})^u$ とする。これは半径 $(\lambda, 1)$ の”閉環”上で解析的関数からなるスペクトラルノルム代数である。また、 $(\mathcal{K}\langle T, \lambda/T \rangle)^\circ = \mathcal{K}^\circ\langle T, \lambda/T \rangle$ はノルムが 1 で抑えられる有界な関数からなる部分代数である。この上のノルムは $\lambda = 0$ もしくは $|\lambda| = 1$ のときのみ乗法的ノルムになる。一般的に \mathcal{A} が乗法的 Banach \mathcal{K} 代数のとき、 $\mathcal{A}\{1/g\} = (\mathcal{A}\{1/g\})^u$ は \mathcal{A} の商体の完備化 $\widehat{Q(\mathcal{A})}$ の中の Banach 部分代数になることに注意する。
- (2) Banach 代数 $\mathcal{K}\langle T, \lambda/T \rangle$ と $\mathcal{K}\langle T, \lambda^2/T^2 \rangle$ は Banach 代数として同型であるが isometric ではない。これは前者はスペクトラルであるが後者はそうでないことからわかる (後者では $|\lambda/T| = |\lambda|^{-1} > 1$ となる)。

$\mathcal{A}\{\lambda/g\}$ が一様でない可能性もある ([Mih] section 3)。ただし \mathcal{A} が被約なアフィノイドでスペクトラルノルムを持つときはそのようなことは起きない ([BGR] 7.2.3 prop.4)。いつでも $\mathcal{A} \rightarrow (\mathcal{A}\{\lambda/g\})^u$ は \mathcal{K} -uBan で epi 射になる。これは $\mathcal{A}[1/g]$ の像が $(\mathcal{A}\{\lambda/g\})^u$ で稠密であることからわかる。関手 $\mathcal{A} \mapsto (\mathcal{A}\{\lambda/T\})^u$ は、 $\mathcal{K}\langle T \rangle$ -uBan の中の \mathcal{B} で T/λ が \mathcal{B}° で可逆になるものからなる充満部分圏から \mathcal{K} -uBan への包含関手の左随伴になっている。

補題 2.6.2. $g \in \mathcal{A}$ が非零因子であるとする。 $\iota: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}'$ を Banach 代数の mono 射であって、(\mathcal{A} 代数として) \mathcal{A}' が $\mathcal{A}[1/g]$ に含まれているとする。このとき誘導される射 $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}'\{\lambda/g\}$ は Banach 代数としての同型射である。

証明. (O.Gabber による)。任意の $n \in \mathbb{Z}^+$ に対して V_n を $\mathcal{A}' \times \mathcal{A}$ の中の $(a', a := g^n a')$ という元からなる閉部分空間とする。第一成分の射影を考えると Banach 空間 $\widehat{\bigoplus_{m \geq 1} V_m}$ から \mathcal{A}' への全射が取れる。 $W_n \subset \mathcal{A}'$ を $\bigoplus_{m \leq n} V_m$ の \mathcal{A}' への像とする。このとき $\mathcal{A}' = \bigcup_{n \geq 1} W_n$ となる。Baire の定理から十分大きい n で $W_n = \mathcal{A}'$ となる。このとき Banach の開写像定理から、ある m で $\bigoplus_{m \leq n} V_m$ は \mathcal{A}' への全射開写像になる。ゆえに g^n を掛けることで連続写像 $\mathcal{A}' \rightarrow \mathcal{A}$ を得る。よって、連続写像 $\mathcal{A}'\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}\{\lambda/g\}$ が得られる。 $\mathcal{A}\{\lambda/g\}$ 上で g^{-n} を掛ける写像を合成することによって標準的な射 $\mathcal{A}\{\lambda/g\} \rightarrow \mathcal{A}'\{\lambda/g\}$ の連続な逆写像が取れる。 \square

補題 2.6.3. \mathcal{A} が一様であり、 g が非零因子であるとする。このとき $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \varprojlim_{\lambda \rightarrow 0} (\mathcal{A}\{\lambda/g\})$ は単射になる。

証明. \mathcal{A} のノルム $|\cdot|$ がスペクトラルであるとして良い。任意の $a \in \mathcal{A}^\circ \setminus \{0\}$ と任意の $\lambda \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ について、section 2.6.2(c) から $|a|_{\mathcal{A}\{\lambda/g\}} = \inf_{m \geq 1} |(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}}$ である。 $a \neq 0$ より $|\lambda| \leq |ga|$ となる λ が取れる。すると $\inf_{m \geq 1} |(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}} \geq 1$ であるから a の $(\mathcal{A}\{\lambda/g\})^\circ$ への像は 0 にならない。 \square

2.6.4 Remarque

- (1) $\iota_{\lambda/g}: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\{\lambda/g\}$ が単射であることと、 $\lceil |\iota_{\lambda/g}(a)| = \inf_{m \geq 1} |(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}} = 0 \implies a = 0 \in \mathcal{A} \rceil$ が成り立つことは同値。

例えばこれは \mathcal{A} 上で g を掛ける写像が isometric であればよい。実際、isometric であったとすると $|(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}} = |\lambda^{-m} a|_{\mathcal{A}} = |\lambda|^{-m} |a|_{\mathcal{A}}$ となっている。さらに $\lambda \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ なので $|\lambda| \leq 1$ であるから

$n \geq m$ なら $|\lambda|^{-m}|a| \leq |\lambda|^{-n}|a|$ となる。したがって $\inf_{m \geq 1} |(g/\lambda)^m a|_{\mathcal{A}} = 0$ のとき、定数 C を一つ固定しておくと、十分大きい任意の m で $|\lambda|^{-m}|a|_{\mathcal{A}} \leq C$ となる。ゆえに $|a|_{\mathcal{A}} \leq C|\lambda|^m \rightarrow 0$ が $m \rightarrow \infty$ で成り立つため $|a|_{\mathcal{A}} = 0$ だから $a = 0$ となる。

また、 $(\mathcal{A}\{\lambda/g\})^u \rightarrow (\mathcal{A}\{\mu/g\})^u$ はいつでも単射になる ($\mu = 1$ として $\mathcal{A}[1/g]$ の稠密性を用いればよい)。一方、 $|\lambda| < 1$ のとき $(\mathcal{A}\{\lambda/g\})$ 上で g を掛ける写像は isometric にならない。

- (2) $\mathcal{K}^\circ[T_1, T_2, (T_2 T_1^i)/\varpi^i]_{i \geq 1}$ の完備化は一樣 Banach \mathcal{K} 代数で T_1 -torsion free な \mathcal{A} の単位閉円板 \mathcal{A}° となる。しかし T_2 が $\mathcal{K}^\circ[T_1, T_2, (T_2 T_1^i)/\varpi^i, \lambda/T_1]_{i \geq 1}$ において ϖ -infinite divisible であるので、もし $|\lambda| > |\varpi|$ であるとする $\iota_{\lambda/T_1}(T_2) = 0$ となる。これは $|\varpi/\lambda| < 1$ と $(T_2 T_1^m)/\varpi^m \in \mathcal{A}^\circ$ から \mathcal{A} がスペクトラルであるとすれば $|(T_2 T_1^m)/\varpi^m| \leq 1$ ゆえ

$$|\iota_{\lambda/T_1}(T_2)| = \inf_{m \geq 1} \left| \left(\frac{T_1}{\lambda} \right)^m T_2 \right| = \inf_{m \geq 1} \left| \frac{T_1^m}{\lambda^m} \cdot \varphi^m \cdot \frac{T_2 T_1^m}{\varpi^m} \cdot \frac{1}{T_1^m} \right| \quad (2.151)$$

$$= \inf_{m \geq 1} \left| \left(\frac{\varpi}{\lambda} \right)^m \cdot \left(\frac{T_2 T_1^m}{\varpi^m} \right) \right| \leq \left| \left(\frac{\varpi}{\lambda} \right)^m \right| \rightarrow 0 \quad (2.152)$$

が $m \rightarrow \infty$ によってわかるため $|\iota_{\lambda/T_1}(T_2)| = 0$ となるからである。

2.7 Produits (et transformee de Gelfand)

2.7.1

無限個の Banach 代数の積は一般には存在しない。もし \mathcal{A} が一樣でなかったとすると、 \mathcal{A}° の非有界な点列 (a_n) が取れて、?このとき $\mathcal{K} \xrightarrow{1 \mapsto a_n} \mathcal{A}$ という射は \mathcal{K} から Banach 代数への射と同値にならない。

一方、一樣 Banach \mathcal{K} 代数の圏は次を積としてもつ (空積は零代数になる)。これを uniform product という。

$$\prod_{\alpha}^u \mathcal{A}^{\alpha} := \left\{ (a^{\alpha}) \in \prod_{\alpha} \mathcal{A}^{\alpha} \mid |(a^{\alpha})| := \sup_{\alpha} |a^{\alpha}|_{sp} < \infty \right\}. \quad (2.153)$$

ここでノルムの定義から $(\prod_{\alpha}^u \mathcal{A}^{\alpha})^{\circ} = \prod_{\alpha} (\mathcal{A}^{\alpha})^{\circ}$ となる。

証明. \mathcal{K} -uBan において積になっていることを示す。各 \mathcal{A}^{α} への射 $\varphi_{\alpha}: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{A}^{\alpha}$ が取れたとする。 α 成分への射影を $p_{\alpha}: \prod_{\alpha} \mathcal{A}^{\alpha} \rightarrow \mathcal{A}^{\alpha}$ とおく (値域は通常の \mathcal{K} 代数としての積)。(通常の) \mathcal{K} 上の代数としての積の普遍性から

$$\begin{array}{ccccc} & & \prod_{\alpha} \mathcal{A}^{\alpha} & & \\ & \nearrow \exists! f & \downarrow p_{\alpha} & \nwarrow & \\ \mathcal{B} & & & & \prod_{\alpha}^u \mathcal{A}^{\alpha} \\ & \searrow \varphi_{\alpha} & \downarrow p_{\alpha} & \swarrow & \\ & & \mathcal{A}^{\alpha} & & \end{array}$$

という可換図式を与える唯一つの \mathcal{K} 準同型 $f: \mathcal{B} \rightarrow \prod_{\alpha} \mathcal{A}^{\alpha}$ が存在する。ゆえに任意の $b \in \mathcal{B}$ に対して $f(b) = (\varphi_{\alpha}(b)) \in \prod_{\alpha}^u \mathcal{A}^{\alpha}$ となることを示せば良い。

すなわち $||(\varphi_{\alpha}(b))|| = \sup_{\alpha} |\varphi_{\alpha}(b)|_{sp} < \infty$ となることを示す。まず \mathcal{A}^{α} と \mathcal{B} をスペクトラルとしてよいので $\varphi_{\alpha}: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{A}^{\alpha}$ はスペクトラル Banach 代数の間の連続な射である。今は $|\mathcal{K}|$ の稠密性から section 2.2.1 の

最後で示したとおり $\|\varphi_\alpha\| \leq 1$ を満たす。このことから $|\varphi_\alpha(b)| \leq |b|$ ゆえ、

$$|(\varphi_\alpha(b))| = \sup_\alpha |\varphi_\alpha(b)|_{sp} \leq \sup_\alpha |b| = |b| < \infty \quad (2.154)$$

となるから $f(B) \subset \prod_\alpha^u \mathcal{A}^\alpha$ となる。したがって $\prod_\alpha^u \mathcal{A}^\alpha$ がその定義に用いたノルムによって確かに一様 Banach \mathcal{K} 代数となっていることと合わせて、 $\prod_\alpha^u \mathcal{A}^\alpha$ は \mathcal{K} -uBan での積になっている。□

2.7.2 Exemple prophylactique

スペクトラル Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が (通常の代数として) ”連結” ^{*53} なスペクトラル Banach \mathcal{K} 代数の uniform product として $\mathcal{A} = \prod_\alpha^u \mathcal{A}^\alpha$ に分解できるときはいかなるときかを考える。このようなことは起きない。 $B(\mathcal{A})$ によって \mathcal{A} の冪等元 (もしくは、同じことだが \mathcal{A}° の冪等元) からなる Bool 代数とする。上記のような分解 (もしくは、同じことだが $\mathcal{A}^\circ = \prod (\mathcal{A}^\alpha)^\circ$ という分解) を持つことは、 $B(\mathcal{A})$ が完備かつ atomic になることと同値である。ここで完備とは任意の部分集合が上限を持つことであり、atomic とは任意の 0 でない元が 0 でない極小元からなる、ある集合の上限として表されることである。

逆に Bool 代数 B から初めて一様 Banach \mathcal{K} 代数 $\mathcal{A} := (\mathcal{K}\langle T_b \rangle_{b \in B} / (T_b T_{b'} - T_{b \wedge b'}, T_b + T_{\neg b'} - 1))^u$ を定義し、位相的に (位相的有限型と言ったときの位相的と同義) 冪等元 T_b によって生成されている。すると $B(\mathcal{A}) \cong B$ となる。もし B が例えば無限自由 Bool 代数 (完備でも atomic でもない) とすると、上記のことから \mathcal{A} は連結成分による uniform product の分解を持たない。[Ber] cor.9.2.7 からさらにこのとき \mathcal{A} の Berkovich スペクトラム $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ は B の極大スペクトラムを同一視できる (B の極大スペクトラム自身は $\text{Spec}(\mathcal{A})$ の連結成分の profinite space と同一視出来る)。また、 \mathcal{A} はその空間上の \mathcal{K} に値をとる有界連続関数からなる代数になる。

2.7.3

一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} の Gelfand transformation とは、

$$\Gamma \mathcal{A} := \prod_{x \in \mathcal{M}(\mathcal{A})}^u \mathcal{H}(x) \quad (2.155)$$

のことである。積は \mathcal{A} の Berkovich スペクトラムの点 (\mathcal{A} 上の乗法的有界半ノルム) の上で取り、 $\mathcal{H}(x)$ は x の剰余体 ^{*54} の完備化とする。このとき標準的な mono 射 $\mathcal{A} \rightarrow \Gamma \mathcal{A}$ が取れて、これが isometric であることと、 \mathcal{A} がスペクトラルであることは同値になっている ([Ber] 1.3.2)。この Berkovich スペクトラム $\mathcal{M}(\Gamma \mathcal{A})$ は離散空間 $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ の Stone-Cech コンパクト化になり ([Ber] 1.2.3)、写像 $\mathcal{M}(\Gamma \mathcal{A}) \rightarrow \mathcal{M}(\mathcal{A})$ は標準的な全射になる。

このような構成は \mathcal{K} -uBan 上の自己関手 Γ を定義する。射の対応は、 $f: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ について連続な ”diagonal” 射 $\mathcal{H}(x) \rightarrow \prod_{f_*(y)=x}^u \mathcal{H}(y)$ が誘導され、 $\Gamma(f)$ は $x \in \mathcal{M}(\mathcal{A})$ 上で uniform product を取ることによって得られる。これは忠実関手 ($\mathcal{B} \rightarrow \Gamma \mathcal{B}$ が mono 射であるから) になるが充満ではない。スペクトラル Banach 代数の間の連続な射 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が誘導する $\mathcal{M}(\mathcal{B}) \rightarrow \mathcal{M}(\mathcal{A})$ が全射であれば、isometric になる。

^{*53} 一様 Banach 代数が連結である、すなわち 0 と 1 以外の冪等元を持たない、ことは Berkovich スペクトラム $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ が連結空間であることと同値 ([Ber] cor.7.4.2)。

^{*54} $x \in \mathcal{M}(\mathcal{A})$ の剰余体とは $Q(\mathcal{A}/\text{Supp}(x))$ のことである ([Ber] cor.1.3.2)。

2.8 Limites

2.8.1

一様 Banach \mathcal{K} 代数からなる圏は equalizer を持つ。これは代数における通常の equalizer を表現する部分代数は閉集合になっているためである。また、この圏は積を持つので完備である (すなわち、任意の (small) limit を持つ)。

一様 Banach \mathcal{K} 代数からなる射影系 (\mathcal{A}^α) であって、添字は (filtered とは限らない) 順序集合 $(\{\alpha\}, \leq)$ であるとする。このとき limit として uniform limit は

$$\text{ulim } \mathcal{A}^\alpha := \{a = (a^\alpha) \in \varprojlim \mathcal{A}^\alpha \mid |a| := \sup_\alpha |a^\alpha|_{sp} < \infty\} \quad (2.156)$$

と定義できる。これは確かに一様 Banach \mathcal{K} 代数であって更にスペクトラルになる。また、スペクトラル半ノルムであることから $(-)^{\circ}$ は単位円板になっているので

$$(\text{ulim } \mathcal{A}^\alpha)^{\circ} = \varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^{\circ} \quad (2.157)$$

となる。とくに系 2.3.2(1)~(4) はこの limit で保たれる。

2.8.2 Exemple

- (1) (r_i) を正の実数からなる 1 へ収束する増加数列とする。このとき、半径 r_i の”閉円板”上の変数 T の解析的関数からなる代数は一様 Banach \mathcal{K} 代数の射影系を為し、その uniform limit は $\mathcal{K}^{\circ}[[T]] \otimes_{\mathcal{K}^{\circ}} \mathcal{K}$ となり、すなわち”単位開円板”上で有界な解析的関数からなる代数になる。
- (2) $|\varpi| < 1$ について、半径 $(|\varpi|^j, 1)$ の”閉環”上の解析的関数からなる代数 $\mathcal{K}\langle T, \varpi^i/T \rangle$ (section 2.6.3) は一様 Banach \mathcal{K} 代数の射影系を為し、その limit は $\mathcal{K}\langle T \rangle$ となる。これは非アルキメデス的な場合における Riemann の拡張定理の単純な場合である。^{*55}

補題 2.8.1. (\mathcal{A}^α) を一様 Banach \mathcal{K} 代数からなる射影系とし、その uniform limit が \mathcal{A} になっているとする。このとき標準的な射 $\mathcal{A}^{\circ}/\varpi \rightarrow \varprojlim ((\mathcal{A}^\alpha)^{\circ}/\varpi)$ は単射になる。

証明. \mathcal{A}^α は ϖ -torsion free であるから、完全列 $0 \rightarrow \varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^{\circ} \xrightarrow{\varpi} \varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^{\circ} \rightarrow \varprojlim ((\mathcal{A}^\alpha)^{\circ}/\varpi)$ が取れるのでわかる。 \square

補題 2.8.2. (\mathcal{A}^α) を一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数からなる射影系とする。この uniform limit は自然に一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数になる。 g^{1/p^m} によって \mathcal{A}^α における T^{1/p^m} の像とする。^{*56} このとき標準的な同型

$$g^{-1/p^\infty} (\varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^{\circ}) \cong \varprojlim (g^{-1/p^\infty} (\mathcal{A}^\alpha)^{\circ}) \quad (2.158)$$

がある。

^{*55} 原点付近では ϖ^i の外側だけで定義されているが、その limit を取ることで原点で定義できるようになっている。

証明. 一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数であることは、 g^{1/p^m} を取れば良い。

cadre として $(\mathcal{K}^\circ[T^{1/p^\infty}], T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ}[T^{1/p^\infty}])$ を取って、関手 $(-)^a$ と $(-)_*$ を考えると、これは limit を保つ。ゆえに (2.157) と補題 2.5.1(1) から、

$$g^{-1/p^\infty} \varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^\circ = g^{-1/p^\infty} (\text{ulim } \mathcal{A}^\alpha)^\circ = (((\text{ulim } \mathcal{A}^\alpha)^\circ)^a)_* \quad (2.159)$$

$$= ((\varprojlim (\mathcal{A}^\alpha)^\circ)^a)_* = \varprojlim (((\mathcal{A}^\alpha)^\circ)^a)_* \quad (2.160)$$

$$= \varprojlim (g^{-1/p^\infty} (\mathcal{A}^\alpha)^\circ) \quad (2.161)$$

となるので良い。もしくは、この形であれば limit の順番が変えられるので

$$g^{-1/p^\infty} (\varprojlim_\alpha (\mathcal{A}^\alpha)^\circ) = \varprojlim_m (g^{-1/p^m} (\varprojlim_\alpha (\mathcal{A}^\alpha)^\circ)) = \varprojlim_m \varprojlim_\alpha (g^{-1/p^m} (\mathcal{A}^\alpha)^\circ) \quad (2.162)$$

$$= \varprojlim_\alpha \varprojlim_m (g^{-1/p^m} (\mathcal{A}^\alpha)^\circ) = \varprojlim_\alpha (g^{-1/p^\infty} (\mathcal{A}^\alpha)^\circ) \quad (2.163)$$

からもわかる。 \square

とくにこの補題 2.8.2 を uniform licalisation からなる射影系 $((\mathcal{A} \{ \varpi^i/g \})^u)$ に適用し、これは $1/g$ を含むことから、補題 2.5.2 と合わせてこの射影系の uniform limit を $\tilde{\mathcal{A}}$ とすると、

$$(\tilde{\mathcal{A}})^\circ = g^{-1/p^\infty} (\tilde{\mathcal{A}})^\circ \quad (2.164)$$

となる。

2.9 Colimites

2.9.1

一様 Banach \mathcal{K} 代数からなる帰納系 (\mathcal{B}_α) であって、添字は filtered な順序集合 $(\{\alpha\}, \leq)$ であるとする。このとき (通常の) \mathcal{K} 代数としての colimit を取った $\varinjlim \mathcal{B}_\alpha$ に $|(b_\alpha)| := \lim_\alpha |b_\alpha|_{sp}$ による (スペクトラルな) 半ノルムを入れる (単調性から確かにこの limit は存在し、半ノルムが定義される)。このとき uniform colimit を $\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha$ と書き、これを $\varinjlim \mathcal{B}_\alpha$ の、この半ノルムによる完備化によって定義する。このノルムによって $\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha$ は (スペクトラルな) 一様 banach 代数になる。

以上のことから、この uniform (filtered) colimit は \mathcal{K} -uBan における filtered colimit を与える。さらに命題 2.3.1 の記号を用いて、 $(\varinjlim (\mathcal{B}_\alpha^\circ)) |(b_\alpha)| = \lim_\alpha |b_\alpha|_{sp}$ となり、 $(\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha)^\circ = (\widehat{\varinjlim (\mathcal{B}_\alpha^\circ)})_*$ となる。

もし \mathcal{B}_α がスペクトラルであり、 $\mathcal{B}_\beta \rightarrow \mathcal{B}_\alpha$ が isometric であれば、 $\mathcal{B}_\beta \rightarrow \text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha$ も isometric である。このときは $(\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha)^\circ = (\widehat{\varinjlim (\mathcal{B}_\alpha^\circ)})$ となる。

2.9.2

\mathcal{K} -uBan は以上で見たとおり filtered colimit を持ち、さらに push-out として $\hat{\otimes}^u$ を持つ (section 2.2.5)。とくに始対象 \mathcal{K} を持つので coequalizer も存在する。ゆえに \mathcal{K} -uBan は余完備である。すなわち、(small) colimit を持つ。

*56 射影系を為していることからこの g^{1/p^m} は α によらずに互いに移り合うように取れる。

補題 2.9.1. ucolim は uniform localisation (section 2.6.2 の一様化) と可換である。すなわち、 $\lambda \in \mathcal{K}^\circ \setminus \{0\}$ と一様 Banach $\mathcal{K}\langle T \rangle$ 代数とみなした filtered な帰納系 (\mathcal{B}_α) に対して、 g を T の像として互いに移り合うように $\mathcal{B}_\alpha \{\lambda/g\}$ が定義できて、 $\text{ucolim}(\mathcal{B}_\alpha \{\lambda/g\})^u = ((\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha) \{\lambda/g\})^u$ となる。この一様化を外すことも出来る。

証明. ucolim と $\widehat{\otimes}^u$ は可換であり、uniform localisation を取る関手 $((-) \{\lambda/g\})^u$ について (2.138) の表示を考えると、一様化を取っていることに注意すれば

$$\text{ucolim} \left(\mathcal{B}_\alpha \left\{ \frac{\lambda}{g} \right\} \right)^u \cong \text{ucolim} \left(\mathcal{B}_\alpha \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \right) \quad (2.165)$$

$$= (\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \cong \left((\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha) \left\{ \frac{\lambda}{g} \right\} \right)^u \quad (2.166)$$

より可換である。もしくは uniform localisation の左随伴関手としての性質からもわかる。一様化を付けていない場合は

$$\text{ucolim} \left(\mathcal{B}_\alpha \left\{ \frac{\lambda}{g} \right\} \right) \cong \text{ucolim} \left(\mathcal{B}_\alpha \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \right) \cong \varinjlim \left(\mathcal{B}_\alpha \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \right) \quad (2.167)$$

$$\cong \varinjlim \left(\mathcal{B}_\alpha \otimes_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \right) \cong (\varinjlim \mathcal{B}_\alpha) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\lambda}{T} \right\} \right) \quad (2.168)$$

$$\cong \left((\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha) \left\{ \frac{\lambda}{g} \right\} \right)^u \quad (2.169)$$

が成り立つことから分かる。 \square

2.9.3 Example

- (1) \mathcal{K} が標数 $p > 0$ であるとする、 p -root closure の完備化は $\text{ucolim } \mathcal{K}^{1/p^i}$ となる。
- (2) \mathcal{A} をスペクトラル Banach \mathcal{K} 代数として $g \in \mathcal{A}^\circ$ を取る。 \mathcal{A} を $T \mapsto g$ によって $\mathcal{K}\langle T \rangle$ 代数とする。 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{i+1}} \rangle$ は $\mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle$ 上に $1, T^{1/p^{i+1}}, \dots, T^{(p-1)/p^{i+1}}$ を直交基底として持つ。このとき

$$\mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle := \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle \quad (2.170)$$

$$\mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle = \text{ucolim}_i \mathcal{A}\langle T^{1/p^i} \rangle = \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \quad (2.171)$$

と定義する。下の (2.171) の等式は ucolim と $\widehat{\otimes}^u$ が可換であり、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle = \text{ucolim}_i \mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle$ となっていること (colimit の普遍性からわかる) から従う。section 2.2.7 を $\mathcal{C} := \mathcal{K}\langle T^{1/p^{i+1}} \rangle$ 、 $\mathcal{A} := \mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle$ 、 $\mathcal{B} := \mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle$ として適用すると、一様化を行っていることから \mathcal{B} はスペクトラルであるので

$$\mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle \rightarrow \mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^{i+1}} \rangle \cong \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^{i+1}} \rangle = \mathcal{A}\langle g^{1/p^{i+1}} \rangle \quad (2.172)$$

は isometric になる。すると section 2.9.1 の最後の議論から $i = 0$ と取って $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle$ は isometric になる。また、(2.17) を $\mathcal{A} := \mathcal{K}$ 、 $\mathcal{B} := \mathcal{A}$ 、 $T := T^{1/p^i}$ 、 $J := (T - g)$ として適用すると、

$$(\mathcal{A}\langle T^{1/p^i} \rangle / (T - g))^u \cong \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}}^u (\mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle / (T - T)) = \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle = \mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle \quad (2.173)$$

となる。すなわち、

$$\mathcal{A}\langle g^{1/p^i} \rangle \cong (\mathcal{A}\langle T^{1/p^i} \rangle / (T - g))^u \quad (2.174)$$

という同型がある。

- (3) 任意の一樣 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{B} は被約アフィノイド \mathcal{K} 代数 \mathcal{B}_α からなる filtered uniform colimit になり、通常の代数の colimit からの射 $\varinjlim \mathcal{B}_\alpha \rightarrow \mathcal{B}$ が全単射になるように次のように構成できる。 \mathcal{B} における有限部分集合 $\alpha \subset \mathcal{B}^\circ$ に対して、 \mathcal{B}_α を自由対象 $\mathcal{K}\langle T_s \rangle_{s \in \alpha}$ から \mathcal{B} への像によって得られる被約アフィノイド \mathcal{K} 代数とする。^{*57} このとき通常の代数の colimit から得られる射 $\varinjlim \mathcal{B}_\alpha^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ は明らかに全射。さらに $\mathcal{B}_\alpha \subset \mathcal{B}$ から $\mathcal{B}_\alpha^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ は単射であることと合わせて $\varinjlim \mathcal{B}_\alpha^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ は全単射になる。これに対して ϖ の逆元を添加すれば良い。このことから $\mathcal{B} = \text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha$ にもなっている。
- (4) 半径 $|\varpi|^i$ の”閉円板”上の解析的関数からなる代数 $\mathcal{K}\langle T/\varpi^i \rangle$ は一樣 Banach \mathcal{K} 代数の帰納系を為す。通常の代数の colimit をとると、これは原点における解析的関数の germ からなる代数になる。この上の極限半ノルムは $|\sum a_j T^j| := \lim_{i \rightarrow \infty} \max_j |a_j \varpi^{ij}| = |a_0|$ となる (十分大きい $i \gg 0$ で \max_j は最初に $a_j \neq 0$ となる j によって実現される)。一方 uniform colimit は \mathcal{K} になり、射 $\mathcal{K}\langle T/\varpi^i \rangle \rightarrow \mathcal{K}$ は 0 の代入によって定義される。

最後の例は次の補題 2.9.2 の特別な場合である。このことは他の箇所でも用いることはないが、後の??で扱われる、colimit と limit の違いに関係している。すなわち、 $f = 0$ の管状近傍と $g = 0$ の管状近傍の補集合の違いである。(section 2.8.2(2) と section 2.9.3(4) の違いはその上の解析的関数の代数の形と limit か colimit かの違いである)。

補題 2.9.2. \mathcal{B} を一樣 Banach \mathcal{K} 代数として、 $f \in \mathcal{B}^\circ$ を取る。このとき標準的な同型射

$$\text{ucolim} \left(\mathcal{B} \left\{ \frac{f}{\varpi^i} \right\} \right)^u \xrightarrow{\cong} (\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u \quad (2.175)$$

が取れる。

証明. $f \in \mathcal{B}^\circ$ の $(\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u$ への像のノルムは、 $f/\varpi^i \in ((\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u)^\circ$ であり、これはスペクトラルであったから、 $|f/\varpi^i| \leq 1$ ゆえ、 $|f| \leq |\varpi|^i$ になる。したがって $\text{ucolim}(\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})$ に関する section 2.9.1 の定義より $|f| = \lim_i |f|_{sp} = 0$ から、 $f = 0$ となる。よって $\mathcal{B}/f\mathcal{B} \rightarrow (\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u$ から $(\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u \rightarrow (\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u$ が i について適合的に取れるので、 $(\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u \rightarrow \text{ucolim}(\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u$ が得られる。一方で、 ϖ^i は \mathcal{A} で可逆であることから $\mathcal{B}\langle U \rangle$ のイデアルとして $(\varpi^i U - f) = (U - \varpi^{-1}f)$ となっていて、補題 2.6.1 と同様に [Mih] prop.2.3 より $(U - \varpi^{-1}f)$ は $\mathcal{B}\langle U \rangle$ で閉である。ゆえに

$$\mathcal{B}\{f/\varpi^i\}/(f) = (\mathcal{B}\langle U \rangle / (\varpi^i U - f)) / (f) = \mathcal{B}\langle U \rangle / (f, \varpi^i U - f) = \mathcal{B}\langle U \rangle / (U, f) = \mathcal{B}/f\mathcal{B} \quad (2.176)$$

となる。よって $\mathcal{B}\{f/\varpi^i\} \rightarrow \mathcal{B}\{f/\varpi^i\}/(f) = \mathcal{B}/f\mathcal{B}$ より、一樣化を取った後、colimit の普遍性から $\text{ucolim}(\mathcal{B}\{f/\varpi^i\})^u \rightarrow (\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u$ が取れる。すなわち、二つの可換な三角形

^{*57} 定義からこの被約アフィノイド \mathcal{K} 代数は位相的有限表示型 \mathcal{K} 代数になっている。しかし $\mathcal{K}\text{-uBan}$ において (圏論的な) 有限表示性を持たない。すなわち、関手 $\text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{B}_\alpha, -)$ が filtered colimit との可換性が無い。これは $\mathcal{K}\langle T \rangle$ であっても成り立っていない。実際、 $\varinjlim (\text{Hom}(\mathcal{K}\langle T \rangle, \mathcal{B}_\alpha)) = \varinjlim \mathcal{B}_\alpha^\circ$ であるが、 $\text{Hom}(\mathcal{K}\langle T \rangle, \text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha) = (\text{colim } \mathcal{B}_\alpha^\circ)_*$ となっている。

$$\begin{array}{ccc}
\mathcal{B} & & \\
\downarrow & \searrow & \\
\text{ucolim} \left(\mathcal{B} \left\{ \frac{f}{\varpi^i} \right\} \right)^u & \xleftrightarrow{\quad} & (\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u
\end{array}$$

が存在する。この下の二つの射が互いに逆射になっていることを示すためには \mathcal{B} から出ている二つの射が共に epi 射なら良い。 $\mathcal{B} \rightarrow (\mathcal{B}/f\mathcal{B})^u$ に関しては構成から明らか (epi 射は必ずしも全射でなくても良い)。 $\mathcal{B} \rightarrow \mathcal{B} \{f/\varpi^i\}$ についても section 2.6.2 で述べたとおり epi 射になっている。colimit は epi 射を保つことから $\mathcal{B} \rightarrow \text{ucolim}(\mathcal{B} \{f/\varpi^i\})^u$ も epi 射になるので示された。□

系 2.9.3. \mathcal{A} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とし、 $g \in \mathcal{A}^\circ$ と定義する。このとき標準的な同型射

$$\text{ucolim}_i \left(\mathcal{A} \langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{T-g}{\varpi^i} \right\} \right)^u \xrightarrow{\cong} \mathcal{A} \langle g^{1/p^\infty} \rangle \quad (2.177)$$

$$\left(\widehat{\lim_i} \left(\mathcal{A} \langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{T-g}{\varpi^i} \right\} \right)^\circ \right)_* \xrightarrow{\cong} \left(\mathcal{A} \langle g^{1/p^\infty} \rangle \right)^\circ \quad (2.178)$$

が得られる。

証明. (2.174) と (2.175) から、 $j \geq 0$ について

$$\text{ucolim}_i \left(\mathcal{A} \langle T^{1/p^j} \rangle \left\{ \frac{T-g}{\varpi^i} \right\} \right)^u \cong \left((\mathcal{A} \langle T^{1/p^j} \rangle) / (T-g) \right)^u \cong \mathcal{A} \langle g^{1/p^j} \rangle \quad (2.179)$$

となる。この両辺を j について uniform colimit を取れば一つ目の同型が得られる。そして両辺の $(-)^{\circ}$ を取れば section 2.9.1 の議論から二つ目の同型も得られる。□

3 La categorie bicomplete des algebres perfectoides

一様 Banach 代数 \mathcal{A} が \mathcal{A}° を p で剰余を取った上での Frobenius 自己準同型が全射であるとする。このような代数に関する tilting や finite étale extension の保持などを含む一般的な性質について見る。とくに limit や colimit を持ち、perfectoid algebra の圏を一様 Banach 代数の圏へと移す関手が右随伴を持つことを見る。colimit は uniform colimit で良いが、limit は一般には uniform limit にはならない。

F によって標数 p の可換環上の Frobenius 準同型 $x \mapsto x^p$ を表すこととする。

3.1 Corps perfectoides

3.1.1

\mathcal{K} を非アルキメデス的かつ非離散的な絶対値 (乗法付値) をもつ完備体とし、その剰余体 k が標数 $p > 0$ を持つとする。[Sch] section 3 の通りに、 \mathcal{K} が perfectoid field であるとは、さらに以下の同値な条件を満たすことである。

- (i) $\mathcal{K}^\circ/p \xrightarrow{F} \mathcal{K}^\circ/p$ は全射。
- (ii) 任意の $\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ であって $p\mathcal{K}^\circ \subset \varpi\mathcal{K}^\circ$ となるものについて $\mathcal{K}^\circ/\varpi \xrightarrow{F} \mathcal{K}^\circ/\varpi$ は全射。

(iii) $|\varpi|^{1/p}$ をノルムとして与える任意の $\varpi_{1/p}$ に対して $\sigma: \mathcal{K}^\circ/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} \mathcal{K}^\circ/\varpi$ は全単射。

\mathcal{K}° の位相は命題 2.3.1(1) から ϖ 進位相になる (ここで、 $\varphi \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ は任意に取ってよく、 \mathcal{K} の剰余体が標数 $p > 0$ だからとくに $p \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ を取ることもできる)。この ϖ に関する値群 Γ ^{*58} は p -divisible である (さらに \mathbb{R} で稠密)。また、 k は完全である。もし \mathcal{K} が標数 p の perfectoid であれば完全体になる。

3.1.2 Examples

\widehat{K}_∞ を cyclotomic perfectoid field といい、以下のように定義する。

- (1) K_0 を完全体 k の Witt 環 $W(k)$ の商体とする。とくにこれは p を一意化係数とする完備離散付値環である。この代数閉包を一つ固定し、その中での整合的な 1 の原始 p 冪乗根 $(\zeta_{p^i})_{i \geq 1}$ を一つ固定する (p^i 乗根からなる巡回群を μ_{p^i} とおくと $\mathbb{Z}_p \cong \varprojlim_i \mu_{p^i}$ となっている)。このとき円分拡大の列

$$K_i := K_0(\zeta_{p^i}) = K_0 \otimes_{\mathbb{Q}_p} \mathbb{Q}_p(\zeta_{p^i}) \quad (3.1)$$

を取る。すると、 $K_i^\circ = W(k)[\zeta_{p^i}]$ であり、一意化係数を $\zeta_{p^i} - 1$ として持つ。また、 p による剰余をとったとき Frobenius 射によって $K_i^\circ/p \cong (K_{i+1}^\circ)^p/p$ となる。 $K_\infty := \cup_i K_i$ の完備化を \widehat{K}_∞ と書き、これは perfectoid field になる。この値群は $1/(p-1) \cdot \mathbb{Z}[1/p]$ となる。

- (2) π を K_0 の一意化係数とすると、 $K_0(\pi^{1/p^i})^\circ = W(k)[\pi^{1/p^i}]$ になり、 p による剰余をとったとき Frobenius 射によって $(K_0(\pi^{1/p^i}))^\circ/p \cong ((K_0(\pi^{1/p^{i+1}}))^\circ)^p/p$ という同型がある。 $K_0(\pi^{1/p^\infty}) := \cup K_0(\pi^{1/p^i})$ の完備化も perfectoid field になる。

命題 3.1.1 ([GR] prop.6.6.6). \mathcal{K} が非アルキメデス的な非離散的絶対値について完備な体であるとする。 \mathcal{K}^s を \mathcal{K} の分離閉包とする。このとき \mathcal{K} が perfectoid field であること (\mathcal{K}°/p 上で F が全射) と、deeply ramified であること ($\Omega_{(\mathcal{K}^s)^\circ/\mathcal{K}^\circ}$ が $\mathcal{K}^{\circ\circ}$ で消える ([GR] Def.6.6.1, Prop.6.6.2)) は同値。

系 3.1.2. perfectoid field の任意の代数拡大体の完備化 \mathcal{L} は perfectoid field になる。

3.2 Algebres perfectoides

3.2.1

[Sch] section 3 と同様にして、perfectoid field \mathcal{K} 上 (ϖ を一つ固定しておく) の一様 Banach 代数 \mathcal{A} が perfectoid \mathcal{K} 代数であるとは、次の同値な条件を満たすことである。^{*59}

- (1) $\mathcal{A}^\circ/p \xrightarrow{F} \mathcal{A}^\circ/p$ は全射。
- (2) $\mathcal{A}^\circ/p \xrightarrow{F} \mathcal{A}^\circ/p$ が $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ を cadre としたときに almost surjective。
- (3) $\mathcal{A}^\circ/\varpi \xrightarrow{F} \mathcal{A}^\circ/\varpi$ は全射。

^{*58} $|\mathcal{K}| = |\varpi|^\Gamma$ となるもののこと。

^{*59} $\varpi \in \mathcal{K}^{\circ\circ}$ が $p\mathcal{K}^\circ \subset \varpi\mathcal{K}^\circ$ であることと $\varpi^b \in \mathcal{K}^{b\circ} \cong \varprojlim_{x \mapsto x^p} \mathcal{K}^\circ$ が取れていること (section 3.3.1) から $\varpi^{1/p} \in \mathcal{K}^\circ$ を考えることで一様 Banach であることと合わせて、この定義は (perfectoid field 上において)[Mor] Def.V.1.1.1 と同値であることがわかる。

- (4) $\mathcal{A}^\circ/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} \mathcal{A}^\circ/\varpi$ は全単射 (section 2.3.3(1) から単射性はいつでも成り立つ)。
 (5) Frobenius 射によって \mathcal{K}° 代数の同型 (もしくは cadre $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ に関する almost isomorphism ^{*60})

$$\mathcal{A}^\circ/\varpi_{1/p} \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi_{1/p}, \sigma} \mathcal{K}^\circ/\varpi = \mathcal{A}^\circ/\varpi \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi, F} \mathcal{K}^\circ/\varpi \xrightarrow{\cong} \mathcal{A}^\circ/\varpi (= F^*(\mathcal{A}^\circ/\varpi)) \quad (3.2)$$

$$\alpha \otimes x \mapsto x\alpha^p \quad (3.3)$$

が誘導される。ただし、左辺の \mathcal{K}°/ϖ 代数としての構造射は

$$\mathcal{K}^\circ/\varpi \longrightarrow \mathcal{A}^\circ/\varpi \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi, F} \mathcal{K}^\circ/\varpi \quad (3.4)$$

$$x \longmapsto x \cdot (1 \otimes 1) = 1 \otimes x^p \quad (3.5)$$

で取っている。^{*61}以降でもこのような同型が出てくることに注意する (命題 3.4.2 など)。この左辺を単純に F^* を取っていると考えると値域側でも F^* を取っているため線形性が無くなってしまう。

perfectoid \mathcal{K} 代数の間の射を連続な \mathcal{K} 代数の射のこととすることで、perfectoid \mathcal{K} 代数の圏 ($\mathcal{K}\text{-Perf}$) を perfectoid \mathcal{K} 代数からなる $\mathcal{K}\text{-uBan}$ の充満部分圏とする。とくに始対象 \mathcal{K} と終対象 0 を持つ。

Banach \mathcal{K} 代数を一つ固定し、perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{B} と射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ を perfectoid \mathcal{A} 代数という。これらから明らかな構成によって圏 $\mathcal{A}\text{-Perf}$ が得られる。

また、[Sch] Def.5.1 のようにして次が定義できる。

- (a) ϖ 進完備かつ flat な $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数 A であって、Frobenius 射が (almost での) 同型 $A/\varpi_{1/p} \xrightarrow{F} A/\varpi$ を誘導するものを perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数という。これを対象として持ち、射は $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数の射を持つ圏を $(\mathcal{K}^\circ)^a\text{-Perf}$ と表す。
 (b) flat な $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 代数 \bar{A} であって、Frobenius 射が (almost での) 同型 $A/\varpi_{1/p} \xrightarrow{F} A/\varpi$ を誘導するものを perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 代数という。これを対象として持ち、射は $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 代数の射を持つ圏を $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi\text{-Perf}$ と書く。

3.2.2 Remarque

- (1) \mathcal{A} を乗法的 perfectoid \mathcal{K} 代数とする (とくに整域になる)。この商体の完備化は perfectoid field になる。
 (2) \mathcal{K} の標数が $p > 0$ であったとする。まず、一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が perfectoid であることと完全であること (\mathcal{A} 上で F が全単射) は同値。

さらに、Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が一様であることと、被約かつ \mathcal{A}^p が \mathcal{A} で閉集合であることは同値 ([Gun] lem.3.5)。^{*62}言い換えれば、 \mathcal{A} 上の Frobenius 射が単射かつ像が閉集合になることである。ゆえに、(一様とは限らない) Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が perfectoid であることと、完全であることは同値 (一様性は F の全射性から従うから)。

^{*60} 一様 Banach 代数 \mathcal{A} の \mathcal{A}° は系 2.3.2 から \mathcal{K}° 上 flat であることがわかっているため、この定義は \mathcal{A}° が下記の (a) で定義された perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数の条件を満たしていることに等しい

^{*61} ただし、命題 3.4.2 の証明で用いる F^* という、cadre からの射を F に取り変化させている記号を用いている。

^{*62} [Gun] lem.3.5 では被約性を課していないが、 $a \mapsto \inf_i |a^i|^{1/i}$ がノルムであることの証明に必要である。

命題 3.2.1. \mathcal{K} が標数 $p > 0$ であるとする。perfectoid \mathcal{K} 代数の圏から一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏への包含関手は左随伴を次のようにして持つ。^{*63}

$$\mathcal{K}\text{-uBan} \longrightarrow \mathcal{K}\text{-Perf} \quad (3.6)$$

$$\mathcal{A} \longmapsto \operatorname{ucolim}_i \mathcal{A}^{1/p^i} = \operatorname{ucolim}_F \mathcal{A} \quad (3.7)$$

によって与える (これは p -root closure の完備化のことである)。さらにこの関手は右随伴として

$$\mathcal{K}\text{-Perf} \longrightarrow \mathcal{K}\text{-uBan} \quad (3.8)$$

$$\mathcal{A} \longmapsto \operatorname{ulim}_F \mathcal{A} \quad (3.9)$$

を持つ。

さらにこの \mathcal{K} の標数が $p > 0$ のとき系 2.3.2 について、定義域を制限することで、 $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^\circ$ によって、perfectoid \mathcal{K} 代数の圏と \mathcal{K}° 代数 A であって完全、flat、 ϖ 進完備、 $A = A_*$ となるものからなる圏の間に圏同値がある。

任意標数のときは [Sch] Lem.5.6 をもとにした次の結果がある。

補題 3.2.2. 関手 $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^\circ$ が、perfectoid \mathcal{K} 代数の圏から、 \mathcal{K}° 代数 A であって flat、 ϖ 進完備、 $A = A_*$ 、 $A/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} A/\varpi$ が全単射になるものからなる圏への圏同値を与える。

証明. 系 2.3.2 を踏まえれば、まず perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} について、 \mathcal{A}° はとくに section 3.2.1 の定義と合わせて、上記の条件を満たす。逆にその条件を満たす A について、まず仮定から $A[1/\varpi]$ を命題 2.3.1 のように定義できる。 \mathcal{K} が離散的でないことから $|\mathcal{K}|$ が \mathbb{R}_+ で稠密であることに注意すると、まず命題 2.3.1(b) と A の仮定から $(A[1/\varpi])_{\leq 1} = A_* = A$ であり、命題 2.3.1(5) と A の仮定から $A[1/\varpi]$ はスペクトラルになる。ゆえにとくに一様 Banach \mathcal{K} 代数になるので、 $(A[1/\varpi])^\circ = (A[1/\varpi])_{\leq 1} = A_* = A$ と A の仮定と合わせて確かに $A[1/\varpi]$ は perfectoid \mathcal{K} 代数になる。□

3.2.3 Examples

- (1) 基本的な例は $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ である。これは $\cup \mathcal{K}\langle T^{1/p^i} \rangle$ の完備化であり、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle = \operatorname{ucolim} \mathcal{K}[T^{1/p^i}]$ で、 $(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle)^\circ = \mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ となり、これは $\cup \mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^i} \rangle$ の ϖ 進完備化に等しい。より一般的に、perfectoid \mathcal{A} に対して、同じように完備化によって $\mathcal{A}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ を定義できる。組 $(\mathcal{A}\langle T^{1/p^\infty} \rangle, (T^{1/p^\infty}))$ は、perfectoid \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} と $g \in \mathcal{B}^\circ$ に関する整合的な p 冪乗根 (g^{1/p^∞}) の組 $(\mathcal{B}, (g^{1/p^\infty}))$ に関して普遍的である。
- (2) section 3.1.2(1) で定義した \widehat{K}_∞ に対して、perfectoid \widehat{K}_∞ 代数 \widehat{A}_∞ を次のように構成する。section 3.1.2(1) の記号を用いて

$$A_i := K_i^\circ[T_1^{1/p^i}, \dots, T_n^{1/p^i}] \otimes_{(K_i)^\circ} K_i \quad (3.10)$$

^{*63} F を \mathcal{A} 上に定義するために標数が $p > 0$ であることが必要。

と定義すると、これは係数が K_i であって有界な形式的冪級数からなる環であり、ノルムとして係数のノルムの上限を取るもの (Gauss ノルム) を与えると、Banach K_i 代数になる (さらに乗法的かつ位相が (Huber ring の意味での) ϖ 進位相と一致する)。 $i \in \mathbb{Z}^+$ を動かすことで一様 Banach K_0 代数からなる帰納系を為し、それらの間の射 (transition map) は isometric になっている。

section 3.1.2 の $K_i^\circ = W(k)[\zeta_{p^i}]$ とノルムの定義から $A := A_0^\circ = W(k)[[T_1, \dots, T_n]]$ となり、任意の $i \geq 1$ で $A_i^\circ = K_i^\circ[[T_1^{1/p^i}, \dots, T_n^{1/p^i}]]$ となり、これらは次元 $n+1$ の完備 Noether 正則局所環になる。 A_i° の p を含むただ一つの素イデアルは $\zeta_{p^i} - 1$ によって生成されるものである。さらに Frobenius 射によって $A_i^\circ/p \cong (A_{i+1}^\circ)^p/p$ という同型がある。

$A_\infty := \varinjlim A_i$ の完備化 $\widehat{A}_\infty := \text{ucolim } A_i$ は perfectoid \widehat{K}_∞ 代数になり、この中の有界な元は $(\widehat{K}_\infty)^\circ[[T_1^{1/p^\infty}, \dots, T_n^{1/p^\infty}]]$ に含まれる ($\sum_{n \geq 0} \varpi_{1/p^n} T^n$ は \widehat{A}_∞ に含まれないので一致はしない)。実際、次の標準的な同型

$$(\widehat{A}_\infty)^\circ \cong W(k[[T_1^{1/p^\infty}, \dots, T_n^{1/p^\infty}]]) \widehat{\otimes}_{W(k)} (\widehat{K}_\infty)^\circ \quad (3.11)$$

が得られる。これは、 p 進完備かつ p -torsion free な $W(k)$ 加群の間の標準的な射

$$W(k[[T_1^{1/p^\infty}, \dots, T_n^{1/p^\infty}]]) \widehat{\otimes}_{W(k)} (\widehat{K}_\infty)^\circ \rightarrow (\widehat{A}_\infty)^\circ \quad (3.12)$$

であって、 p による剰余で同型になるものがとれることからわかる。

3.3 Basculement

3.3.1

\mathcal{K} の標数が 0 であるとする。[Sch] Lem.3.4 の通り、乗法的写像

$$\varprojlim_{x \mapsto x^p} \mathcal{K}^\circ \longrightarrow \varprojlim_F \mathcal{K}^\circ / \varpi \quad (3.13)$$

$$(x_i) \longmapsto (\overline{x_i}) \quad (3.14)$$

は同相写像になり、この全単射を通じて、乗法的連続写像

$$\# : \varprojlim_F \mathcal{K}^\circ / \varpi \longrightarrow \mathcal{K}^\circ \quad (3.15)$$

$$x = (\overline{x_i}) \longmapsto \#(x) := \lim_{i \rightarrow \infty} x_i^{p^i} \quad (3.16)$$

が得られる。とくに、ある $\varpi^b \in \varprojlim_F \mathcal{K}^\circ / \varpi$ であって $|\#(\varpi^b)| = |\varpi|$ となるものが存在する ([Sch] Lem.3.4(ii))。とくに (3.14) と合わせて ϖ の整合的な p 冪乗根 $(\varpi^{1/p^n}) \subset \mathcal{K}^\circ$ が存在する (とくに $\varpi_{1/p}$ として $\varpi^{1/p}$ が取れる)。 $\mathcal{K}^{b^\circ} := \varprojlim_F \mathcal{K}^\circ / \varpi$ とする。すると、

$$\mathcal{K}^b := \left(\varprojlim_F \mathcal{K}^\circ / \varpi \right) [1/\varpi^b] \quad (3.17)$$

と、 \mathcal{K}^{b° にノルムとして

$$|x^b| := |\#(x^b)| \quad (3.18)$$

を入れて命題 2.3.1(2) から得られるノルムを入れると、これは標数 p の perfectoid field になり、 \mathcal{K}^{b° はこの付値環になる (すなわち $\mathcal{K}^{b^\circ} = (\mathcal{K}^b)^\circ$ となる)。さらに $\# : \mathcal{K}^{b^\circ} \rightarrow \mathcal{K}^\circ$ は同型 $\mathcal{K}^{b^\circ}/\varpi^b \cong \mathcal{K}^\circ/\varpi$ を誘導する。

Remarque (in ArXiv ver)

逆に、与えられた標数 p の perfectoid field に対して、 \mathcal{K}^b がそれになるような標数 0 の perfectoid field \mathcal{K} を与える標準的な方法は無い ("Feobenius 同型射"を選んだとき、この \mathcal{K} は Fargue-Fontaine curve の次数 1 の点に対応している)。

3.3.2

\mathcal{A} を一様 Banach \mathcal{K} 代数とする (\mathcal{K} は perfectoid field として取っている)。乗法的写像 $\varprojlim_{x \mapsto x^p} \mathcal{A}^\circ \rightarrow \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi$ は同相写像になる。このことから乗法的連続写像

$$\# : \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi \longrightarrow \mathcal{A}^\circ \quad (3.19)$$

$$a = (\overline{a_i}) \longmapsto \#(a) := \lim_{i \rightarrow \infty} a_i^{p^i} \quad (3.20)$$

が定義できる。とくにこの $\#$ と標準的な全射 $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{A}^\circ / \varpi$ の合成は第一成分の射影 $(\overline{a_i}) \mapsto a_0$ に等しい。さらに $\varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi$ は自然に ϖ^b 進完備かつ完全な \mathcal{K}^b 代数になる。この上のノルムは

$$|a^b| := |\#(a^b)| \quad (3.21)$$

に他ならない。このことから、 \mathcal{A} の tilt(basculée) と呼ばれる perfectoid Banach \mathcal{K}^b 代数が

$$\mathcal{A}^b := \left(\varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi \right) [1/\varpi^b] \quad (3.22)$$

に命題 2.3.1(2) から得られるノルムを入れることで定義される。 \mathcal{K} のときと同様にして $\mathcal{A}^{b^\circ} := \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi$ とすると $\mathcal{A}^{b^\circ} = (\mathcal{A}^b)^\circ$ を満たす ([Mor] Prop.V.1.2.1(ii))。また、 $\#(\varpi^b) = \varpi$ と $\mathcal{A} = \mathcal{A}^\circ [1/\varpi]$ に注意すると、自然に乗法的写像 $\# : \mathcal{A}^b \rightarrow \mathcal{A}$ が構成できる。一様 Banach 代数の間の射の性質から、 $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ を誘導できることより、 $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^b$ は関手的である。すなわち、関手

$$b : \mathcal{K}\text{-uBan} \longrightarrow \mathcal{K}^b\text{-Perf} \quad (3.23)$$

$$\mathcal{A} \longmapsto \mathcal{A}^b \quad (3.24)$$

が得られる。誤解のない範囲において、定義域を制限したものも同様に $b : \mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}^b\text{-Perf}$ と表す。

一方で \mathcal{A} が一様であることから、(スペクトラル (半) ノルムで置き換えて) 命題 2.3.1(f) から、 $\mathcal{A}^\circ / \varpi$ 上の Frobeniusu 射の n 回合成 F^n の核は $\varpi^{1/p^n}(\mathcal{A}^\circ / \varpi)$ となる。このとき、(3.20) の後に述べたとおり、 $\# : \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ から環準同型 $\varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi \rightarrow \mathcal{A}^\circ / \varpi$ が誘導され、この核は $\varprojlim_F \varpi^{1/p^n}(\mathcal{A}^\circ / \varpi) = \varpi^b \varprojlim_F (\mathcal{A}^\circ / \varpi)$ になる ($\varpi^{1/p^n} a_n$ は a_n を決定しないが、 F によって移すことでわかる)。このことから次が従う。

命題 3.3.1. 一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} について \mathcal{A}^b は確かに perfectoid \mathcal{K}^b 代数であり、 $\# : \mathcal{A}^{b^\circ} \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ によって、単射準同型

$$\mathcal{A}^{b^\circ} / \varpi^b \hookrightarrow \mathcal{A}^\circ / \varpi \quad (3.25)$$

が得られる。これが同型であることと \mathcal{A} が perfectoid であることは同値。

証明. \mathcal{A}^b が perfectoid \mathcal{K}^b 代数であることは section 3.2.2(2) と $\mathcal{A}^{b\circ}$ の完全性から従う。 \mathcal{A} が perfectoid であれば $\mathcal{A}^\circ/\varpi \xrightarrow{F} \mathcal{A}^\circ/\varpi$ の全射性からわかる。逆に同型であれば全射性が定義域側の第一成分を見ればわかる。□

3.3.3 Exemple

- (1) $(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle)^b$ と $\mathcal{K}^b\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ は自然に同型になる ($\#$ で T 同士が移り合う)。
- (2) perfectoid \widehat{K}_∞^b 代数 A_∞^b が次のように定義される。section 3.1.2 と section 3.2.3(2) の記号を用いる。まず $\varpi^b := \zeta_{p^i} - 1 \in K_i^\circ$ を取る。すると、 $\widehat{K}_\infty^{b\circ} (= (\widehat{K}_\infty^b)^{b\circ})$ は $k[[\varpi^b]]$ の p -root closure の ϖ^b 進完備化と同一視され、 $\widehat{A}_\infty^{b\circ} (= (\widehat{A}_\infty^b)^{b\circ})$ は $k[[\varpi^b, T_1, \dots, T_n]]$ の p -root closure の ϖ^b 進完備化と同一視される (ϖ^b による剰余を取ることで示される)。 \widehat{A}_∞^b と $\widehat{A}_\infty^{b\circ}$ それぞれの T_i は $\#$ で移り合う。

3.3.4 Remarque

- (1) \mathcal{A} が perfectoid であるとき、 $\#(\mathcal{A}^{b\circ}) \subset \mathcal{A}^\circ$ が生成する \mathcal{K}° 加群 (代数) は \mathcal{A}° で稠密である。実際、 $A \subset \mathcal{A}^\circ$ をその生成された部分 \mathcal{K}° 加群の閉包とする。包含写像と標準的な全射と命題 3.3.1 から得られる可換図式

$$\begin{array}{ccccc} A := \overline{\#(\mathcal{A}^{b\circ})} & \hookrightarrow & \mathcal{A}^\circ & \twoheadrightarrow & \mathcal{A}^\circ/\varpi \\ \uparrow & & \uparrow \# & & \uparrow \cong \\ \#(\mathcal{A}^{b\circ}) & \xleftarrow{\#} & \mathcal{A}^{b\circ} & \twoheadrightarrow & \mathcal{A}^{b\circ}/\varpi^b \end{array}$$

を考えれば、 $A \rightarrow \mathcal{A}^\circ/\varpi$ は全射になる。ゆえに二つの ϖ 進完備な \mathcal{K}° 加群 A と \mathcal{A}° の間の包含写像 $A \hookrightarrow \mathcal{A}^\circ$ に対して中山の補題 (section 1.3) を用いれば、 $A = \mathcal{A}^\circ$ になる。

- (2) 一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} が整域ならば \mathcal{A}^b も整域になる。実際、 $a^b, b^b \in \mathcal{A}^b$ が $a^b b^b = 0$ となったとする。このとき $\#$ の乗法性から $\#(a^b)\#(b^b) = \#(a^b b^b) = 0 \in \mathcal{A}$ となるから、 \mathcal{A} が整域であることから $\#(a^b) = 0$ または $\#(b^b) = 0$ となる。(3.21) がノルムになっていることから、これは $a^b = 0$ または $b^b = 0$ に等しいので \mathcal{A}^b は整域になる。
- (3) \mathcal{A} のノルムが乗法的であるとする、 \mathcal{A}^b のノルムも乗法的になる。 \mathcal{A} が perfectoid であればこの逆も成り立つ。?実際、(1) からわかる。もしくは \mathcal{A}^b の一様性からスペクトラル (半) ノルムに取り替えて、これらがスペクトラルであるとする、 \mathcal{A}^b に関してはそのノルムも乗法性を持つため、 $\mathcal{A}^{b\circ}/\mathcal{A}^{b\circ\circ}$ は整域になる。 \mathcal{A} もスペクトラルであるとしてよく、 \mathcal{A} が perfectoid より [Mor] Rem.V.1.2.4 から同型 $\mathcal{A}^{b\circ}/\mathcal{A}^{b\circ\circ} \cong \mathcal{A}^\circ/\mathcal{A}^{\circ\circ}$ がある。section 2.2.1 の最後に書いてあることとスペクトラル性から \mathcal{A} は乗法的である。
- (4) \mathcal{A} の冪等元全体と \mathcal{A}°/ϖ の冪等元全体と \mathcal{A}^b の冪等元全体は互いに全単射で移り合う ($e = e^2 \in \mathcal{A} \mapsto \bar{e} \in \mathcal{A}^\circ/\varpi \mapsto e^b := (\dots, e, e) \in \mathcal{A}^{b\circ} \mapsto \#(e^b) = e \in \mathcal{A}$ と移り合う)。
- (5) perfectoid \mathcal{K} 代数の間の射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が isometric であることと、 $\varphi^b: \mathcal{A}^b \rightarrow \mathcal{B}^b$ が isometric であることは同値。実際、まず一様性からスペクトラルであるとしてよく、このとき isometric 性は $\varphi^\circ: \mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ の ϖ による剰余を取った後の射 $\bar{\varphi}: \mathcal{A}^\circ/\varpi \rightarrow \mathcal{B}^\circ/\varpi$ の単射性と同値であり (命題 2.3.1(2)(c))、命題 3.3.1 からこれは $\varphi^{b\circ}: \mathcal{A}^{b\circ} \rightarrow \mathcal{B}^{b\circ}$ の単射性と同値であり、同様にして $\varphi^b: \mathcal{A}^b \rightarrow \mathcal{B}^b$ が isometric であることと同値になる。

3.3.5

以下では cadre として $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ を取る。perfectoid の基礎的な定理を記載しておく ([Sch] Theo.5.2, Rem.5.18, Theo.3.7 および [Bha] Theo.6.2.5, Cor.6.2.6)。

定理 3.3.2. (1) tilting $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^\flat$ は $(\varpi, \varpi^\flat) \in \mathcal{K} \times \mathcal{K}^\flat$ のとり方によらずに perfectoid \mathcal{K} 代数の圏と perfectoid \mathcal{K}^\flat 代数の圏の間の圏同値を与える。
 (2) \mathcal{K} と \mathcal{K}^\flat それぞれの上の perfectoid について $(-)^{\circ}$ を作用させてからそれぞれ ϖ と ϖ^\flat で剰余を取ったものとも上の二つの同値な圏は圏同値になる。また、(almost の意味で) flat な $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 代数 \overline{A} であって、Frobenius 射によって同型 $(\overline{A}/\varpi_{1/p})^{[F]} = \overline{A}/\varpi_{1/p} \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi_{1/p}, \sigma} \mathcal{K}^\circ/\varpi \xrightarrow{\cong} \overline{A}$ を持つもの^{*64}とも圏同値になる。

[Fon] Theo.1.2, Theo.3.2 において J.-M. Fontaine は p 進 Hodge 理論でよく知られている構成によって直接この圏同値を示した。それは次のようなものである。まず、 \mathcal{K}° は $W(\mathcal{K}^{\flat\circ})$ の商になり、一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} の tilt \mathcal{A}^\flat に対して、記号 \sharp° と \sharp を

$$(\mathcal{A}^\flat)^{\sharp^\circ} := W(\mathcal{A}^{\flat\circ}) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})} \mathcal{K}^\circ \quad (3.26)$$

$$(\mathcal{A}^\flat)^\sharp := (\mathcal{A}^\flat)^{\sharp^\circ}[1/\varpi] \quad (3.27)$$

と定義すると、これは tilt 関手 $\flat: \mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}^\flat\text{-Perf}$ の準逆関手

$$\sharp: \mathcal{K}^\flat\text{-Perf} \longrightarrow \mathcal{K}\text{-Perf} \quad (3.28)$$

$$B \longmapsto (B)^\sharp := B^{\sharp^\circ}[1/\varpi] = (W(B) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})} \mathcal{K}^\circ)[1/\varpi] \quad (3.29)$$

を誘導する。これを untilt という。?ここで $(B^\sharp)^\circ = B^{\sharp^\circ}$ になる。さらに $(-)^{\circ}$ を取ったあとにそれぞれ ϖ と ϖ^\flat で剰余を取る関手の準逆関手として、?それぞれ

$$A \longmapsto \left(\varprojlim_F \overline{A} \right)^{\sharp^\circ} \quad (3.30)$$

$$A \longmapsto \varprojlim_F \overline{A} \quad (3.31)$$

が取れることから従う。

perfectoid \mathcal{A} を一つ固定すると、定理 3.3.2(1) の結果から tilt 関手が perfectoid \mathcal{A} 代数の圏と perfectoid \mathcal{A}^\flat 代数の圏の間の圏同値を与える。とくに section 3.2.3(1) で構成した $\mathcal{A} = \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ を取ることが多い。

3.3.6

そもそも section 3.3.2 で定義したように、任意の一様 Banach \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} に対して tilt によって、perfectoid \mathcal{K}^\flat 代数 \mathcal{A}^\flat と section 3.3.1 から \sharp によって単射 $\mathcal{A}^{\flat\circ}/\varpi \hookrightarrow \mathcal{A}/\varpi$ が関手的に取れた。ここで、次のような関手

^{*64} section 3.2.1(b) で定義された、[Sch] Def.5.1 で言うところの perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 代数のこと。

$$\natural := \sharp \circ \flat: \mathcal{K}\text{-uBan} \longrightarrow \mathcal{K}\text{-Perf} \quad (3.32)$$

$$\mathcal{A} \longmapsto \mathcal{A}^\natural = (\mathcal{A}^\flat)^\sharp = (\mathcal{A}^\flat)^{\sharp\circ} [1/\varpi] = (W(\mathcal{A}^{\flat\circ}) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})} \mathcal{K}^\circ) [1/\varpi] \quad (3.33)$$

が定義できる。また、 $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ に対して $\mathcal{A}^{\natural\circ} := (\mathcal{A}^\flat)^{\sharp\circ}$ と定義しておく。すると

$$(\mathcal{A}^\natural)^\circ = ((\mathcal{A}^\flat)^\sharp)^\circ = (\mathcal{A}^\flat)^{\sharp\circ} = \mathcal{A}^{\natural\circ} \quad (3.34)$$

となっている。

命題 3.3.3. (1) 関手 $\natural: \mathcal{K}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K}\text{-Perf}$ は包含関手 $\iota: \mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ の右随伴になる。さらに $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ はスペクトラル (半) ノルムに関して余単位射 $\iota(\mathcal{A}^\natural) = \mathcal{A}^\natural \rightarrow \mathcal{A}$ は isometric になり、これが同型射であることと \mathcal{A} が perfectoid であることは同値。

(2) 関手 $\flat: \mathcal{K}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K}^b\text{-Perf}$ は関手 $\iota \circ \sharp: \mathcal{K}^b\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ の右随伴になる。

圏論の言葉で言えば、(1) は $\mathcal{K}\text{-Perf}$ が $\mathcal{K}\text{-uBan}$ の coreflective な (充満) 部分圏であるということである (すなわち、包含関手が右随伴を持つ充満部分圏である)。

証明. (1) ?随伴性を示す。 $\mathcal{K}\text{-Perf}$ 上で \sharp が \flat の準逆関手になっていること ((3.29)) から $\natural \circ \iota = \sharp \circ \flat \circ \iota \cong \text{id}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}$ となる。 $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\text{-Perf}$ と $\mathcal{B} \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ について、

$$\text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{A}, \mathcal{B}^\natural) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}((\iota(\mathcal{A}))^\sharp, \mathcal{B}^\natural) = \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}((\mathcal{A}^\flat)^\sharp, (\mathcal{B}^\flat)^\sharp) \quad (3.35)$$

$$\cong \text{Hom}_{\mathcal{K}^b\text{-Perf}}(\mathcal{A}^\flat, \mathcal{B}^\flat) = \text{Hom}_{\mathcal{K}^b\text{-uBan}}(\mathcal{A}^\flat, \mathcal{B}^\flat) \cong \quad (3.36)$$

となる。ここで、一つ目の同型は $\natural \circ \iota \cong \text{id}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}$ から、二つ目と四つ目の等号はそれぞれの定義、三つ目の同型は $\sharp: \mathcal{K}^b\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-Perf}$ が圏同値であることからわかる。

余単位射 $\mathcal{A}^\natural \rightarrow \mathcal{A}$ が isometric であることを示す。まず $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ なのでスペクトラル (半) ノルムを入れることで $\mathcal{A}_{\leq 1} = \mathcal{A}^\circ$ となる。命題 2.3.1(2)(c) を $\mathcal{A}^{\natural\circ} \rightarrow \mathcal{A}^\circ$ に適用すれば $\mathcal{A}^{\natural\circ}/\varpi \rightarrow \mathcal{A}^\circ/\varpi$ の単射性を示せば isometric であることがわかる。ここで、 \mathcal{A}^\natural は perfectoid であることと、命題 3.3.1 から、

$$\mathcal{A}^{\natural\circ}/\varpi = (\mathcal{A}^\natural)^\circ/\varpi \cong ((\mathcal{A}^\flat)^\sharp)^\circ/\varpi^\flat = (\mathcal{A}^{\flat\sharp})^\circ/\varpi^\flat \cong (\mathcal{A}^\flat)^\circ/\varpi^\flat = \mathcal{A}^{\flat\circ}/\varpi^\flat \quad (3.37)$$

であり、命題 3.3.1 の射になっている $\mathcal{A}^{\natural\circ}/\varpi \cong \mathcal{A}^{\flat\circ}/\varpi^\flat \rightarrow \mathcal{A}^\circ/\varpi$ を考えればよいが、この単射性は命題 3.3.1 の単射性からわかる。

同型であれば $\mathcal{A}^\natural \in \mathcal{K}\text{-Perf}$ であることから \mathcal{A} も perfectoid になる。perfectoid であるときこれは同型になることも分かる ([Fon] Theo.1.2)。

(2) $\flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}} \circ \sharp \cong \text{id}_{\mathcal{K}^b\text{-Perf}}$ であることに注意すると、 $\flat \cong \flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}} \circ \sharp \circ \flat = \flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}} \circ \natural$ である。したがって、 $\mathcal{A} \in \mathcal{K}^b\text{-Perf}$ と $\mathcal{B} \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ について

$$\text{Hom}_{\mathcal{K}^b\text{-Perf}}(\mathcal{A}, \mathcal{B}^\flat) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}^b\text{-Perf}}(\mathcal{A}, (\mathcal{B}^\natural)^\flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}}) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{A}^\sharp, ((\mathcal{B}^\natural)^\flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}})^\sharp) \quad (3.38)$$

$$\cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{A}^\sharp, \mathcal{B}^\natural) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\iota(\mathcal{A}^\sharp), \mathcal{B}) \quad (3.39)$$

となる。ここで、一つ目と三つ目の同型は $\flat|_{\mathcal{K}\text{-Perf}} \circ \sharp \cong \text{id}_{\mathcal{K}^b\text{-Perf}}$ から、二つ目の同型は $\sharp: \mathcal{K}^b\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-Perf}$ が圏同値であることから、四つ目の同型は (1) の随伴性から従う。 \square

3.3.7

tilting の重要な応用として perfectoid の圏におけるテンソル積が挙げられる。

命題 3.3.4. \mathcal{K} を perfectoid field とし、 \mathcal{A} を perfectoid \mathcal{K} 代数とする。 \mathcal{B} と \mathcal{C} が perfectoid \mathcal{A} 代数であるとき、perfectoid \mathcal{K} 代数の push-out が存在し、これは一様 Banach \mathcal{K} 代数の push-out $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C}$ (section 2.2.5) と等しくなる。標準的な射^{*65}

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* \longrightarrow (\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})^\circ \quad (3.40)$$

は同型になる。とくに $\mathcal{A}, \mathcal{B}, \mathcal{C}$ がスペクトラルノルムを持っていたとすると $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C} = \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ となり、単位円板は $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_*$ となる。?とくに perfectoid の完備テンソル積は perfectoid になる。

証明. まず存在性を示す。補題 3.2.2 から圏同値で移した先で考えれば良いので $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ と $\mathcal{A}^\circ \rightarrow \mathcal{C}^\circ$ に関して push-out を持てば良い。 $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ がその push-out になることを示す。そのためにはこの \mathcal{K}° 代数が補題 3.2.2 の A の四つの条件をすべて満たすことを示せば良い。完備性は構成から明らかに満たされる。Frobeniusu 射 $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)/\varpi_{1/p} \rightarrow (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)/\varpi$ の全射性は \mathcal{B} と \mathcal{C} が perfectoid であることから従う。単射性は、まず命題 2.3.1(1) から $\mathcal{B}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ が ϖ 進 ($\varpi_{1/p}$ 進) 位相を持つから、

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)/\varpi \cong (\mathcal{B}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)/\varpi \cong \mathcal{B}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} (\mathcal{C}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} (\mathcal{A}^\circ/\varpi)) \cong \mathcal{B}^\circ \otimes_{\mathcal{A}^\circ} (\mathcal{C}^\circ/\varpi) \quad (3.41)$$

であり、?単射性が分かる。

? $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ = (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_*$ を示す。

$\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ の \mathcal{K}° 上の flat 性を示す。すなわち ϖ -torsion free であることを示せば良い。まず \mathcal{K} の標数が $p > 0$ のとき、? $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ が完全であることから分かる。 \mathcal{K} の標数が 0 のとき、定理 3.3.2(2) の圏同値から $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ -Perf に移した $(\mathcal{B}^\circ)^a \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi} (\mathcal{C}^\circ)^a/\varpi$ が $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ 上 flat なら良い。 $(\mathcal{K}^\circ)^a/\varpi$ -Perf と $((\mathcal{K}^\flat)^\circ)^a/\varpi^\flat$ -Perf の間の tilt による圏同値 (定理 3.3.2(2)) と $((\mathcal{K}^\flat)^\circ)^a/\varpi^\flat$ -Perf と \mathcal{K}^\flat -Perf の間の圏同値 (定理 3.3.2(2)) から標数 $p > 0$ で考えれば良いことが分かり、すでに示したため、flat であることがわかった。

以上より、 $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ が補題 3.2.2 の条件を満たすから、? $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)[1/\varpi] = \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C}$ は $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ と $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{C}$ に関する push-out になる。

$\mathcal{A}, \mathcal{B}, \mathcal{C}$ がスペクトラルであるとする、上で示したように $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ が \mathcal{K}° 上 flat であり、すなわち ϖ -torsion free であるため、命題 2.3.1(e) から

$$(\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})_{\leq 1} = (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* \quad (3.42)$$

となる。ここで \mathcal{K} が perfectoid より、 $\varpi^{1/p^n} \in \mathcal{K}^{\circ\circ}$ が取れていることと、 $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ の \mathcal{K}° 上の flat 性から命題 2.3.1(2) の仮定を満たしているため命題 2.3.1(2)(b) の通り、

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* = \bigcap_{n \geq 0} \varpi^{-1/p^n} (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) \quad (3.43)$$

^{*65} $\mathcal{A}, \mathcal{B}, \mathcal{C}$ の一様性と命題 2.3.1(e) から得られる射 $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* \rightarrow ((\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)/(\varpi^\infty\text{-torsion}))_* = (\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})_{\leq 1} \hookrightarrow (\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C})^\circ$ のこと。

となっている。補題 2.5.1(1) の証明の最後の図式は $g = \varpi$ として取っても成り立つから、

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* = \bigcap_{n \geq 0} \varpi^{-1/p^n} (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) = \varprojlim_{\varpi^{1/p^m - 1/p^{m+1}}} (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) \quad (3.44)$$

となる。したがって補題 2.5.1(3) の証明を見れば今の場合でも成り立つため、

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* / \varpi \longrightarrow ((\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) / \varpi)_* \quad (3.45)$$

が単射になる。これは ϖ を $\varpi_{1/p}$ に変えても $\varpi_{1/p} \in \mathcal{K}^{\circ\circ} \setminus \{0\}$ なので成り立っている。上で示した Frobeniusu 射 $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) / \varpi_{1/p} \rightarrow (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) / \varpi$ の単射性と $(-)_* = \mathrm{Hom}_{\mathcal{K}^\circ}(\mathcal{K}^{\circ\circ}, -)$ の左完全性と、(3.45) から、可換図式

$$\begin{array}{ccc} ((\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) / \varpi_{1/p})_* & \xleftarrow{F} & ((\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ) / \varpi)_* \\ \uparrow & & \uparrow \\ (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* / \varpi_{1/p} & \xrightarrow{F} & (\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* / \varpi \end{array}$$

が取れて、三辺の単射性から下の水平方向の射も単射になる。ゆえに (3.42) と命題 2.3.1(5) の同値性から $\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ$ はスペクトラルになる。とくに一樣であるため $\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}}^u \mathcal{C} = \mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{C}$ となり、(3.42) から単位円板は $(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_*$ になる。□

以上命題 3.3.4 から、perfectoid 代数の圏は finite colimit を持ち、これは section 2.2.5 で定義した一樣 Banach 代数の圏で計算した push-out に等しい (さらに section 3.9 で詳しく扱う)。この操作は定理 3.3.2(1) の圏同値から tilt を取る操作と可換であることに注意する。

さらにこの命題 3.3.4 から関手 $-\widehat{\otimes}_{\mathcal{K}} \mathcal{A} : \mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{A}\text{-Perf}$ は忘却関手 $\mathcal{A}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-Perf}$ の左随伴になる。

3.4 Extensions étalefinies d'algèbres perfectoides

3.4.1

\mathcal{K} を perfectoid field とし、section 3.3.5 からここまでと同様に cadre として $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ を取る。perfectoid の二つ目の基礎的な定理を記載しておく ([Sch] Theo.7.9)。これは Faltings の "purity theorem" の一般化になっていて、さらにこれを後に??で一般化する。

定理 3.4.1. \mathcal{K} を perfectoid field とし、 \mathcal{A} が perfectoid \mathcal{K} 代数であるとする。

(1) 圏同値

$$\{\text{finite étale } (\mathcal{A}^\circ)^a \text{ 代数}\} \xrightarrow{\cong} \{\text{finite étale perfectoid } \mathcal{A} \text{ 代数}\} \xrightarrow{\cong} \{\text{finite étale } \mathcal{A} \text{ 代数}\} \quad (3.46)$$

がある。ここで、一つ目の関手は $1/\varpi$ を添加する関手であり、二つ目の関手はノルム (および位相) を忘れる忘却関手である。

(2) 上記 (1) の圏同値は tilt 関手と整合性的である。

とくに \mathcal{A} 上 finite étale な \mathcal{B} は perfectoid になる。ここで \mathcal{B} のスペクトラル半ノルムは唯一つの完備なスペクトラルノルムである (section 2.2.4)。さらに finite projective \mathcal{A} 加群 \mathcal{B} としての canonical topology と

同じ位相を定めるただ一つの完備かつスペクトラルなノルムでもある。とくにこの canonical topology の性質から \mathcal{B} から位相 \mathcal{A} 加群への \mathcal{A} 加群としての準同型はすべて連続になる ([He] Theo.1.17)。また、 \mathcal{A} を固定する \mathcal{B} の \mathcal{K} 自己準同型は連続であり、そのスペクトラルノルムに関して isometric になる。

3.4.2 Exemple prophylatique

定理 3.4.1(1) の "étale" を外すことはできないことが次の例から分かる。すなわち、perfectoid 代数上 perfectoid ではないものが存在する。まず section 3.2.3(2) の例 \hat{A}_∞ を $n = 1, p = 2$ として取る。とくに section 3.1.2(1) で定義した \hat{K}_∞ を取っていて、原始 2^2 乗根を取ればこれは -1 の二乗根でもあるので、 $\sqrt{-1} = \zeta_{2^2} \in K_2^\circ \subset \hat{K}_\infty$ が取れる。とくに \hat{K}_∞ は perfectoid field であり、その構成から $\varpi := 2 \in \hat{K}_\infty$ として取れる。

$g := T + 4 \in W(k)[[T_1^{1/2}]] = A_i^\circ \subset \hat{A}_\infty$ を取り、(乗法的ノルム) Banach \hat{K}_∞ 代数 $\hat{A}_\infty[\sqrt{g}]$ を取る。これは perfectoid にならない。? 実際、 $(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ の任意の元 $a_1 + a_2\sqrt{g}$ について、トレースとノルムを計算すると $2a_1, 2a_2, a_1^2 - a_2^2g \in (\hat{A}_\infty)^\circ$ となり、とくに最後の条件から $a_1(0) \in \mathcal{K}^\circ$ となる。ここで、

$$f := \frac{\sqrt{-1}+1}{2}(\sqrt{T+4} + T^{1/2}) = \frac{\sqrt{-1}+1}{2}T^{1/2} + \frac{\sqrt{-1}+1}{2}g \in \hat{A}_\infty[\sqrt{g}] \quad (3.47)$$

を取る。二乗を計算すると、

$$f^2 = \frac{(\sqrt{-1}+1)^2}{4}(T+4 - T - \sqrt{T+4}T^{1/2}) = \frac{\sqrt{-1}}{2}(4 - \sqrt{T+4}T^{1/2}) = 2\sqrt{-1} - \frac{\sqrt{-1}}{2}T^{1/2}\sqrt{T+4} \quad (3.48)$$

であり、 $\sqrt{-1}, \sqrt{T+4} = g \in (\hat{A}_\infty)^\circ$ とノルムの乗法性より $|f|^2 = |f^2| \leq \max\{|2\sqrt{-1}|, |\sqrt{-1}/2||T^{1/2}||g|\} \leq 1$ から $f \in (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ が分かる。ここで f は $(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ の 2 による剰余を取った $(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ / 2(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ において二乗根を持たないことが示される。実際、もし $e = a_1 + a_2\sqrt{g} \in (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ が $e^2 - f \in 2(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ \subset (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ を満たしたとすると、

$$e^2 - f = (a_1 + a_2\sqrt{g})^2 - \left(\frac{\sqrt{-1}+1}{2}T^{1/2} + \frac{\sqrt{-1}+1}{2}g \right) \quad (3.49)$$

$$= \left(a_1^2 + a_2^2g - \frac{\sqrt{-1}+1}{2}T^{1/2} \right) + \left(2a_1a_2 - \frac{\sqrt{-1}+1}{2} \right) \sqrt{g} \in (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ \quad (3.50)$$

よって、最初に述べたことからその \sqrt{g} の係数について $2a_1a_2 - (\sqrt{-1}+1)/2 \in (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ となる。? $|a_1(0)a_2(0)| = 2^{-3/2}$ となるが、これは $a_1(0), 2a_2(0) \in \mathcal{K}^\circ$ に矛盾する。よって $f \in (\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ を取ることによって $(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ / 2(\hat{A}_\infty[\sqrt{g}])^\circ$ の $p = 2$ での Frobenius 射が全射で無いことが分かるため、 $\hat{A}_\infty[\sqrt{g}]$ は perfectoid にならない。

正標数の場合は section 2.4.2(1) が同様にして反例になる。

3.4.3

定理 3.4.1(1) で考えている関手はすべて忠実充満になっていることに注意する。実際、一つ目の $1/\varpi$ を添加する関手の忠実充満性は連続性と合わせて明らかであり、二つ目の忘却関手については、定理 3.4.1 の後に述べた通り finite projective \mathcal{A} 加群としての canonical topology と一致しているため、すべての \mathcal{A} 代数としての準同型が連続になるから忠実充満関手である。

したがって定理 3.4.1 の証明には本質的全射性のみを示せば良い。まず一つ目の圏同値については次の命題を用いる。

命題 3.4.2. (1) \mathcal{A} が perfectoid \mathcal{K} 代数とすると、任意の finite étale $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 代数 B は $1/\varpi$ を添加することで perfectoid \mathcal{A} 代数 B を与え、これは B にスペクトラル (半) ノルムを与えたとき関手的になり、 $(B^\circ)^a \cong B$ となる。

(2) 逆に B が finite étale perfectoid \mathcal{A} 代数 (もしくは群 G に関して (通常)Galois な perfectoid \mathcal{A} 代数) であるとする、 $(B^\circ)^a$ は finite étale $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 代数 (もしくは群 G に関して (almost の)Galois な $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 代数) になる。

単純な Galois に関する議論は Robba 環を用いる議論に置き換えることも出来る ([KL])。

証明. (1) section 1.8 の定義から、 B は $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 上 finite projective であり、 \mathcal{A}° が ϖ 進完備より、補題 1.7.1 から B も ϖ 進完備である。finite étale の定義から $(\mathcal{A}^\circ)^a \rightarrow B$ はとくに flat である。さらに \mathcal{A}° は ϖ -torsion free であるから \mathcal{K}° 上 flat なので B は $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 上 flat である。また、section 1.8 の通り $(\mathcal{A}^\circ)^a \rightarrow B$ は weakly étale であり、 $(\mathcal{A}^\circ)^a \rightarrow (\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi$ によって base change した $(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi \rightarrow B/\varpi$ は [GR] Lem.3.1.2(i) から weakly étale になる。これは \mathbb{F}_p 上の cadre $(\mathcal{K}^\circ/\varpi, \mathcal{K}^{\circ\circ}/\varpi)$ に関する almost algebra であるから [GR] 3.5.6 のように $\mathcal{K}^\circ/\varpi \xrightarrow{F} \mathcal{K}^\circ/\varpi \rightarrow (\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi$ によって $(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi$ を \mathcal{K}°/ϖ 代数とみなしたものを $F^*((\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi)$ と表す^{*66}と、[GR] Theo.3.5.13(ii) より次の図式

$$\begin{array}{ccc} (\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi & \longrightarrow & B/\varpi \\ \downarrow F & & \downarrow F \\ F^*((\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi) & \longrightarrow & F^*(B/\varpi) \end{array}$$

は cocartesian になる。すなわち、 $F^*(B/\varpi) \cong B/\varpi \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi, F} F^*((\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi) = B/\varpi \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi, F} ((\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi)$ となる。ここで、 \mathcal{A} が perfectoid \mathcal{K} 代数なので、section 3.2.1(5) から cadre $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ に関する almost isomorphism $\mathcal{A}^\circ/\varpi \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi, F} \mathcal{K}^\circ/\varpi \xrightarrow{\cong} \mathcal{A}^\circ/\varpi$ が取れる。以上より、almost isomorphism

$$B/\varpi_{1/p} \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi_{1/p}, \sigma} \mathcal{K}^\circ/\varpi = B/\varpi \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi, F} \mathcal{K}^\circ/\varpi \cong B/\varpi \otimes_{\mathcal{A}^\circ/\varpi} (\mathcal{A}^\circ/\varpi \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi, F} \mathcal{K}^\circ/\varpi) \quad (3.51)$$

$$\cong B/\varpi \otimes_{\mathcal{A}^\circ/\varpi, F} \mathcal{A}^\circ/\varpi \quad (3.52)$$

$$\cong F^*(B/\varpi) \quad (3.53)$$

が得られる (\mathcal{A}° と \mathcal{K}° につけるべき $(-)^a$ は省略している)。ここで、三つ目の同型は \mathcal{A} に関する F によって誘導される同型を用いているため、 $\otimes_{\mathcal{A}^\circ/\varpi, F}$ で取れる。したがって、Frobenius 射

$$B/\varpi_{1/p} \otimes_{\mathcal{K}^\circ/\varpi_{1/p}, \sigma} \mathcal{K}^\circ/\varpi \longrightarrow B/\varpi \quad (3.54)$$

$$b \otimes x \longmapsto xb^p \quad (3.55)$$

は $(\mathcal{K}^\circ)^a$ -Alg において) 同型になる。以上のことから、finite étale $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 代数 B は perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数となる (section 3.2.1(a))。ここで、 $B/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} B/\varpi$ は almost isomorphism になる。 B が $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 上 flat かつ ϖ 進完備であり、それぞれ [Sch] Lem.5.3(i)(iv) から B_* が \mathcal{K}° 上 flat かつ ϖ 進完備にな

^{*66} section 3.2.1(5) の記法に注意する。

る。さらに $B/\varpi_{1/p} \xrightarrow{F} B/\varpi$ が almost isomorphism であることから $(B/\varpi_{1/p})_* \xrightarrow{F} (B/\varpi)_*$ は同型になる。ここで [Sch] Lem.5.3(iii) と section 1.2 の最後のところから $B_* \rightarrow (B/\varpi)_*$ が almost surjective であることを合わせて $B_*/\varpi_{1/p} \xrightarrow{F} B_*/\varpi$ が全単射になる。よってこの B_* に補題 3.2.2 を適用すれば $\mathcal{B} := B_*[1/\varpi]$ は perfectoid \mathcal{K} 代数になり、 $\mathcal{B}^\circ = (B_*)_* = B_*$ となる。^{*67}すると、 B を \mathcal{A}° 代数とみなせば $\mathcal{B} = B_*[1/\varpi] = B[1/\varpi]$ であり、 $(\mathcal{B}^\circ)^a = (B_*)^a \cong B$ である。

(2) Galois の場合について。 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が通常の環に関する群 G に関する Galois であることから、 $\mathcal{A} = \mathcal{B}^G$ であるのでとくに $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{B}$ という拡大になっていて、(1.10) のように取った

$$\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{B} \longrightarrow \prod_{\gamma \in G} \mathcal{B} \quad (3.56)$$

$$b \otimes b' \longmapsto (\gamma(b)b')_{\gamma \in G} \quad (3.57)$$

が同型射になる。ここで、両辺を完備化した後 $(-)^{\circ}$ を取ると、命題 3.3.4 から、

$$(\mathcal{B}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}^\circ} \mathcal{C}^\circ)_* \xrightarrow{\cong} (\mathcal{B} \widehat{\otimes}_{\mathcal{A}} \mathcal{B})^\circ \xrightarrow{\cong} \left(\prod_{\gamma \in G} \mathcal{B} \right)^\circ = \prod_{\gamma \in G} \mathcal{B}^\circ \quad (3.58)$$

となり、 $(-)^a$ の完全性から、

$$(\mathcal{B}^\circ)^a \widehat{\otimes}_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{C}^\circ)^a \cong \prod_{\gamma \in G} (\mathcal{B}^\circ)^a \quad (3.59)$$

という同型が取れる。この両辺に対して任意の正整数 m で ϖ^m による剰余を取る、すなわち $- \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m$ を取ると、左辺と右辺はそれぞれ

$$((\mathcal{B}^\circ)^a \widehat{\otimes}_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{B}^\circ)^a) / \varpi^m \cong ((\mathcal{B}^\circ)^a \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{B}^\circ)^a) / \varpi^m \cong ((\mathcal{B}^\circ)^a \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{B}^\circ)^a) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m \quad (3.60)$$

$$\cong ((\mathcal{B}^\circ)^a \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} ((\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m)) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m} (((\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} (\mathcal{B}^\circ)^a) \quad (3.61)$$

$$\cong ((\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m} ((\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m) \quad (3.62)$$

$$\left(\prod_{\gamma \in G} (\mathcal{B}^\circ)^a \right) / \varpi^m \cong \left(\prod_{\gamma \in G} (\mathcal{B}^\circ)^a \right) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} ((\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m) \quad (3.63)$$

$$\cong \prod_{\gamma \in G} ((\mathcal{B}^\circ)^a \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a} ((\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m)) \cong \prod_{\gamma \in G} (\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m \quad (3.64)$$

となっている。これによって $(\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m \rightarrow (\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m$ に対して、

$$((\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m) \otimes_{(\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi^m} ((\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m) \longrightarrow \prod_{\gamma \in G} (\mathcal{B}^\circ)^a / \varpi^m \quad (3.65)$$

$$b \otimes b' \longmapsto (\gamma(b)b')_{\gamma \in G} \quad (3.66)$$

は同型になる。また、 G で固定されるところを考えると、 $\mathcal{B}^G = \mathcal{A}$ であり、 $\mathcal{A}^\circ \hookrightarrow \mathcal{B}^\circ$ が一様 Banach \mathcal{K} 代数としての射 (とくに連続) であることから、 $\mathcal{B}^\circ \cap \mathcal{A} = \mathcal{A}^\circ$ ゆえ、

$$(\mathcal{B}^\circ)^G = \mathcal{B}^G \cap \mathcal{B}^\circ = \mathcal{A} \cap \mathcal{B}^\circ = \mathcal{A}^\circ \quad (3.67)$$

^{*67} B が perfectoid $(\mathcal{K}^\circ)^a$ 代数となることから、[Sch] Lem.5.6 を適用しても良い。そもそも補題 3.2.2 ではこの [Sch] Lem.5.6 を参照している。

と、 G の $(\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi^m$ への作用の仕方から

$$((\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi^m)^G = (((\mathcal{B}^\circ))^a)^G/\varpi^m = ((\mathcal{B}^\circ)^G)^a/\varpi^m \quad (3.68)$$

より、 $((\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi^m)^G = (\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi^m$ となる。さらに $\mathcal{A}^\circ \hookrightarrow \mathcal{B}^\circ$ の連続性から、 $\mathcal{A}^\circ \cap \varpi^m \mathcal{B}^\circ$ が \mathcal{A}° で開集合より、任意の $a \in \mathcal{A}^\circ \cap \varpi^m \mathcal{B}^\circ$ に対して、十分大きい $N(\geq m)$ で $a \in \varpi^N \mathcal{A}^\circ \subset \mathcal{A}^\circ \cap \varpi^m \mathcal{B}^\circ$ となるから、 $a \in$ 以上より、 $(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi^m \rightarrow (\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi^m$ は G に関して (単射とは限らないが) Galois になる。すると、命題 1.9.1(1) の証明に関して、ここで $A \rightarrow B$ の単射性は用いていないから、同様に証明することで $(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi^m \rightarrow (\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi^m$ は finite étale になる。ここで $\text{cadre}(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^{\circ\circ})$ は $\mathcal{K}^{\circ\circ} = \varpi^{1/p^\infty} \mathcal{K}^\circ$ となっていることから、section 1.8.2 より、 $(\mathcal{A}^\circ)^a \rightarrow (\mathcal{B}^\circ)^a$ が finite étale になる。

finite étale の場合について。 \mathcal{A} 上の \mathcal{B} が finite projective より、まず [SP] Lem.10.78.2 から、その rank *68 は有限かつ連続、有界である。そして [MSE1] から \mathcal{A} を有限直積に分解することで \mathcal{B} は constant rank r とすることが出来る。*69 とくに base change をしているだけなので \mathcal{B} の finite étale 性は保たれる。すると、 $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{B}$ が補題 1.9.2 の仮定を満たすから、 \mathfrak{S}_r に関する Galois 拡大 $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{C}$ であって、 \mathcal{B} を経由し、 $\mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{C}$ が \mathfrak{S}_{r-1} に関する Galois 拡大になるものが存在する。とくに $\mathcal{C}^{\mathfrak{S}_{r-1}} = \mathcal{B}$ となる。?さらに \mathcal{C} は perfectoid \mathcal{A} 代数にもなるため (section 3.4.4 で示す定理 3.4.1(1) の二つ目の圏同値を用いている)、 $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{C}$ と $\mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{C}$ に上で示したことを適用すれば、 $(\mathcal{A}^\circ)^a \hookrightarrow (\mathcal{C}^\circ)^a$ は \mathfrak{S}_r に関する Galois 拡大になり、 $(\mathcal{B}^\circ)^a \hookrightarrow (\mathcal{C}^\circ)^a$ は \mathfrak{S}_{r-1} に関する Galois 拡大になる。すると、命題 1.9.1(3) から $(\mathcal{A}^\circ)^a \hookrightarrow (\mathcal{B}^\circ)^a$ は階数 $|\mathfrak{S}_r/\mathfrak{S}_{r-1}| = r$ の finite étale 射になる。 \square

3.4.4

この命題 3.4.2 から定理 3.4.1(1) の二つ目の圏同値を示すことが出来る。すなわち、perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} に対して、命題 $(*)_{\mathcal{A}}$ を

$$(*)_{\mathcal{A}} : \Leftrightarrow \text{任意の finite étale } \mathcal{A} \text{ 代数 } \mathcal{B} \text{ は perfectoid } \mathcal{A} \text{ 代数になる。} \quad (3.69)$$

と定義し、これが成り立つことを示せば良い。とくに \mathcal{A} 上 finite étale な \mathcal{B} は定義から finite projective であり、このとき section 3.4.1 の最後に書いてあるように \mathcal{B} には canonical topology と同じ位相を定めるただ一つの完備かつスペクトラルなノルムを入れている。とくに \mathcal{B} は一様 Banach \mathcal{A} 代数である。

ここでは証明の概略を [KL] Theo.3.6.21 に従って述べる。ただしここではもはや almost mathematics は出てこないが、命題 3.4.2 の使用に際して、以降の記述が循環論法を引き起こしていないことを確認しなければならない。

まず \mathcal{K} の標数が $p > 0$ のとき、section 3.2.2(2) から Banach 環において perfectoid であることと完全であることは同値であり、?完全環上の finite étale 代数は完全であることから、 $(*)_{\mathcal{A}}$ が従う。

\mathcal{K} の標数が 0 であるとし、次のように証明される。

- (a) \mathcal{K} の任意の有限次拡大体 \mathcal{L} に対して系 3.1.2 から示される。
- (b) Gelfand transformation $\Gamma(\mathcal{A})$ (section 2.7.3) が perfectoid である。実際、命題 3.7.1 から $\Gamma(\mathcal{A})$ は perfectoid field $\mathcal{H}(x)$ の uniform product になっている。すると、このことと (a) から、任意の finite étale \mathcal{A} 代数 \mathcal{B} に対して、 $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \Gamma \mathcal{A}$ は perfectoid かつスペクトラルであることが分かる。

*68 [MSE2] のように rank は関数として定義されている。

*69 almost での finite projective に関しても [GR] Prop.4.3.27 のように同じことが言える

- (c) 命題 3.7.1 から $\Gamma(\mathcal{A}^b) \cong (\Gamma(\mathcal{A}))^b$ が分かる (詳しくは命題 3.7.1 で示される)。perfectoid field $\mathcal{H}(x)^b$ は \mathcal{A}^b の有理局所化 \mathcal{A}_α^b の uniform colimit であり、 $\mathcal{H}(x)$ は \mathcal{A}^b の有理局所化 \mathcal{A}_α の uniform colimit になる (section 3.6.4)。すると、左の垂直方向以外は圏同値からなる可換図式

$$\begin{array}{ccc} 2 - \varprojlim (\mathcal{A}_\alpha^b - \text{Alg}^{fin.et}) & \longrightarrow & \mathcal{H}(x)^b - \text{Alg}^{fin.et} \\ \downarrow & & \downarrow \# \\ 2 - \varprojlim (\mathcal{A}_\alpha - \text{Alg}^{fin.et}) & \longrightarrow & \mathcal{H}(x) - \text{Alg}^{fin.et} \end{array}$$

が得られる。とくに垂直方向の圏同値は $\#: \mathcal{H}(x)^b \rightarrow \mathcal{H}(x)$ によるものであり、水平方向の圏同値は “Elkik approximation” により与えられている ([Sch] Lem.7.5 と [GR] Prop.5.4.53)。ここで $\varprojlim \mathcal{A}_\alpha^\circ$ は henselian であり、その完備化は \mathcal{A}° になることを用いた。^{*70}

- (d) $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ のコンパクト性から、有理局所化 \mathcal{A}_α であって $\mathcal{B} \otimes_{\mathcal{A}} \mathcal{A}_\alpha$ が perfectoid になるようなものによる有限被覆 $\mathcal{M}(\mathcal{A})$ が取れる。 \mathcal{A}_α を \mathcal{A} に移し、perfectoid 代数の性質 ([KL] Theo.3.6.21, [Sch] Theo.7.9) を用いればよい。

定理 3.4.1(2) は定理 3.4.1(1) と、定理 3.3.2(2) と、section 1.8.2 の Grothendieck の “remarkable equivalence” を用いることで、

$$(\mathcal{A}^\circ)^a - \text{Alg}^{fin.et} \cong (\mathcal{A}^\circ)^a / \varpi - \text{Alg}^{fin.et} \cong ((\mathcal{A}^b)^\circ)^a - \text{Alg}^{fin.et} \cong ((\mathcal{A}^b)^\circ)^a - \text{Alg}^{fin.et} \quad (3.70)$$

という tilt と適合した圏同値が得られる。

3.4.5 Remarque

- (1) [Fon] の通り、perfectoid 代数は必ずしも perfectoid ではない p 進体 K 上に定義することが出来る。すなわち、一様 Banach K 代数 \mathcal{A} であって、Frobenius 射 F が \mathcal{A}°/p 上全射であって、 $\varpi_{1/p} \in \mathcal{A}$ であって $\varpi_{1/p}^p \equiv p \pmod{p^2 \mathcal{A}^\circ}$ となるものが存在するものと定義できる。この条件から、任意の $s \in \mathbb{Z}[1/p]$ に対してノルムが $|p|^s$ となるような $\varpi_s \in \mathcal{A}$ であって $\varpi_{-s} = \varpi_s^{-1}$ となるものが存在することが分かり、それゆえ、 $\mathcal{A}^{\circ\circ} = (\mathcal{A}^\circ)^\circ$ となる。すると、この定義において定理 3.3.2 と命題 3.3.4 の類似 (それぞれ [KL] 3.6.5, 3.6.11)^{*71} と、定理 3.4.1 の一般化 ([KL] 3.6.21, 5.5.9) に相当するものを示すことが出来る (almost での étale は $(\mathcal{A}^\circ, \mathcal{A}^{\circ\circ})$ を cadre と取ったとして解釈出来る)。命題 3.4.2 の Galois 拡大に関する議論を適用することで [KL] の Robba 環の議論を省くことが出来る。^{*72}
- (2) 任意の ramified^{*73} かつ混標数 $(0, p)$ の完備正則局所環 (R, \mathfrak{m}) で剰余体が k であるとき、 $f \in \mathfrak{m}^2$ かつ p で割り切れないものが取れて、 R は $W(k)[[T_{\leq n}]]/(p - f)$ と同型になる。unramified の場合 (例えば section 3.2.3(2)) と同様の議論によって、 $W(k)[[T_{\leq n}^{1/p^\infty}]]/(p - f)$ は上記 (1) の意味での perfectoid になる (この環は [Shi] における $\widehat{R_{p^\infty}}$ であり、これは [Shi] Prop.4.9 と完備化を考えれば perfectoid になっていることがわかる)。

?一方で、 \mathfrak{m} を生成しない正則列から p^{1/p^∞} 乗根を抜き出して (p 進完備化を取ると) 必ずしも perfectoid

^{*70} このために finite étale 代数の圏において対象と射が finite presentation であることを利用した。 $2 - \varprojlim$ や $2 - \varprojlim$ の一般論ではなく応用について述べられている文献は少なく、例えば [?] Appendix A を参照。

^{*71} [KL] における “一様” はここではスペクトラルのことであることを注意する。

^{*72} 後に Gabber-Ramero と Bhatt-Morrow-Scholze によって基礎体を持たない perfectoid の理論が構築された。

^{*73} 局所環 (R, \mathfrak{m}) が ramified であるとは $p \in \mathfrak{m}^2$ となることで、そうでないとき unramified という。

になるとは限らない。例えばこれは $R := \mathbb{Z}_2[[T]][\sqrt{T^2+4}]$ と $(2, T)$ という列を取ると、この例になっている (section 3.4.2)。

3.4.6

次は定理 3.4.1 からの最初の帰結である。

系 3.4.3. \mathcal{A} を perfectoid \mathcal{K} 代数とし、 \mathcal{B} をその上の finite étale 拡大とする。このとき \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral であり、さらに、 \mathcal{B}° は \mathcal{B} における \mathcal{A}° の (completely) integral closure になる。

証明. 定理 3.4.1(2) の証明と同様にして、 \mathcal{B} の rank は $\mathrm{Spec}(\mathcal{A})$ 上連続かつ有界であるため、 \mathcal{A} を有限直積に分解することで \mathcal{B} が constant rank r であるとしてよい。すると $b \in \mathcal{B}^\circ$ について、

$$\chi_b(T) := \sum_{i=0}^r (-1)^i \mathrm{Tr}_{(\wedge^i \mathcal{B})/\mathcal{A}} \left(\wedge^i \cdot b \right) T^{r-i} \quad (3.71)$$

は b の特性多項式になっている ([Mor] Lem.V.3.2.2 の証明)。とくに $\chi_b(b) = 0$ となる。さらに、定理 3.4.1(1) から $(\mathcal{B}^\circ)^a$ が $(\mathcal{A}^\circ)^a$ 上 finite étale になり、とくに finite projective になるから、?

$$\mathrm{Tr}_{(\wedge^i \mathcal{B})/\mathcal{A}} \left(\wedge^i \cdot b \right) = \mathrm{Tr}_{\wedge^i (\mathcal{B}^\circ)^a / (\mathcal{A}^\circ)^a} \left(\wedge^i \cdot b \right) \in ((\mathcal{A}^\circ)^a)_* = \mathcal{A}^\circ \quad (3.72)$$

となる。ここで最後の等号は \mathcal{A} が perfectoid であり、補題 3.2.2 が成り立つことから従う。したがって b は \mathcal{A}° 上 integral であるので \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral になる。

また、補題 2.4.1(1) から \mathcal{A}° の \mathcal{B} における completely integral closure は \mathcal{B}° に含まれているため、今示したことと合わせて \mathcal{A}° の (completely) integral closure は \mathcal{B}° に一致する。□

3.4.7 Remarque

\mathcal{A} が有限個からなる連結成分を持つとき、上記系 3.4.3 を次のようにして示すことも出来る。まず、 \mathcal{A} と \mathcal{B} を分解することで、すぐに \mathcal{A} と \mathcal{B} が連結であると仮定できる。このとき Galois closure \mathcal{C} が存在して ([?] Prop.5.3.9)、そのときの Galois 群を G と書くこととする。 \mathcal{C} は \mathcal{A} 上 Galois であるから、命題 3.4.2(2) のあとに (1) を適用すると、 \mathcal{C} は perfectoid \mathcal{A} 代数になる。 G は (\mathcal{C} が一様 Banach なので section 2.2.4 より) スペクトラルノルムに関して isometric に作用するため、補題 2.4.1(2) から \mathcal{C}° は \mathcal{A}° 上 integral になり、したがって $\mathcal{B}^\circ \subset \mathcal{C}^\circ$ から \mathcal{B}° は \mathcal{A}° 上 integral になる。

3.4.8

定理 3.4.1 について、(以降で用いることはしないが) 部分的な逆も成り立っている ([KL] Prop.3.6.22(a))。*74
すなわち、上が perfectoid な \mathcal{K} 上の finite étale 代数は perfectoid になる。

*74 [KL] Prop.3.6.22(a) では faithfully finite étale というものに関する主張であるが、これは [KL] Def.1.2.1 の最後にある通り faithfully flat かつ finite étale ということである。今の命題 3.4.4 においては部分代数を考えているから $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{B}$ が finite étale 拡大ゆえ、とくに integral extension であることから環のスペクトラムの間の全射性がわかるから faithfully finite étale になっているので良い。

命題 3.4.4. \mathcal{B} が perfectoid \mathcal{K} 代数とし、 \mathcal{A} が \mathcal{B} の中の finite étale \mathcal{K} 部分代数であるとする、 \mathcal{A} は perfectoid になる。

証明. 命題 3.4.2 の証明の finite étale の場合についてのよう、補題 1.9.2 を用いて $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{C}$ という \mathcal{C} であって、 $\mathcal{A} \hookrightarrow \mathcal{C}$ が $G := \mathfrak{S}_r$ に関する Galois 拡大であって、 $\mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{C}$ も Galois 拡大であるものが取れる。 $\mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{C}$ に対して命題 3.4.2(2) と定理 3.4.1(1) を用いれば \mathcal{C} も perfectoid \mathcal{K} 代数になる。ゆえに \mathcal{B} を \mathcal{C} で取り替えて、 $\mathcal{A} = \mathcal{B}^G \hookrightarrow \mathcal{B}$ が群 G に関する Galois 拡大である場合に帰着される。そしてこれは後に示す命題 3.8.1 の通り \mathcal{A} が perfectoid \mathcal{K} 代数であることがわかる。□

3.5 Monomorphismes (et recadrage)

3.5.1

\mathcal{K} -Perf において、連続かつ単射な \mathcal{K} 代数の準同型は mono 射になる。

逆は \mathcal{K} の標数が $p > 0$ であれば正しい。これは包含関手 $\mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ が左随伴を持つ (命題 3.2.1) からである。もしくは、section 2.5.1 と同様にして^{*75} $\mathcal{K}\text{-Perf}$ が自由対象を持つこと、すなわち、忘却関手 $\mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow (\text{Sets})$ の左随伴として (section 3.2.2(2) よりわかる perfectoid の完全性から)、 $S \mapsto \mathcal{K}\langle T_s^{1/p^\infty} \rangle_{s \in S}$ を持つことから従う。^{*76}

\mathcal{K} の標数が 0 のとき、以上の正標数のときの議論と定理 3.3.2(1) から、 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が mono 射であることは、その tilt $\varphi^\flat: \mathcal{A}^\flat \rightarrow \mathcal{B}^\flat$ が単射になることに等しいことが分かる。次の section 3.5.2 の例のように、そのような φ は一般には単射であるとは限らない。すなわち、 φ が単射であれば φ^\flat が単射になるが、その逆は正しくない。

3.5.2 Exemple prophylactique

\widehat{K}_∞ を cyclotomic perfectoid field (section 3.1.2) とし、任意の $i \geq 0$ に対して tilt によって、perfectoid であるような拡大 $\widehat{K}_\infty[p^{1/p^i}]$ を取り、 \mathcal{L} をそれらの和集合の (ϖ) 進完備化、すなわち

$$\mathcal{L} := \bigcup_{i \geq 0} \widehat{\widehat{K}_\infty[p^{1/p^i}]} \quad (3.73)$$

とするとこれはまた perfectoid になる。このとき、 \mathcal{K} -Perf の射

$$\varphi: \widehat{K}_\infty\langle T^{1/p^\infty} \rangle \longrightarrow \mathcal{L} \quad (3.74)$$

$$T^{1/p^i} \longmapsto p^{1/p^i} \quad (3.75)$$

とすると、 T と p が共に p に移るから単射ではなく、全射でもない。

tilt を取る。まず section 3.3.3(1) から $(\widehat{K}_\infty\langle T^{1/p^\infty} \rangle)^\flat = \widehat{K}_\infty^\flat\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ となり、section 3.2.3(1) から $(\widehat{K}_\infty\langle T^{1/p^\infty} \rangle)^\circ = \widehat{K}_\infty^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ である。すると、 φ から誘導される

^{*75} section 2.5.1 のときは任意標数であるが $\mathcal{K}\langle T_s^{1/p^\infty} \rangle_{s \in S}$ ではなく $\mathcal{K}\langle T_s \rangle_{s \in S}$ で取れていたことに注意する。

^{*76} $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が \mathcal{K} -Perf の mono 射であるとき、とくに随伴性から $\text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{A}) = \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{C}, \mathcal{A}) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{C}, \mathcal{B}) = \text{Hom}_{(\text{Sets})}(S, \mathcal{B})$ は単射である。ここで $\varphi(a) = \varphi(b)$ となったとき、 $S := \{*\}$ としてそれぞれ a と b に移すような集合間の写像 $S \rightarrow \mathcal{A}$ が取れる。ここに随伴性とその間の単射性を用いれば $a = b$ となるので φ は単射である。

$$\widehat{K}_\infty^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle / \varpi = \widehat{K}_\infty^\circ / \varpi \langle T^{1/p^\infty} \rangle \longrightarrow \mathcal{L}^\circ / \varpi = \bigcup_i (\widehat{K}_\infty^\circ / \varpi) [p^{1/p^i}] \quad (3.76)$$

$$T^{1/p^i} \longmapsto \varphi(T^{1/p^i}) = p^{1/p^i} \quad (3.77)$$

によって、 φ の tilt $\varphi^b: \widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{L}^b$ は \mathcal{L}^{b° への $p^b := (\dots, p^{1/p}, p) \in \mathcal{L}$ の代入写像になっている。ここで、 \mathcal{L}^b は分離拡大体 $(\widehat{K}_\infty[p^{1/p^i}])^b$ の和集合の完備化であり、 p^b はこれらのどれにも含まれていない。 φ^b の核は閉な完全イデアルになる。すると、Banach 整域 $\mathcal{B} := \widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle / \text{Ker}(\varphi^b)$ はスペクトラルかつ perfectoid になる (これは [KL] 3.1.6(d) から分かる。ただしこの文献では”一様”をスペクトラルの意味で用いていることに注意する)。この上のノルムは乗法的にならないため、 \mathcal{B} は体にはならない。また、包含 $\mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{L}^b$ は isometric になる。ゆえに perfectoid の間の射 $\widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{B} \hookrightarrow \mathcal{L}^b$ に untild (3.29) を作用させると、定理 3.3.2(1) から $\varphi: \widehat{K}_\infty \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{L}$ は $\widehat{K}_\infty \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{B}^\sharp$ を経由し、これは全射になる (section 3.6.2)。またそれに続く $\mathcal{B}^\sharp \hookrightarrow \mathcal{L}$ は isometric になっている。?これは φ は像が稠密であるが全射ではないことに矛盾する。

自然な包含写像 $\widehat{K}_\infty^b \langle T \rangle \hookrightarrow \widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ は同相写像 $D_\infty := \mathcal{M}(\widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle) \rightarrow D := \widehat{K}_\infty^b \langle T \rangle$ を誘導する。 D_∞ の点 x に関する剰余体 $\mathcal{H}(x)$ は x に対応する D の点における剰余体の complete perfection (命題 3.2.1) になっている。上で定義した \mathcal{B} は体 \mathcal{L}^b に含まれるから、そのスペクトラム $\mathcal{M}(\mathcal{B})$ は [Ber] Cor.7.4.2 から D_∞ の?上記の点に還元されない連結部分空間であり、それゆえ”次元” $d(x) \geq 1$ となる点 x_∞ を含む。 D の点は第2種、または第3種に対応している ([Ber] 1.4.4)。すると、ある $f \in \widehat{K}_\infty^b \langle T \rangle$ と $r \in (0, 1)$ が存在して、アフィノイド領域 D が $|f| \leq r$ を満たす $|-|$ によって定義され、これは点 x における Shilov edge の還元を持つ。 \mathcal{A} を誘導された (strict とは限らない) アフィノイド代数であったとすると、 $\mathcal{A} \rightarrow \mathcal{H}(x)$ は isometric になる。すると $\widehat{\mathcal{A}^{1/p^\infty}} \rightarrow \widehat{\mathcal{H}(x)^{1/p^\infty}} = \mathcal{H}(x_\infty)$ も isometric になる。さらに、 $\widehat{K}_\infty \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \widehat{\mathcal{A}^{1/p^\infty}}$ は単射になり (スカラーの拡大を行うと、これは”Weierstrass” localisation になる)、 $\widehat{K}_\infty^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{H}(x_\infty)$ も単射になる。これは \mathcal{B} を経由するから、その単射性より $\text{Ker}(\varphi^b) = 0$ となる。

3.5.3

補題 2.5.1 のようにして、一様 Banach $\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{B} で、 T が \mathcal{B} の非零因子 g に移ったとすると、単射 $\mathcal{B}^\circ \hookrightarrow ((\mathcal{B}^\circ)^a)_* = g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ が取れる。 \mathcal{B} が perfectoid であるとする。後の??で示されるが、補題 2.5.3 の同値な条件たちを \mathcal{B} は満たす (ゆえに $g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ$ は $\mathcal{B}[1/g]$ における \mathcal{B}° の completely integral closure になる)。これは必ずしも \mathcal{B} に一致しないことが、 $(\mathcal{B}, g) = (\mathcal{K} + T_1^{1/p^\infty} \mathcal{K} \langle T_1^{1/p^\infty}, T_2^{1/p^\infty} \rangle, g = T_1)$ を考えると分かる。次の問題は未だに解かれていない。

問題 3.5.1. $(g^{-1/p^\infty} \mathcal{B}^\circ)[1/\varpi]$ は perfectoid になるか。

?標数 $p > 0$ のときはこれは完全であることから明らかである。一方で標数 0 のとき、もし g を掛ける写像が isometric であったとしても、同型射 $(g^{-1/p^{i+1}} \mathcal{B}^\circ) / \varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} (g^{-1/p^i} \mathcal{B}^\circ) / \varpi$ を用いて直接示そうとしても $\varprojlim ((g^{-1/p^i} \mathcal{B}^\circ) / \varpi) \rightarrow \varprojlim ((g^{-1/p^i} \mathcal{B}^\circ) / \varpi_{1/p})$ が全射にはならなくなる可能性がある。同様に、同型 $\mathcal{B}^\circ \cong W(\mathcal{B}^{b^\circ}) \otimes_{W(\mathcal{K}^{b^\circ}(T^{1/p^\infty}))} \mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ を用いて示そうとしても、 $g^{-1/p^\infty}(-)$ とテンソル積の可換性の問題 (今の場合は ϖ による剰余) に阻まれる。

3.5.4

状況を整理するために、almost perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数という概念を定義する (ここまでと同様に \mathcal{K} は perfectoid field である)。以降では cadre として $(\mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle, T^{1/p^\infty}\mathcal{K}^\circ\mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle)$ を取り^{*77}(section 2.5.2)、section 2.3.6 で定義した一様 Banach \mathcal{A}^\wedge 代数の概念を用いる。

定義 3.5.2. \mathcal{B} を一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数とする。 \mathcal{B} (もしくは $\mathcal{B}^\wedge \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$) が almost perfectoid であるとは、 \mathcal{B}^\wedge が perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数と同型になることである。すなわち、ある perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{A}^{*78} が存在して $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ において $\mathcal{A}^\wedge \cong \mathcal{B}^\wedge$ となること。

$\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-Perf}$ によって perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数を対象として持つ $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ の充満部分圏を表し、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-aPerf}$ によって almost perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数を対象として持つ $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ の充満部分圏を表す。

補題 3.5.3. 命題 3.3.3(1) により与えられる、包含関手 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf} \hookrightarrow \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ の右随伴 $(-)^{\natural}$ は、包含関手 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-Perf} \hookrightarrow \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ の右随伴を誘導する。これも同様に \natural と表すこととする。また、包含関手 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-Perf} \hookrightarrow \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-aPerf}$ は圏同値であり、準逆関手はこの \natural によって与えられる。

とくに、単位射については $(-)^{\wedge} \circ (-)^{\natural} \cong \text{id}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}}$ が成り立ち、また、余単位射 $(-)^{\natural} \circ (-)^{\wedge} \rightarrow \text{id}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}}$ は各対象の間に almost isomorphism を誘導する。とくに $(-)^{\wedge} \circ i \circ (-)^{\natural} \cong j$ と $(-)^{\wedge} \circ \natural \cong ((-)^{\wedge} \circ \natural \circ (-)^{\natural}) \circ (-)^{\wedge}$ が成り立っている (命題 3.5.4(3) \implies (6) の証明で用いる)。

証明. 次の可換図式

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf} & \xrightarrow{i} & \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan} \\ \downarrow (-)^{\wedge} & & \downarrow (-)^{\wedge} \\ \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-Perf} & \xrightarrow{j} & \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan} \end{array}$$

を考える。 i と j はそれぞれ包含関手であり、 $(-)^{\wedge}$ は section 2.3.6 で定義した関手である。すると $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-uBan}$ から $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^\wedge\text{-Perf}$ への関手 (これが求める右随伴になる) として $(-)^{\wedge} \circ \natural \circ (-)^{\natural}$ が取れる。これは $(-)^{\wedge} \circ i \circ (-)^{\natural} \cong j$ の右随伴になる。

実際、section 2.3.6 から $(-)^{\natural}$ は $(-)^{\wedge}$ の右随伴であり、 $(-)^{\natural}$ は $(-)^{\wedge}$ の左随伴である。さらに命題 3.3.3(1) から \natural は包含関手 i の右随伴である。以上をまとめると、 i と j が包含関手であるから、それぞれ垂直方向の射が i と j と可換な四角形を与えるような次のような図式

^{*77} $(\mathcal{K}^\circ, \mathcal{K}^\circ\mathcal{K}^\circ)$ のときと異なり、 T^{1/p^∞} をとることで \mathcal{B}° 内の整合的な p 乗根の列 (g^{1/p^m}) を考えることが出来るようになった。

^{*78} perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} であって、整合的な p 乗根の列 $(g^{1/p^m}) \subset \mathcal{A}^\circ$ が取れるようなもののこと。とくに $T^{1/p^\infty} \mapsto g^{1/p^m}$ となっている。

$$\begin{array}{ccc}
& \xleftarrow[\top]{\natural} & \\
\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf} & \xrightarrow{i} & \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-uBan} \\
\begin{array}{c} \uparrow \\ (-)_{\natural} \dashv \end{array} \begin{array}{c} \downarrow \\ (-)^{\hat{a}} \dashv \end{array} \begin{array}{c} \uparrow \\ (-)_{\ast} \end{array} & & \begin{array}{c} \uparrow \\ (-)_{\natural} \dashv \end{array} \begin{array}{c} \downarrow \\ (-)^{\hat{a}} \dashv \end{array} \begin{array}{c} \uparrow \\ (-)_{\ast} \end{array} \\
\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf} & \xrightarrow{j} & \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}
\end{array}$$

が考えられる。よって、まず $(-)^{\hat{a}} \circ \natural \circ (-)_{\ast}: \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ が確かに関手になっている。

$(-)^{\hat{a}} \circ i \circ (-)_{\natural} \cong j$ を示す。 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ の対象は、ある $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf}$ によって $\mathcal{A}^{\hat{a}}$ と表せる。すると、上の図式の可換性から

$$(-)^{\hat{a}} \circ i \circ (-)_{\natural}(\mathcal{A}^{\hat{a}}) = (((\mathcal{A})_{\natural})^{\hat{a}})^{\hat{a}} \quad (3.78)$$

となっている。 $(-)^{\hat{a}} \dashv (-)_{\natural}$ であるから、単位射 $\mathcal{A} \rightarrow (\mathcal{A}^{\hat{a}})_{\natural}$ が取れる。ここで、今とっている cadre に注意すれば補題 2.3.5 より、これを $(-)^{\hat{a}}$ で移した先で同型射になることは、この単位射が almost isomorphism になることに等しい。ここで、[GR] Rem.2.2.28 の後に書いてあることから、 \mathcal{A} と $(\mathcal{A}^{\hat{a}})_{\natural}$ は almost isomorphism になる。そして、section 2.3.5 と section 2.3.6 における $(-)^{\hat{a}}$ の定義から、?almost isomorphism 性は崩れないため、 \mathcal{A} と $(\mathcal{A}^{\hat{a}})_{\natural}$ は almost isomorphism になる。ゆえに $\mathcal{A}^{\hat{a}} \cong ((\mathcal{A}^{\hat{a}})_{\natural})^{\hat{a}}$ は同型になるから、 $(-)^{\hat{a}} \circ (-)_{\natural} \cong \text{id}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}}$ となる。^{*79} とくに (3.78) から、間に i を挟んでもよいので $(-)^{\hat{a}} \circ i \circ (-)_{\natural} \cong j$ となる。

次に、上記の随伴性から、任意の $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ と $\mathcal{B} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}$ に対して、

$$\text{Hom}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}}(\mathcal{A}, (((\mathcal{B}_{\ast})^{\natural})^{\hat{a}})^{\hat{a}}) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf}}(\mathcal{A}_{\natural}, (\mathcal{B}_{\ast})^{\natural}) \quad (3.79)$$

$$\cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-uBan}}(i(\mathcal{A}_{\natural}), \mathcal{B}_{\ast}) \quad (3.80)$$

$$\cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}}((i(\mathcal{A}_{\natural}))^{\hat{a}}, \mathcal{B}) \quad (3.81)$$

$$\cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}}(j(\mathcal{A}), \mathcal{B}) \quad (3.82)$$

となるので随伴性が従う。

$(-)^{\hat{a}} \circ \natural \cong ((-)^{\hat{a}} \circ \natural \circ (-)_{\natural}) \circ (-)^{\hat{a}}$ を示す。上で述べたとおり $(-)^{\hat{a}} \circ (-)_{\natural}$ は almost isomorphism を誘導し、? \natural で almost isomorphism が保たれるから、再度補題 2.3.5 を用いることで、この関手の同型が分かる。

これを用いて圏同値を示す。混乱を生じさせないため、 $F := (-)^{\hat{a}} \circ i \circ (-)_{\natural}: \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-aPerf} \rightarrow \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ と書く。まず、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ の対象を上と同様の記号を用いて $\mathcal{A}^{\hat{a}}$ と表せる。すると、示した関手の同型から、

$$F(j(\mathcal{A}^{\hat{a}})) = F(\mathcal{A}^{\hat{a}}) = (\mathcal{A}^{\natural})^{\hat{a}} \quad (3.83)$$

であり、 \mathcal{A} が perfectoid であることから、命題 3.3.3(1) より、余単位射 $\mathcal{A}^{\natural} \rightarrow \mathcal{A}$ は (\mathcal{A} に関して関手的に) 同型であるから、 $(\mathcal{A}^{\natural})^{\hat{a}} \rightarrow \mathcal{A}^{\hat{a}}$ も同型になるから、 $F \circ j \cong \text{id}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}}$ となる。逆に、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-aPerf}$ の対象はある $\mathcal{B} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-uBan}$ によって $\mathcal{B}^{\hat{a}}$ と表せて、ある $\mathcal{A} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-Perf}$ によって $\mathcal{B}^{\hat{a}} \cong \mathcal{A}^{\hat{a}}$ となっている。この同型の定義から、cadre $(\mathcal{K}^{\circ}\langle T^{1/p^\infty} \rangle, T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathcal{K}^{\circ}\langle T^{1/p^\infty} \rangle)$ に対する同型 $(\mathcal{B}^{\circ})^{\hat{a}} \cong (\mathcal{A}^{\circ})^{\hat{a}}$ が取れる。すると、上記と同様にして命題 3.3.3(1) の余単位射に関して、 \mathcal{A} が perfectoid であることから、

^{*79} 逆の合成 $(-)^{\hat{a}} \circ (-)_{\natural}$ はあくまで $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-uBan}$ 上に almost isomorphism を誘導するだけなので、圏同値にはならない。

$$\begin{array}{ccc}
((\mathcal{B}^\natural)^\circ)^a & \longrightarrow & (\mathcal{B}^\circ)^a \\
\downarrow \cong & & \downarrow \cong \\
((\mathcal{A}^\natural)^\circ)^a & \xrightarrow{\cong} & (\mathcal{A}^\circ)^a
\end{array}$$

という可換図式が取れるから、これによって $j \circ F(\mathcal{B}^\natural) = (\mathcal{B}^\natural)^\circ \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ を考えれば $j \circ F \cong \text{id}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\widehat{a}}\text{-aPerf}}$ となるので、圏同値が得られた。 \square

命題 3.5.4. \mathcal{B} を一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数とする。このとき以下は同値。^{*80}

- (1) \mathcal{B} は almost perfectoid になる。
- (2) \mathcal{B}°/ϖ 上で F は almost surjective になる。
- (3) $\mathcal{B}^{\natural\circ} \hookrightarrow \mathcal{B}^\circ$ は almost isomorphism になる。
- (4) $\mathcal{B}^\natural \hookrightarrow \mathcal{B}$ は almost isomorphism になる。
- (5) ある perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{B}' と Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数の射 $\mathcal{B}' \rightarrow \mathcal{B}$ が存在して、これは almost isomorphism になる。
- (6) $(\mathcal{B}^\natural)_{\text{!!}} \in \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle\text{-uBan}$ は perfectoid になる。

証明. 次のように示していく。

$$\begin{array}{ccccc}
(5) & \implies & (1) & \implies & (2) \\
\uparrow & & \uparrow & & \downarrow \\
(4) & & (6) & \longleftarrow & (3)
\end{array}$$

(1) \implies (2) \mathcal{B} が almost perfectoid より、ある perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{A} が存在して $\mathcal{A}^\circ \cong \mathcal{B}^\circ$ となる。すなわち $(\mathcal{A}^\circ)^a \cong (\mathcal{B}^\circ)^a$ となるから、 $(-)^a$ の完全性より、

$$\begin{array}{ccc}
(\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi & \xrightarrow{F} & (\mathcal{B}^\circ)^a/\varpi \\
\downarrow \cong & & \downarrow \cong \\
(\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi & \xrightarrow{F} & (\mathcal{A}^\circ)^a/\varpi
\end{array}$$

という可換図式が取れて、 \mathcal{A} が perfectoid であることから section 3.2.1(3) より下の水平方向の F は almost surjective ゆえ、 \mathcal{B}°/ϖ 上で F は almost surjective になる。

(3) \implies (4) まず (3.34) から $\mathcal{B}^\natural = (\mathcal{B}^\natural)^\circ[1/\varpi] = \mathcal{B}^{\natural\circ}[1/\varpi]$ となっている。すると、 $\mathcal{B}^{\natural\circ} \hookrightarrow \mathcal{B}$ が almost isomorphism のとき、局所化の完全性から、 $1/\varpi$ を添加した後も almost isomorphism であるから、 $\mathcal{B}^\natural \hookrightarrow \mathcal{B}$ は almost isomorphism になる。

(4) \implies (5) \mathcal{B}^\natural は (3.33) のから perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数であるから、 $\mathcal{B}' := \mathcal{B}^\natural$ として取れば良い。

(6) \implies (1) perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 $(\mathcal{B}^\natural)_{\text{!!}}$ について、補題 3.5.3 の証明から、 $\mathcal{B}^\circ \cong ((\mathcal{B}^\natural)_{\text{!!}})^\circ$ となるので、定義 3.5.2 より \mathcal{B} は almost perfectoid になる。

^{*80} (3) と (4) の単射性は命題 3.3.3(1) からいつでも成り立つ。また、section 3.5.4 の最初にある通り、ここで出てくるすべての "almost" は cadre $(\mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle, T^{1/p^\infty}\mathcal{K}^\circ\mathcal{K}^\circ\langle T^{1/p^\infty} \rangle)$ に関するものである。

(2) \implies (3) footnote *80 で述べたとおり、 $\mathcal{B}^{\natural\circ} \hookrightarrow \mathcal{B}^\circ$ はすでに単射であるから、 $\mathcal{B}^{\natural\circ} \rightarrow \mathcal{B}^\circ$ が almost surjectiveであることを示せば良い。これらとともに cadre として取っている $(\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle)^a$ 加群とみなすことで、中山の補題 (section 1.3) から、 ϖ で剰余を取った射 $\mathcal{B}^{\natural\circ}/\varpi \rightarrow \mathcal{B}^\circ/\varpi$ が almost surjective になることを示せば良い。(3.37) の同型から、 $\mathcal{B}^{\natural\circ}/\varpi \cong \mathcal{B}^{\flat\circ}/\varpi^b \rightarrow \mathcal{B}^\circ/\varpi$ が almost surjective であることを示せば良い。^{*81} $\mathfrak{L} := \mathcal{B}^\circ/\varpi$ とおくと、 $\mathcal{B}^{\flat\circ} = \varprojlim_F \mathfrak{L}$ となっている。 $\varprojlim_F \mathfrak{L} \rightarrow \mathfrak{L}$ が almost surjective になることを示せば良い。ここで、(2) の仮定は $\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle / \varpi$ 代数の射

$$\varphi: \mathfrak{L} \otimes_{\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle / \varpi, F} (\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle / \varpi) \longrightarrow \mathfrak{L} \quad (3.84)$$

$$b \otimes x \longmapsto xb^p \quad (3.85)$$

が almost surjective であることに等しい。このことから (2.89) と同様に考えて、

$$T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L} = \bigcup_{m \geq 0} \left(T^{1/p^m} \varpi^{1/p^m} \mathfrak{L} \right) \quad (3.86)$$

となり、この上の Frobenius 射 $F: T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L} \rightarrow T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L}$ は (通常の) 全射になる。実際、この中の任意の元は、ある正整数 n と $b \in \mathfrak{L}$ で $T^{1/p^n} \varpi^{1/p^n} b$ と表せる。ここで、 $b \in \mathfrak{L}$ に対して $F: \mathfrak{L} \rightarrow \mathfrak{L}$ が almost surjective であるから、 $T^{(p-1)/p^{n+1}} \varpi^{(p-1)/p^{n+1}} b \in \text{Im}(F)$ であるため、ある $\beta \in \mathfrak{L}$ で

$$T^{\frac{p-1}{p^{n+1}}} \varpi^{\frac{p-1}{p^{n+1}}} b = \beta^p \quad (3.87)$$

となる。両辺に $T^{1/p^{n+1}} \varpi^{1/p^{n+1}}$ を掛けると

$$T^{\frac{1}{p^n}} \varpi^{\frac{1}{p^n}} b = T^{\frac{1}{p^{n+1}}} \varpi^{\frac{1}{p^{n+1}}} \beta^p = \left(T^{1/p^{n+2}} \varpi^{\frac{1}{p^{n+2}}} \beta \right)^p \in \text{Im}(F) \quad (3.88)$$

ゆえ、確かに (通常の) 全射になる。 \mathbb{F}_p 線型空間に関する Mittag-Leffler の補題から、第一成分の射影 $\varprojlim_F (T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L}) \rightarrow T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L}$ は全射になる。任意の $b \in \mathfrak{L}$ と任意の正整数 n で $T^{1/p^n} \varpi^{1/p^n} b \in T^{1/p^\infty} \varpi^{1/p^\infty} \mathfrak{L}$ より、ある $\beta = (\beta_k)_{k=0}^\infty \in \varprojlim_F (T^{1/p^\infty} \mathcal{K}^{\circ\circ} \mathfrak{L})$ であって $\beta_1^p = \beta_0 = T^{1/p^n} \varpi^{1/p^n} b$ となるものが存在する。とくに $\beta_1^p \in T^{1/p^\infty} \varpi^{1/p^\infty} \mathfrak{L} \subset \mathfrak{L}$ ゆえ、 $T^{1/p^n} \varpi^{1/p^n} b \in \text{Im}(F: \mathfrak{L} \rightarrow \mathfrak{L})$ となる。ゆえに (2.89) から $\varprojlim_F \mathfrak{L} \rightarrow \mathfrak{L}$ は almost surjective になる。

(5) \implies (1) perfectoid $\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{B}' の almost isomorphism $\mathcal{B}' \rightarrow \mathcal{B}$ が取れている。補題 2.3.5 から $(\mathcal{B}')^{\hat{a}} \rightarrow \mathcal{B}^{\hat{a}}$ は同型になるので \mathcal{B} は almost perfectoid になる。

(3) \implies (6) 上で示したように (3) から (4) が従うから、 $\mathcal{B}^{\natural} \rightarrow \mathcal{B}$ は almost isomorphism になっている。補題 2.3.5 から $(\mathcal{B}^{\natural})^{\hat{a}} \cong \mathcal{B}^{\hat{a}}$ となるため、 $((\mathcal{B}^{\natural})^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}} \cong (\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ であるから、 \mathcal{B}^{\natural} に対して (6) が示されれば良い。したがって、 \mathcal{B}^{\natural} は perfectoid であったため、 \mathcal{B} を最初から perfectoid $\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数としてよい。補題 3.5.3 で出てきた関手をさせると、包含関手で移しているところを省略して

$$(((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural})^{\hat{a}} \cong (((((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural})^{\hat{a}} = (((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\hat{a}})^{\natural} \cong (\mathcal{B}^{\hat{a}})^{\natural} \quad (3.89)$$

となっている。ここで、一つ目の同型は補題 3.5.3 の $(-)^{\hat{a}} \circ \natural \cong ((-)^{\hat{a}} \circ \natural \circ (-)_{\hat{\Pi}}) \circ (-)^{\hat{a}}$ から、二つ目の等号は補題 3.5.3 で定義した $\natural: \mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-Perf}$ の定義から、三つ目の同型は補題 3.5.3 の $(-)^{\hat{a}} \circ (-)_{\hat{\Pi}} \cong \text{id}_{\mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle^{\hat{a}}\text{-uBan}}$ からわかる。次に、随伴 $(-)_{\hat{\Pi}} \dashv (-)^{\hat{a}}$ に関する余単位射と命題 3.3.3(1) から得られる射の合成

$$((((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural})^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}} \longrightarrow ((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\hat{a}} \longrightarrow (\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}} \quad (3.90)$$

^{*81} このことは命題 3.3.1 の almost 版とみなすことが出来る。

を取ると、第一項は

$$(((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural})^{\hat{a}} \cong ((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural} \cong ((\mathcal{B}^{\natural})^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}} \cong (\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}} \quad (3.91)$$

となって (3.90) の第三項と同型になっている。ここで一つ目の同型は (3.89) から、二つ目の同型は補題 3.5.3 の $(-)^{\hat{a}} \circ \natural \cong ((-)^{\hat{a}} \circ \natural \circ (-)_{\hat{\Pi}}) \circ (-)^{\hat{a}} = \natural \circ (-)^{\hat{a}}$ から、三つ目の同型は \mathcal{B} が perfectoid であって命題 3.3.3(1) よりわかる。したがって、(3.90) は同型になるため、右側の $((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural} \rightarrow (\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ は全射であり、命題 3.3.3(1) を $(\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ に適用すれば、これは単射であるから、 $((\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}})^{\natural} \rightarrow (\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ は同型になる。よって命題 3.3.3(1) より $(\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ は perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle$ 代数になっている。□

3.5.5 Remarque

- (1) almost perfectoid \mathcal{B} に対して T の行き先が g であり、非零因子であるとする。 $\mathcal{B}^{\hat{a}}$ の $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle^{\hat{a}}$ -uBan における同型類において、始対象は perfectoid 代数 $(\mathcal{B}^{\hat{a}})_{\hat{\Pi}}$ であり、終対象は perfectoid 代数 $((g^{-1/p^{\infty}} \mathcal{B}^{\circ})[1/\varpi])^{\natural}$ である (もし問題 3.5.1 が正しければこれは $(\mathcal{B}^{\hat{a}})_{*}$ になる)。
- (2) 「perfectoid ならば almost perfectoid」は成り立つ。一方、 g が非零因子であったとしても、この逆は一般には成り立たない。実際、 $\mathcal{K}\langle T_1^{1/p^{\infty}}, T_2^{1/p^{\infty}} \rangle$ の部分 $\mathcal{K}\langle T_1^{1/p^{\infty}} \rangle$ 代数 \mathcal{B} を

$$\mathcal{B} := \mathcal{K} + \overline{T_1^{1/p^{\infty}} \mathcal{K}\langle T_1^{1/p^{\infty}}, T_2^{1/p^{\infty}} \rangle} + \overline{T_2 \mathcal{K}\langle T_1^{1/p^{\infty}}, T_2^{1/p^{\infty}} \rangle} \quad (3.92)$$

として定義すると、almost perfectoid だが perfectoid にはならない。?これは $T_1^{1/p^{\infty}} \mathcal{B}$ による剰余が完全にならないからである。

- (3) 命題 3.5.4(5) の条件があり、証明で用いた補題 2.3.5 は “almost morphism” ではない通常の意味での射を扱っているにも関わらず、perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle$ 代数と almost isomorphism な一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle$ 代数が almost perfectoid になることは?明らかではない。

補題 3.5.5. 関手 $\mathcal{A} \mapsto \mathcal{A}^{\circ}$ が、almost perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle$ 代数の圏から、 $((\mathcal{K}\langle T^{1/p^{\infty}} \rangle)^{\circ})^a$ 代数 A^a であって、 \mathcal{K}° 上 flat、 ϖ 進完備、 $A^a/\varpi_{1/p} \xrightarrow{x \mapsto x^p} A^a/\varpi$ が全単射になるものからなる圏への圏同値を与える。

これは補題 3.2.2 の almost 版とみなすことが出来る。証明についても almost になっていることに注意すれば同様にできる。

$\mathcal{A}^{\hat{a}}$ -uBan の対象 $\mathcal{B}^{\hat{a}}$ が $\mathcal{A}^{\hat{a}}$ 上 almost finit étale であるとは、 \mathcal{B}^a が \mathcal{A}^a 上 finite étale (section 1.8) になることである。

命題 3.5.6. \mathcal{A} を almost perfectoid とすると、次の圏同値

$$\left\{ \text{almost finite étale almost perfectoid } \mathcal{A}^{\hat{a}} \text{ 代数} \right\} \xrightarrow{\cong} \left\{ \text{finite étale } (\mathcal{A}^{\circ})^a \text{ 代数} \right\} \quad (3.93)$$

が $((-)^{\circ})^a$ により与えられる。

これは定理 3.4.1 の almost 版とみなすことが出来る。証明は命題 3.4.2 と同様にすることができる。

3.6 Epimorphismes (et localisation)

3.6.1

包含関手 $\mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ は定義から忠実充満であり、命題 3.3.3(1) から右随伴 \natural を持つから、epi 射を保つ。^{*82}

\mathcal{B} を perfectoid \mathcal{K} 代数とし、 $\varphi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ を一様 Banach 代数の間の extremal な epi 射とする (section 2.6.1)。 $\mathcal{K}\text{-Perf}$ は命題 3.3.3(1) の通り、 $\mathcal{K}\text{-uBan}$ の coreflective な部分圏であり、その余単位射 $\mathcal{A}^\natural \rightarrow \mathcal{A}$ は mono 射になるから、 $\mathcal{K}\text{-Perf}$ は extremal な epi 射で閉じている ([HS] Prop.4)。^{*83} とくに \mathcal{C} は perfectoid になる。したがって、定義域が perfectoid である extremal な epi 射 φ はすべて $\mathcal{K}\text{-Perf}$ の epi 射になる (一方で、perfectoid \mathcal{K} 代数の圏における任意の epi 射が、 $\mathcal{K}\text{-uBan}$ での extremal な epi 射であるとは限らない)。

たとえば、perfectoid スペクトラル \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} と、その元 $g \in \mathcal{A}^\circ$ によって section 2.9.3(2) の (2.171) で定義されるスペクトラル \mathcal{K} 代数 $\mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle$ は \mathcal{A} をノルム部分代数として持つ (包含写像が isometric である)。すると、命題 3.3.4 を perfectoid スペクトラル \mathcal{K} 代数 \mathcal{A} と $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ に適用すると、 $\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ はスペクトラル perfectoid \mathcal{K} 代数であり、一様 Banach \mathcal{K} 代数の間の標準的な射

$$\varphi: \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \longrightarrow \mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle = \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}(T)}^u \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \quad (3.94)$$

は extremal な epi 射になる (定義域は $\mathcal{A}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ と言われるもの ([Mor] Cor.V.1.5.12))。まず、自明なノルム \mathcal{K} 代数の全射 $\mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \rightarrow \mathcal{A} \otimes_{\mathcal{K}(T)} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ について、?(2.17) を考えれば φ は全射連続であるので、section 2.6.1 の議論から φ は extremal な epi 射になる。ゆえに上記の通り $\mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle$ は perfectoid \mathcal{K} 代数になる。ここで $g^b \in (\mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle)^b$ を $g^{1/p^i} \in \mathcal{A}\langle g^{1/p^\infty} \rangle$ の $\varpi = p$ による剰余からなる逆系の元とすると、 $g = \#(g^b)$ となる。

3.6.2 Remarque

以降では用いることはないが、いくつか epi 射に関係する結果を述べておく。 $\varphi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ を一様 Banach \mathcal{K} 代数の射であって、像が稠密になっているとする。これは epi 射だが必ずしも extremal とは限らないが、 \mathcal{B} が perfectoid であるとき \mathcal{C} は perfectoid になる ([KL] Theo.3.6.17(b))。さらに、 φ が全射かつ \mathcal{B} がスペクトラルであれば、(section 2.6.1 のよりも強く、) \mathcal{C} のスペクトラル (半) ノルムはこの φ による商半ノルムであり (almost optimal であるということ)、これらのノルムに関する単位円板の間の射は almost surjective になる ([KL] Prop.3.6.9(c))。

また、 φ が全射であることと、 φ^b が全射であることは同値になる。実際、 $\mathcal{B} = \mathcal{B}^\circ[1/\varpi]$ や $\mathcal{C}^b = \mathcal{C}^{b^\circ}[1/\varpi]$ などから $\varphi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}$ の全射性と $\varphi^\circ: \mathcal{B}^\circ \rightarrow \mathcal{C}^\circ$ の全射性が同値であり、 φ^b についてもそれは同様に同値になっている。すると、中山の補題 (section 1.3) からそれぞれ $\varphi^\circ: \mathcal{B}^\circ/\varpi \rightarrow \mathcal{C}^\circ/\varpi$ の全射性と $\varphi^{b^\circ}: \mathcal{B}^{b^\circ}/\varpi^b \rightarrow \mathcal{C}^{b^\circ}/\varpi^b$ の全射性と同値になる。そしてこれらは \mathcal{B} と \mathcal{C} が perfectoid ゆえ、命題 3.3.1 から同値になる。

さらに、 $\text{Ker}(\varphi^b) \subset \mathcal{B}^b$ は閉根基イデアルであることから、 $\mathcal{B}^b/\text{Ker}(\varphi^b)$ は perfectoid になる ([KL]

^{*82} $\mathcal{K}\text{-Perf}$ の epi 射 $\varphi: \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ を $\mathcal{K}\text{-uBan}$ に移して、任意の対象 \mathcal{C} について $\text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{B}, \mathcal{C}) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{B}, \mathcal{C}^\natural)$ の自然な同型を用いれば良い。

^{*83} $\mathcal{K}\text{-Perf}$ は $\mathcal{K}\text{-uBan}$ の mono-coreflective 部分圏であることから従う。実際、 \mathcal{C} に関する余単位射 $u: \mathcal{C}^\natural \rightarrow \mathcal{C}$ を取ると、随伴性と余単位射の性質から $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-uBan}}(\mathcal{B}, \mathcal{C}) \cong \text{Hom}_{\mathcal{K}\text{-Perf}}(\mathcal{B}, \mathcal{C}^\natural)$ によって、ある $\psi: \mathcal{B} \rightarrow \mathcal{C}^\natural$ が存在して $\varphi = u \circ \psi$ となる。 u は mono 射であって φ は extremal な epi 射だったので u は同型射になるから、 $\mathcal{C} \in \mathcal{K}\text{-Perf}$ になる。一般の場合もこれと全く同様である。

Rem.3.1.6(d))。すると、 $\mathcal{K}\text{-Perf}$ における φ の標準的な分解

$$\mathcal{B} \xrightarrow{\varphi_1} (\mathcal{B}^b / \text{Ker}(\varphi^b))^\# \xrightarrow{\varphi_2} (\mathcal{B} / \text{Ker}(\varphi))^\circ \xrightarrow{\varphi_3} \mathcal{C} \quad (3.95)$$

が取れて、ここで φ_1 は全射であり、 φ_2 は一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏における extremal な epi 射である mono 射であり、 $\varphi_3 \circ \varphi_2$ は mono 射である。

3.6.3

section 2.6.2 のようなアフィノイド局所化に戻り、 $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 上の基本的なスペクトラル perfectoid の例を考える。 \mathcal{K} の標数が 0 であるとき、ある $\varphi^b \in \mathcal{K}^b$ によって得られる元 $\varpi := \#(\varpi^b)$ を取り、 $\varpi^{1/p^i} := \#((\varpi^b)^{1/p^i})$ とする。section 3.3.3(1) の通り $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ の tilt は $\mathcal{K}^b\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ になっていることに注意する。

?任意の j と m に対して (2.134) から得られる $(\mathcal{K}\langle T^{1/p^m} \rangle \{ \varpi^j / T \})^\circ$ は

$$\mathcal{K}^\circ \left[T^{1/p^m}, \left(\frac{\varpi^j}{T} \right)^{1/p^j} \right] := \mathcal{K}^\circ [T^{1/p^m}, U^{1/p^m}] / (T^{1/p^k} U^{1/p^k} - \varpi^{j/p^k})_{k \leq m} \quad (3.96)$$

の完備化 $\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^m}, (\varpi^j / T)^{1/p^m} \rangle$ に等しい。一方で $(\mathcal{K}\langle T^{1/p^m} \rangle \{ \varpi^j / T \})_{\leq 1}$ は

$$\mathcal{K}^\circ \left[T^{1/p^m}, \frac{\varpi^j}{T} \right] := \mathcal{K}^\circ [T^{1/p^m}, U] / (TU - \varpi^j) \quad (3.97)$$

の完備化 $\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^m}, \varpi^j / T \rangle$ に等しい。ここで $m \rightarrow \infty$ で colimit の完備化 (uniform colimit のこと (section 2.9.1)) を取ると section 2.9.3(2) にある通り $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle = \text{uolim}_m \mathcal{K}\langle T^{1/p^m} \rangle$ であることと、補題 2.9.1 および?帰納系が isometric とスペクトラルからなるものから出来ているため section 2.9.1 から、

$$\left(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right)^\circ = \mathcal{K}^\circ \left\langle T^{1/p^\infty}, \left(\frac{\varpi^j}{T} \right)^{1/p^\infty} \right\rangle := \mathcal{K}^\circ [T^{1/p^\infty}, U^{1/p^\infty}] / (\widehat{T^{1/p^k} U^{1/p^k} - \varpi^{j/p^k}})_{k \geq 0} \quad (3.98)$$

になり、単位円板は

$$\left(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right)_{\leq 1} = \mathcal{K}^\circ \left\langle T^{1/p^\infty}, \frac{\varpi^j}{T} \right\rangle = \mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}^\circ \langle T \rangle} \mathcal{K}^\circ \left\langle T, \frac{\varpi^j}{T} \right\rangle \quad (3.99)$$

となる。それゆえ、

$$\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} = \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \mathcal{K} \left\langle T, \frac{\varpi^j}{T} \right\rangle = \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \quad (3.100)$$

は (3.98) から p での剰余の上の Frobenius 射が全射になっていることがわかるから、perfectoid になる。ただし、一様であるが (3.99) より一般にはスペクトラルであるとは限らない。任意の一様 Banach $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{A} に対して、 T の像を g と書くとき、(2.134) で定義される $\mathcal{A}\{ \varpi^j / g \}$ に対して、

$$\mathcal{A} \left\{ \frac{\varpi^j}{g} \right\} \cong \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right) \quad (3.101)$$

$$\cong \left(\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \right) \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right) \quad (3.102)$$

$$\cong \mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right) \quad (3.103)$$

という同型が取れる。ここで、一つ目の同型は (2.138) から、二つ目の同型は完備テンソル積の性質から、三つ目の同型は (3.100) からわかる。

命題 3.6.1. \mathcal{A} をスペクトラルな perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数であるとし、 $g := T \cdot 1 \in \mathcal{A}$ とする。このとき任意の $j \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対して $\mathcal{A}\{\varpi^j/g\}$ は perfectoid $\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数であり、(3.103) から得られる標準的な射

$$\left(\mathcal{A}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle} \mathcal{K}^\circ \left\langle T^{1/p^\infty}, \left(\frac{\varpi^j}{T} \right)^{1/p^\infty} \right\rangle \right)_* \rightarrow \left(\mathcal{A} \left\{ \frac{\varpi^j}{g} \right\} \right)^\circ \quad (3.104)$$

は同型射になる。とくに $\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle} (\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \{\varpi^j/T\})^u$ はスペクトラルになる。

さらに、もし \mathcal{K} の標数が 0 であれば、perfectoid $\mathcal{K}^b \langle T^{1/p^\infty} \rangle$ 代数 \mathcal{A}^b における T の像を g^b とすると (これは $\#(g^b) = g$ を満たし)、 $(\mathcal{A}\{\varpi^j/g\})^b$ は $\mathcal{A}^b \{(\varpi^b)^j/g^b\}$ と同一視できる。

証明. まず、次の同型

$$\left(\mathcal{A}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle} \mathcal{K}^\circ \left\langle T^{1/p^\infty}, \left(\frac{\varpi^j}{T} \right)^{1/p^\infty} \right\rangle \right)_* = \left(\mathcal{A}^\circ \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}^\circ \langle T^{1/p^\infty} \rangle} \left(\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right)^\circ \right)_* \quad (3.105)$$

$$\cong \left(\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle} \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right) \quad (3.106)$$

$$\cong \left(\mathcal{A} \left\{ \frac{\varpi^j}{T} \right\} \right) \quad (3.107)$$

がわかる。ここで、一つ目の等号は (3.98) の定義から、二つ目の同型は上で見たとおり出てくるものがすべて \mathcal{K} 上の perfectoid であるから命題 3.3.4 から、三つ目の同型は (3.103) からわかる。

また、 $\mathcal{A}, \mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle, (\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \{\varpi^j/g\})^u$ がすべてスペクトラル perfectoid になるから、命題 3.3.4 より $\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle}^u (\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \{\varpi^j/T\})^u$ と $\mathcal{A} \widehat{\otimes}_{\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle} (\mathcal{K}\langle T^{1/p^\infty} \rangle \{\varpi^j/T\})^u$ が一致するのでとくにこれはスペクトラルになる。□

3.6.4 Remarque

同様の議論によって、 f_1, \dots, f_n, g が整合的な p 冪乗根を持つならば $\mathcal{A}\{(f_1, \dots, f_n)/g\}$ は perfectoid になる。この性質は f_1, \dots, f_n, g に関するこの性質が無くても成り立つ。Scholze は命題 3.6.1 と、さらに $\widehat{\otimes}$ の結果以上に [Sch] Def.2.13, Theo.6.3(ii), Lem.6.4(iii) を用いることで導いた。そこでは $f_i, g \in \mathcal{A}^\circ$ を $\#((\tilde{f}_i)^b), \#((\tilde{g})^b)$ という形で表す approximation lemma ([Sch] Cor.6.7(i)) を用いている。

3.7 Produits (et transformee de Gelfand)

3.7.1

perfectoid の uniform product (section 2.7.1) はまた perfectoid になる。これは section 2.7.1 の通り、 $(\prod^u \mathcal{A}^\alpha)^\circ = \prod (\mathcal{A}^\alpha)^\circ$ と $(\prod (\mathcal{A}^\alpha)^\circ)/\varpi \cong \prod (\mathcal{A}^\alpha/\varpi)$ より従う。

命題 3.7.1. \mathcal{A} を perfectoid とするとき、同じく Gelfand transformation $\Gamma(\mathcal{A})$ (section 2.7.3) も perfectoid になる。さらに $\Gamma(\mathcal{A}^b) = (\Gamma(\mathcal{A}))^b$ が成り立つ。^{*84}

証明. (b) を詳しく考え直す。section 2.7.3 の定義から $\Gamma(\mathcal{A})$ は体 $\mathcal{H}(x)$ たちの uniform product になっている。この体 $\mathcal{H}(x)$ がすべて perfectoid となれば上の section 3.7.1 の議論から $\Gamma(\mathcal{A})$ が perfectoid であることが分かる。実際、[KL] Lem.2.4.17 から $\mathcal{H}(x)$ は \mathcal{A} の有理局所化の uniform colimit になり、section 3.6.4 と後に示す section 3.9.1 より $\mathcal{H}(x)$ は perfectoid になる。tilt に関する主張については、有利局所化と tilt の可換性 (section 3.6.4) と、[KL] Theo.3.3.7(b) からわかる同相 $\mathcal{M}(\mathcal{A}) \cong \mathcal{M}(\mathcal{A}^b)$ から分かる。□

3.8 Limites

3.8.1

perfectoid \mathcal{K} 代数からなる圏は完備である。すなわち、任意の (small) limit が存在する。このことは、 \mathcal{K} -uBan が完備であること (section 2.8.1) と、 \mathcal{K} -Perf が \mathcal{K} -uBan の coreflective な部分圏であること (すなわち、包含関手が右随伴を持つ (命題 3.2.1, 命題 3.3.3)) と合わせて [HS] Theo.2, Cor から存在性がわかる。とくに \mathcal{K} -uBan の limit のそれぞれの右随伴による余単位射が \mathcal{K} -Perf の limit になる。

具体的に計算する。 \mathcal{K} の標数が $p > 0$ のとき、包含関手 $\mathcal{K}\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ は左随伴 $\mathcal{A} \mapsto \text{ucolim } \mathcal{A}^{1/p^i}$ を持つ (命題 3.2.1) から包含関手は limit を保つ。すなわち、 \mathcal{K} -uBan における limit の一意性から \mathcal{K} -Perf は limit として ulim (section 2.8.1) を持つ。

任意標数の \mathcal{K} に対して、 $\flat: \mathcal{K}\text{-uBan} \rightarrow \mathcal{K}^b\text{-Perf}$ は左随伴 $\flat \circ \sharp: \mathcal{K}^b\text{-Perf} \rightarrow \mathcal{K}\text{-uBan}$ を持ち、共に limit として ulim を持つから、 \flat は limit と可換、すなわち ulim と可換になる。

\mathcal{K} の標数が 0 のとき、 $\mathcal{K}\text{-Perf}$ 内の射影系 (\mathcal{A}_α) に対して、まず $\mathcal{K}\text{-uBan}$ で limit を取ると $\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha$ になる。定理 3.3.2(1) の圏同値から \flat で移した $\mathcal{K}^b\text{-Perf}$ における射影系 (\mathcal{A}_α^b) が取れて、標数 $p > 0$ の場合で述べた通りこの limit は $\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha^b$ である。上記の可換性から $\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha^b = (\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha)^b$ となる。これを圏同値関手 \flat の準逆関手 \sharp で戻すと $(\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha)^b$ となり、圏同値性からこれは $\mathcal{K}\text{-Perf}$ における limit になっている (これは一般には $\text{ulim } \mathcal{A}_\alpha$ と一致しない (section 3.8.4 と section 3.8.5))。これは標数 0 のときは、存在性を言うために使った右随伴が命題 3.3.3 の \flat であることから分かる。

これらの $\mathcal{K}\text{-Perf}$ における limit を perfectoid limit という。

3.8.2

標数 0 のとき、perfectoid limit と uniform limit は必ずしも一致しない。^{*85}

この現象は finite limit のとき既に現れている。すなわち、perfectoid 代数の中の perfectoid 部分代数の共通部分が perfectoid になるとは限らない。ここで、次の

$$\widehat{A}_\infty[\sqrt{g}] = \widehat{Q(A_\infty)}(\sqrt{g}) \cap \widehat{A}_\infty\langle g^{1/2^\infty} \rangle \subset Q(\widehat{A_\infty}\langle g^{1/2^\infty} \rangle) \quad (3.108)$$

が成り立つ。ここで、section 3.4.2 から共通部分は perfectoid になっていないが、section 3.2.3(2) から \widehat{A}_∞ は perfectoid であり、 $\widehat{Q(A_\infty)}$ も perfectoid であってその拡大を考えれば $\widehat{Q(A_\infty)}(\sqrt{g})$ も perfectoid にな

^{*85} limit の普遍性を確認すべき対象が $\mathcal{K}\text{-Perf}$ になると少なくとも済み、さらに perfectoid になっていないといけないことから ulim から少し変化する。

る。さらに section 3.6.1 から $\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle$ は perfectoid であり、section 3.2.2(1) から $Q(\widehat{A_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle})$ は perfectoid であるからこれが反例になっている。

成り立つ事柄として次のことがある。

命題 3.8.1. perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{B} と、それに (\mathcal{K} を固定して) isometric に作用する有限群 G による不変部分環 \mathcal{B}^G は perfectoid \mathcal{K} 代数になる。さらに tilt によって G を \mathcal{B}^\flat 上に isometric に作用させることができ、このとき $(\mathcal{B}^\flat)^G = (\mathcal{B}^G)^\flat$ になっている。

証明. まず $\mathcal{B}^\flat = \mathcal{B}^{\flat\circ}[1/\varpi^\flat] \ni (\overline{b_n})/(\varpi^\flat)^k$ に $g \in G$ を次のように作用させる。

$$g \left(\frac{(\overline{b_n})}{(\varpi^\flat)^k} \right) := \frac{(\overline{g(b_n)})}{(\varpi^\flat)^k}. \quad (3.109)$$

すると、これは確かに作用になっていて \mathcal{K}^\flat 上のノルム (3.18) や $\mathcal{B}^{\flat\circ}$ 上のノルムの定義 (3.21) から、 G は \mathcal{B}^\flat 上 \mathcal{K}^\flat を固定して isometric に作用する。

ここで、 \mathcal{B}^G と $(\mathcal{B}^\flat)^G$ はそれぞれ、明らかに \mathcal{B} と \mathcal{B}^\flat の中の一樣 Banach \mathcal{K} 部分代数である。ここでとくに \mathcal{B} が perfectoid より、 \mathcal{B}^\flat が完全であること (section 3.2.2(2)) から $(\mathcal{B}^\flat)^G$ も perfectoid \mathcal{K}^\flat 代数になる。そこで untild を取った $((\mathcal{B}^\flat)^G)^\sharp$ は perfectoid \mathcal{K} 代数になっている。 $\mathcal{B} \cong ((\mathcal{B}^\flat)^G)^\sharp$ を示す。

まず \mathcal{B} は perfectoid であるから、定理 3.3.2(1) より $\mathcal{B} \cong (\mathcal{B}^\flat)^\sharp = W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p] \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K}$ となっている。ここで、この同型射は $\mathcal{B}^{\flat\circ}$ の Teichmuller map $[-]: \mathcal{B}^{\flat\circ} \rightarrow W(\mathcal{B}^{\flat\circ})$ によって [Mor] Theo.V.1.4.3 から

$$W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p] \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K} \longrightarrow \mathcal{B} \quad (3.110)$$

$$\left(\sum_{n \geq 0} [a_n] p^n \right) / p^k \otimes x \longmapsto x / p^k \cdot \sum_{n \geq 0} \#(a_n) p^n \quad (3.111)$$

となっているから、 G の \mathcal{B} の作用を考えると $g \in G$ はこの定義域側に $g((\sum_{n \geq 0} [a_n] p^n) / p^k \otimes x) = (\sum_{n \geq 0} [g(a_n)] p^n) / p^k \otimes x$ と作用する。ここで、

$$\mathcal{B}^G \cong \left(\left(W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p] \right) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K} \right)^G = \left(W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p] \right)^G \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K} \quad (3.112)$$

$$= \left(W(\mathcal{B}^{\flat\circ})^G[1/p] \right) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K} = W((\mathcal{B}^{\flat\circ})^G)[1/p] \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K} \quad (3.113)$$

$$= ((\mathcal{B}^\flat)^G)^\sharp \quad (3.114)$$

となる。ここで、一つ目の同型は上で述べたことから、三つ目の等号は $p \in \mathcal{K}$ より G で不変であることから、四つ目の等号は $W(\mathcal{B}^{\flat\circ})$ 上への作用の定義と Teichmuller map の単射性から、五つ目の等号は section 3.3.5 の定義からわかる。二つ目については、まず G が有限群であるから、(任意の環上で) G 不変部分環と Reynolds 射影

$$t \longmapsto \frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \gamma(t) \quad (3.115)$$

による像が一致している。とくに $(W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p]) \otimes_{W(\mathcal{K}^{\flat\circ})[1/p]} \mathcal{K}$ の元 $t := (\sum_{n \geq 0} [a_n] p^n) / p^k \otimes x$ に対して考えると、作用の定義から

$$\frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \gamma(t) = \frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \gamma \left(\left(\sum_{n \geq 0} [a_n] p^n \right) / p^k \otimes x \right) = \frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \left(\left(\sum_{n \geq 0} [\gamma(a_n)] p^n \right) / p^k \otimes x \right) \quad (3.116)$$

$$= \left(\frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \left(\sum_{n \geq 0} [\gamma(a_n)] p^n \right) \right) / p^k \otimes x = \left(\frac{1}{|G|} \sum_{\gamma \in G} \gamma \left(\sum_{n \geq 0} [a_n] p^n \right) \right) / p^k \otimes x \quad (3.117)$$

となり、 $W(\mathcal{B}^{\flat\circ})[1/p]$ 上の Reynolds 射影についても考えることでこれらの像が一致するから二つ目の等式も成り立つ。 \square

3.8.3 Remarque

上記の命題 3.8.1 は無限群 G の場合に拡張することは出来ない。section 3.2.3(2) の例で $n = 1$ とすると、 \mathbb{Z}_p の $T_1^{1/p^\infty} \subset \hat{A}_\infty$ への Galois 作用は連続に perfectoid 代数 \hat{A}_∞ 上へと拡張できて、 $A_0 = A = W(k)[[T_1]]$ がその G 不変部分環になるが、これは perfectoid になっていない。

3.8.4

\mathcal{K} の標数が 0 であるとする。 \mathcal{K}^\flat がその tilt であり、 $\varpi \in \mathcal{K}$ を、ある $\varpi^\flat \in \mathcal{K}^\flat$ による $\varpi := \#(\varpi^\flat)$ となるものとする。perfectoid \mathcal{K} 代数からなる射影系 (\mathcal{A}^α) の tilt $((\mathcal{A}^\alpha)^\flat)$ の perfectoid limit は section 3.8.1 から、 $\mathcal{A} := \text{ulim}(\mathcal{A}^\alpha)^\flat \in \mathcal{K}\text{-uBan}$ と置くと、 $\mathcal{A}^\flat = \text{ulim}(\mathcal{A}^\alpha)^\flat$ によって与えられる。

また、section 3.8.1 より (\mathcal{A}^α) の perfectoid limit は \mathcal{A} ではなく \mathcal{A}^\sharp になっている。その tilt は

$$(\mathcal{A}^\sharp)^{\flat\circ} = ((\mathcal{A}^{\sharp\flat})^\flat)^\circ = \mathcal{A}^{\flat\circ} = \mathcal{A}^{\flat\circ} = \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ / \varpi \cong \varprojlim_F \mathcal{A}^\circ = \varprojlim_F (\text{ulim} \mathcal{A}^\alpha)^\circ \quad (3.118)$$

$$= \varprojlim_F \varprojlim_\alpha (\mathcal{A}^\alpha)^\circ = \varprojlim_\alpha \varprojlim_F (\mathcal{A}^\alpha)^\circ \cong \varprojlim_\alpha (\mathcal{A}^\alpha)^{\flat\circ} = \varprojlim_\alpha \varprojlim_F (\mathcal{A}^\alpha)^\circ / \varpi \quad (3.119)$$

となる。ここでは定理 3.3.2 や section 3.3.2 や (2.157) を用いた。 \natural に関する余単位射 $\mathcal{A}^\sharp \rightarrow \mathcal{A}$ は次の例で分かる通り、一般には同型にならない。

3.8.5 Exemple prophylactique

section 3.4.2 の例を用いる。後の??で示される通り、 $\hat{A}_\infty \langle g^{1/2^g} \rangle \{ \varpi^j / g \}$ の uniform limit (section 2.8.1) は $g^{-1/2^\infty} \hat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle$ になり、これは $\hat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle [1/g]$ 内の $\hat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle$ の completely integral closure に他ならない (??)。 $2\mathbb{Z}_2$ 不変な部分を取ると、 $(\hat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle \{ \varpi^j / g \})^{2\mathbb{Z}_2}$ の uniform limit \mathcal{B} は $\hat{A}_\infty[\sqrt{g}, 1/g]$ 内の $\hat{A}_\infty[\sqrt{g}] = \hat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle$ の completely integral closure にほかならない (??と??)。

ここで、??より \hat{A}_∞ は (その商体の中で) completely integrally closed になっている。また、(商体の中で) completely integrally closed な環の商体の代数拡大における、その環の integral closure は completely integrally closed であることが知られているから、 $\mathcal{B} = \hat{A}_\infty[\sqrt{g}]$ となり、これは perfectoid ではないため、一般に uniform limit は perfectoid limit と一致しない。以上をまとめると、

$$\begin{array}{ccccc}
\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle [1/g] & \xleftarrow{\hspace{10em}} & \widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle [\sqrt{g}, 1/g] \\
\uparrow & & \uparrow \\
g^{-1/2^\infty} \widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle & \xlongequal{\hspace{1em}} & \text{ulim}_j \widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^j} \rangle \{ \varpi^j / g \} \\
\parallel & & \uparrow \\
\left(\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle \right)^*_{\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle [1/g]} & & \mathcal{B} := \text{ulim}_j \left(\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle \{ \varpi^j / g \} \right)^{2\mathbb{Z}_2} \xlongequal{\hspace{1em}} \left(\widehat{A}_\infty [\sqrt{g}] \right)^*_{\widehat{A}_\infty [\sqrt{g}, 1/g]} \\
\uparrow & & \uparrow \\
\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle & & \left(\widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle \{ \varpi^j / g \} \right)^{2\mathbb{Z}_2} \\
\uparrow & \swarrow & \uparrow \\
\widehat{A}_\infty & \xrightarrow{\hspace{1em}} & \widehat{A}_\infty \langle g^{1/2^\infty} \rangle^{2\mathbb{Z}_2} \xlongequal{\hspace{1em}} \widehat{A}_\infty [\sqrt{g}]
\end{array}$$

となっている。

3.9 Colimits

3.9.1

perfectoid \mathcal{K} 代数の圏は filtered colimit を持ち、それは uniform colimit (section 2.9.1) によって与えられる (\mathcal{K} -uBan の coreflective な部分圏であるから、[HS] Theo.1 からわかる)。実際、filtered な射影系 (\mathcal{B}_α) に対して、perfectoid より $\mathcal{B}_\alpha^\circ / \varpi$ 上の Frobenius 射は全射になっていて、section 2.9.1 の $(\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha)^\circ = (\widehat{\lim_{\rightarrow} (\mathcal{B}_\alpha^\circ)})_*$ に注意すると、

$$(\lim_{\rightarrow} (\mathcal{B}_\alpha^\circ / \varpi))^a \cong (\lim_{\rightarrow} ((\mathcal{B}_\alpha^\circ) / \varpi))^a \cong ((\lim_{\rightarrow} \mathcal{B}_\alpha^\circ) / \varpi)^a \cong (\widehat{\lim_{\rightarrow} \mathcal{B}_\alpha^\circ} / \varpi)^a \quad (3.120)$$

$$\cong ((\widehat{\lim_{\rightarrow} \mathcal{B}_\alpha^\circ})^a) / \varpi \cong ((\widehat{\lim_{\rightarrow} \mathcal{B}_\alpha^\circ})_*)^a / \varpi \cong (\text{ucolim } \mathcal{B}_\alpha^\circ)^a / \varpi \quad (3.121)$$

?という同型があるからわかる。

\mathcal{K} -Perf は push-out を $\widehat{\otimes}^u = \widehat{\otimes}$ で持っていた (section 3.3.4) から、 \mathcal{K} -Perf は余完備になっている。とくに colimit は一様 Banach \mathcal{K} 代数の圏で計算した ucolim をそのまま持つ。とくにその普遍性から perfectoid 代数の圏における colimit を取る操作と tilt による圏同値関手 (定理 3.3.2(1)) は可換になる。

3.9.2 Examples

- (1) \mathcal{K} の代数拡大体の完備化 $\widehat{\mathcal{K}}_\infty$ は \mathcal{K} の有限次分離拡大体 \mathcal{K}_i によって $\widehat{\mathcal{K}}_\infty = \text{ucolim } \mathcal{K}_i$ と表せる。このとき定理 3.4.1(1) から \mathcal{K}_i は \mathcal{K} 上の perfectoid 代数になっているので section 3.9.1 より $\widehat{\mathcal{K}}_\infty$ は \mathcal{K} 上の perfectoid field になる (もしくは系 3.1.2 からわかる)。
- (2) perfectoid \mathcal{K} 代数の族 (\mathcal{B}_α) の余積は (無限も許した) 完備テンソル積 $\widehat{\otimes}_{\mathcal{K}} \mathcal{B}_\alpha = \widehat{\otimes}_\alpha \mathcal{B}_\alpha$ によって実現できる。任意の perfectoid \mathcal{K} 代数 \mathcal{B} に対して

$$\widehat{\bigotimes}_{\alpha \in \mathcal{B}^{\flat\circ}} \mathcal{K} \langle T^{1/p^\infty} \rangle \longrightarrow \mathcal{B} \quad (3.122)$$

$$T_\alpha \longmapsto \#(\alpha) \quad (3.123)$$

の像は稠密である。これはこの像が $\#(\mathcal{B}^{\flat\circ})$ であることと section 3.3.4(1) から分かる。

4 Analyse perfectoide autour du "theoreme d'extension de Riemann"

Riemann の拡張定理は解析的部分空間 (ある解析的関数の零点からなる超曲面) を除去した複素多重円板上で有界な解析的関数はその多重円板上全体で解析的な関数に拡張できるという定理である。この定理の p 進類似は既に知られている。section 3.2.3(2) の記号を用いると、任意の $g \in A \setminus \{0\}$ に対して

$$A = \varprojlim \left(A_0 \left\{ \frac{\varpi^j}{g} \right\} \right)^\circ \quad (4.1)$$

が成り立つことが、この Riemann の拡張定理の perfectoid 類似であり、これをこの章で扱う。

4.1 Entree en matiere

まずは (4.1) よりも弱い主張の

$$A = \varprojlim \left(A_0 \left\{ \frac{\varpi^j}{g} \right\} \right)_{\leq 1} \quad (4.2)$$

に短い証明を与える。ただしここで section 3.2.3(2) のように、 $\mathcal{K}_0 := K_0 = W(k)$ であって、 $A := \mathcal{K}_0^\circ[[T_{\leq n}]]$ と $A_0 := A[1/p]$ となっていて、 $g \in A \setminus \{0\}$ である。 g が定数でないと仮定できる。さらに T_1, \dots, T_n を同型で移す (永田のトリック) ことで g を T_n に関して Weierstrass 型 (distinguished in T_n と呼ばれる) になるとしてよい ([Bou] VII, section 3, n.7, lemme 3)。すなわち $g \in A \setminus (p, T_1, \dots, T_n)A$ となる。さらに Weierstrass preparation theorem ^{*86} ([Bou] VII, section 3, n.8, prop.5) から、

$$A/gA \cong \bigoplus_{s=0}^{r-1} \mathcal{K}_0^\circ[[T_{<n}]]T_n^s \quad (4.3)$$

となる。ここで r は g の $(p, T_{<n})$ による剰余の T_n 進付値の値である (Weierstrass 型だから T_n の多項式として表せて、そのときの T_n の次数のこと)。すると、 $A \rightarrow \bigoplus_{s=0}^{r-1} \mathcal{K}_0^\circ[[T_{<n}, g]]T_n^s$ と、その g での剰余を考えることで ($?A$ が g 進完備より) 中山の補題から

$$A \cong \bigoplus_{s=0}^{r-1} \mathcal{K}_0^\circ[[T_{<n}, g]]T_n^s \quad (4.4)$$

という同型が得られる。

Index des symboles

| | |
|---|-------------------------------|
| $(-)^\dagger, (-)^+, (-)^*$ | section 2.3.1, |
| $(-)^a, (-)_*, (-)!, (-)!!$ | section 1.2, section 1.4, |
| $(-)^{\widehat{a}}, (-)^{\widehat{*}}, (-)^{\widehat{\Pi}}$ | section 2.3.5, section 2.3.6, |
| $(-)^u, \widehat{\otimes}^u$ | section 2.2.5, |
| ulim, ucolim | section 2.8.1, section 2.9.1, |
| $\flat, \#$ | section 3.3.2, section 3.3.5, |

^{*86} これと同値な Weierstrass division theorem の方でもよい。

| | |
|---|-------------------------------|
| \natural | section 3.3.6, section 3.5.4, |
| $g^{-1/p^\infty}(-)$ | section 2.5.2, section 3.5.3, |
| $(-)\langle g^{1/p^\infty} \rangle$ | section 2.9.3, section 3.6.1, |
| $(-)\{\lambda/g\}$ | section 2.6.2, section 3.6.3. |

参考文献

- [An1] Y. André, “Le lemme d’Abhyankar perfectoides,” Publ.math.IHES, vol. 127, no. 1, pp. 1-70, Jun. 2018.
- [GR] O. Gabber and L. Ramero, Almost Ring Theory. Berlin, Heidelberg: Springer, 2003.
- [AM] M. F. Atiyah and G. Macdonald, Introduction to Commutative Algebra. Addison-Wesley, 1994.
- [BGR] S. Bosch, U. Güntzer, and R. Remmert, Non-Archimedean Analysis: A Systematic Approach to Rigid Analytic Geometry. Springer Berlin Heidelberg, 1984.
- [DM] R. Datta and T. Murayama, “Tate algebras and Frobenius non-splitting of excellent regular rings,” arXiv:2003.13714 [math], Oct. 2021, Accessed: Dec. 27, 2021. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/2003.13714>
- [KL] K. S. Kedlaya and R. Liu, “Relative p-adic Hodge theory: Foundations,” arXiv:1301.0792 [math], May 2015, Accessed: Aug. 08, 2021. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/1301.0792>
- [Ari] B. Bhatt et al, Perfectoid spaces: lectures from the 2017 Arizona Winter School. Providence, Rhode Island: American Mathematical Society, 2019.
- [Mor] S. Morel, “Adic spaces”, [Online]. Available: http://perso.ens-lyon.fr/sophie.morel/adic_notes.pdf
- [Mih] T. Mihara, “On Tate Acyclicity and Uniformity of Berkovich Spectra and Adic Spectra v1,” Isr. J. Math., vol. 216, no. 1, pp. 61 – 105, Oct. 2016, doi: 10.1007/s11856-016-1404-8.
- [Ber] V. G. Berkovich, Spectral Theory and Analytic Geometry over Non-Archimedean Fields. American Mathematical Soc., 2012.
- [Sch] P. Scholze, “Perfectoid spaces,” arXiv:1111.4914 [math], Nov. 2011, Accessed: Dec. 22, 2020. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/1111.4914>
- [Gun] U. Güntzer, “The norm of uniform convergence on the k -algebraic maximal spectrum of an algebra over a non-archimedean valuation field k ,” Mém. Soc. Math. France, vol. 1, pp. 101 – 121, 1974, doi: 10.24033/msmf.164.
- [Bha] B. Bhatt, “Lecture notes for a class on perfectoid spaces”, [Online]. Available: <http://www-personal.umich.edu/~bhattb/teaching/mat679w17/lectures.pdf>
- [Fon] J.-M. Fontaine, “Perfectoides, presque pureté et monodromie-poids (d’après Peter Scholze),” in Astérisque, 2013, p. Exp. No. 1057, x, 509-534. Accessed: Jul. 22, 2021. [Online]. Available: <https://mathscinet.ams.org/mathscinet-getitem?mr=3087355>
- [Hen] T. Henkel, “An Open Mapping Theorem for rings which have a zero sequence of units,” arXiv:1407.5647 [math], Oct. 2014, Accessed: Jan. 18, 2022. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/1407.5647>
- [MSE1] “abstract algebra - Local rank and direct sum decomposition,” Mathe-

- mathematics Stack Exchange. <https://math.stackexchange.com/questions/436641/local-rank-and-direct-sum-decomposition> (accessed Jan. 19, 2022).
- [MSE2] “abstract algebra - Rank of projective module,” Mathematics Stack Exchange. <https://math.stackexchange.com/questions/133333/rank-of-projective-module> (accessed Jan. 19, 2022).
- [SP] “The Stacks project.” <https://stacks.math.columbia.edu>.
- [Was] I. Waschies, “Microlocal perverse sheaves,” arXiv:math/0209341, Sep. 2002, Accessed: Jan. 19, 2022. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/math/0209341>
- [Shi] K. Shimomoto, “An application of the almost purity theorem to the homological conjectures,” Journal of Pure and Applied Algebra, vol. 220, no. 2, pp. 621 – 632, Feb. 2016, doi: 10.1016/j.jpaa.2015.07.008.
- [HS] H. Herrlich and G. E. Strecker, “Coreflective Subcategories,” Transactions of the American Mathematical Society, vol. 157, pp. 205 – 226, 1971, doi: 10.2307/1995843.
- [Kel] K. S. Kedlaya, “Topics in Algebraic Geometry (rigid analytic geometry),” 2004, [Online]. Available: <https://kskedlaya.org/18.727/p-adic2.pdf>
- [Bou] N. Bourbaki, Commutative algebra. Paris, Reading, Mass: Hermann; Addison-Wesley Pub. Co, 1972.
- [He] T. Henkel, “An Open Mapping Theorem for rings which have a zero sequence of units,” arXiv:1407.5647 [math], Oct. 2014, Accessed: Jan. 18, 2022. [Online]. Available: <http://arxiv.org/abs/1407.5647>